令和2年度

NIE実践報告書 第32号

Newspaper in Education



教育に新聞を

宮城県NIE委員会

宮城県NIE委員会実践報告書

<第32号>

==== 目 次 ====

Ι	あいさつ													
		宮城県NIE委員会	会 長	中里	寛					•	•		•	1
		宮城県NIE推進委員会	委員長	田中	元昭	• •	• •	• •	•	• •	•	• •	•	2
Π	寄稿													
		宮城県NIE委員会	副会長	古田	耕一	• •	• •	•	• •	• •	•	•	•	• 3
Ш	宮城県 NIE	研究大会の報告												
		と内容			•									• 4
		大会報告(オンライン開催)			•			•				•		• 5
	• 開	会行事												
	• 児	童・生徒による意見交換会												
	• 閉	会												
	(3) アン	ケート結果						•	• •		•	•	•	1 5
IV	実践指定校	の実践報告												
	(1) 仙	台市立泉松陵小学校・・・						•	• •		•	•	•	1 6
	(2) 仙	台市立長命ケ丘小学校・						•	• •		•	•	• '	2 2
	(3) 大	崎市立岩出山中学校・・・				• •	• •		• •	•	•	•	•	2 6
		城県多賀城高等学校・・・												
	(5) 仙	台市立東仙台小学校・・・						•	• •		•	•	• ;	3 4
	(6) 石	巻市立湊小学校 ・・・・						•	• •		•	•	• ;	3 6
	(7) 松	島町立松島第二小学校・・						•	• •		•	•	• 4	4 0
		田市立角田中学校・・・・												
		城県泉高等学校・・・・・												
		城県宮城広瀬高等学校・・												
		台城南高等学校・・・・・												
	(12) 宮	城県名取高等学校・・・・									•	•	• [5 5

V	全国大会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 9												
	(1) 開会式												
	(2) 記念講演 演題「社会の声をつむぐ小説 伝える新聞」 講師 真山 仁氏・・・60												
	(3) 日本 NIE 学会との共同シンポジウム ・・・・・・・・・・・・・・・63												
	テーマ「ウィズコロナ時代に NIE で培う力~ともに生き、つながるための資質・能力」												
	シンポジスト:												
	真山仁氏(小説家)												
	大滝一登氏(文部科学省初等中等教育局視学官)												
	土屋武志氏(日本 NIE 学会副会長、愛知教育大学教授)												
	本杉宏志氏(東京都立青山高等学校主幹教諭、NIE アドバイザー)												
	水木智香子氏(足立区立西新井小学校教諭)												
	城島徹氏(毎日新聞社教育事業室編集委員)												
	司会:関口修司氏(日本新聞協会 NIE コーディネーター)												
	(4) 分科会一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6 9												
VI	部会活動実践報告												
VI	(1) 小学校部会報告 小学校部会長 仙台市立岡田小学校 校長 阿部 謙・・・・70												
	(2) 高校部会報告 高校部会長 仙台城南高等学校 教諭 鈴木 理恵・・・71												
VII	研修会報告												
	(1) 地区研修会(角田市立角田中学校開催)の概要 ・・・・・・・・・・72												
	(2) NIE研修会(仙台市立泉松陵小学校開催)の概要 ・・・・・・・・73												
VIII	研究組織												
	(1) 宮城県NIE委員会会則 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 4												
	(2) 宮城県NIE推進委員会会則 · · · · · · · · · · · · · · · 7 5												
	(3) 宮城県NIE委員会及び宮城県NIE推進委員会の構成 ・・・・・・・・76												
IX	宮城県NIEの歩み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78												
X	編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82												
41	700元以上												

I あいさつ



「普段着の活動」の継続を

宮城県NIE委員会 会長中里 寛 (大河原町立大河原中学校長)

世界史に大きく刻まれるであろうコロナ禍がいまだ収まらない中、今年度もNIEの地道な取り組みが、熱意ある関係者各位のご尽力により継続できましたこと、そして実践報告書が刊行できますことに、心から感謝申し上げます。

さて、「教育に新聞を」の合言葉により、今や世界60カ国以上で取り入れられているNIEでありますが、日本でも、昭和60年に提唱されて以来、現在は全国の多くの学校で実践されているところです。

今や、教育現場の様々な場面で新聞が活用されているわけですが、それだけ、このNIEの持つ学習効果というものが評価されていると理解することができます。この学習効果ということについては多くの視点がありますが、二つの点についてお話をさせていただきます。

一つ目は、学力向上の視点です。全国学力学習 状況調査では、「新聞などのニュースに関心のあ る子どもは正答率が高い」という結果が出ている ことは、学力向上を目指す指導者にとってみれば 注目すべき視点です。特に、子どもたちに今求め られている活用型の学力が、新聞を活用すること により、学習指導要領の柱となっている「言語活 動の充実」を図りながら伸ばすことが可能だとい う点で注目されているところです。

そして二つ目は、子どもたちの社会への関心を 高めるという点で、優れた学習材となるという点 です。新聞は自分と社会との接点を見出す窓口で す。新聞から、「授業で学習していることは、自分 の身近な社会で、実際に起きているんだ」「自分に も関わるんだ」「自分と世界はつながっているん だ」ということに気づき、「自分と社会との関わり」を学ぶ貴重な学習材となるという点です。特に、今回のコロナ禍で私たちが経験したように、世界情勢が何かのきっかけでがらっと変わりかねない世の中、予測することが難しい世の中においては、新しい情報を集め、何が正しいかを判断し、今自分が何をすべきか、自分に何が出来るかを考える力を身につけることは重要です。多くの新聞から様々な状況を読み取り、取捨選択、比較検討しながら主体的に考えを深めていく力は、これからの時代を生き抜く、公民としての大切な素養となると確信します。

さて、今年度の宮城県NIE研究大会は、県内7校の小中学校及び高校の先生方と児童・生徒の皆さんをネットでつないで実施しました。各校の価値の高い取り組み紹介、そして活発な意見交換会となりました。日頃からの各校の皆さんの素晴らしい活動を共有することで、先ほど申し上げたNIEの学習効果を再認識することができたと思います。

コロナ禍の終焉が見通せない状況が続けば、今 後のNIE活動に制約が出ることも危惧されます が、各学校におかれましては、NIEの意義をご 理解いただき、日常の教育活動の中で構えない継 続的な「普段着の活動」を積み重ねていただけま すようお願い申し上げます。

日頃からNIEに取り組んでいらっしゃる各学校の先生方と児童生徒の皆さん、NIE推進委員会の皆様、関係各位のご協力に御礼を申し上げ、挨拶とさせていただきます。



NIE が果たす役割

~コロナ禍で改めて考えたこと~

宮城県NIE推進委員会

委員長 田 中 元 昭 (仙台市立中山中学校長)

日本の学校教育における知識偏重からの脱却は、 その時々の社会的風潮や教育課題によって、考え 方や捉え方が変化してきた歴史を持つ。資本主義 経済が景気変動を伴うように学力もまた、様々な 要因によって上下し、学力観は教育施策に強く影 響する。新型コロナウイルス感染症が世界的規模 で流行し、新しい学習指導要領の全面実施が進行 する中、改めて「知識」と「活用」について考え、 NIEが果たす役割を記したいと思う。

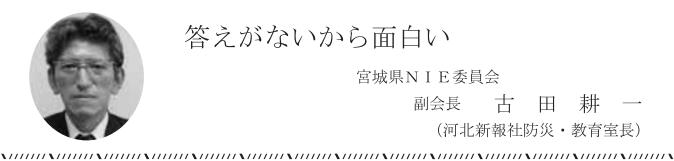
令和2年に入って間もなくして、国内での感染 拡大が問題となり、日本中が右往左往した。繁華 街や飲食店の営業自粛などよりも先に、公共施設 の利用停止や学校の全国一斉の臨時休校などが行 われ、今にして思えば見当違いも多かったと言え る。有識者や専門家をはじめ政治家や行政職員に 至るまで、その道の人たちに「考える力」が無かっ たはずはない。この新しいウイルスに対する「知 識」と「情報」が乏しかった結果である。考えるこ とは誰にでもできるが、その結果が正しい結論に 結びつかなければ意味が無い。考えるために必要 なのは「知識」であり、その「知識」を正確に理解 するためには、より多くの「知識」がまた必要であ る。それが広く、そして深いほど「考える力」の源 になるのだ。一方で「考える力」が無ければ、得ら れた「知識」は宝の持ち腐れになってしまう。ここ で言う「考える力」は、まさに「思考力・判断力」 であろう。そして「知識」を得るための「情報」と 「活用」が重要になってくるのだ。

新しい学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力として情報活用能力の育成を求めている。 文部科学省では、【情報活用能力は、世の中の様々

な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及 び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を 発見・解決したり自分の考えを形成したりしてい くために必要な資質・能力である。】と示している。 つまり情報活用能力は、予測困難なこれからの社 会において、"児童生徒自身で問題を解決したり、 そもそもどのような問題があるのか発見したり、 それらに対する自分の考えを持ったりする"とい うことを目的とした"情報そのものやICTをはじ めとする情報技術を活用する力"なのだ。ここで いう「情報」とは、新聞・本・テレビ・インターネ ット等から得られる情報や、家族・友達・先生など 人との会話から得られる情報等、自分で見たり聞 いたりして得られる、ありとあらゆる情報のこと を指す。情報活用能力は非常に多岐にわたった資 質・能力であり、必ずしもパソコン等を使った内 容に限定されるものではない。児童生徒が情報活 用能力を使いこなせるようになるまでには、一定 の時間と訓練が必要であるが、一度身に付けた情 報活用能力は、様々な教科や様々な場面で発揮さ れ、新たな課題に直面しても主体的・対話的な活 動が起こりやすくなり、深い学びに結びつくはず

これまで私たちが取り組み、蓄積してきたNIEの研究成果は、NIEが情報活用能力の育成に極めて有効であることを明らかにしてきた。そしてNIEが『豊かな知識の習得』と『正しく考える力の育成』の双方にとって有効であることも確認してきた。「知識」と「考える力」は表裏一体である。NIEが果たす役割はそこにある。

寄稿 Π



答えがないから面白い

宮城県NIE委員会

副会長 古田 (河北新報社防災·教育室長)

東京で2020年11月に開かれた第25回N IE全国大会で、「ハゲタカ」などで知られる作家 の真山仁さんが記念講演をしました。以下は要旨 の一部です。

「中高生と話した時、役所の広報があるからメ ディアはいらないと言われ、驚愕(きょうがく)し た。新聞は偏っていると言う大学生と話すと、読 みもせずに先入観で判断していた。感覚が近い人 とSNSでニュースを共有し、自分が信じること を追認するものが正しいと信じる学生が増えてい る」

この指摘に強い危機感を覚えました。狭い世界 の中で自分の考えが「正解」だと思い込み、視野を 広げようとせず、耳をふさぐ。成長の芽を自ら摘 んでいるようで、危険性も感じました。「知らない ことを知り、疑問を感じるきっかけになる」「読ん で分からなくても、どういうことかと疑う想像力 を持ってもらえるようにする」。真山さんは新聞を 読む意義をそう説きました。

読むことで「なぜ」と思ったり、「面白い」と感 じたり。社会で生きる力、考える力、想像する力な ど、さまざまな力を育むための材料を提供するの が、新聞の役割の一つです。真山さんは「見出しの 大きさや順番で、どの記事が大事かが分かる。そ れを見て多くの若者は、自分の知らないところで 世の中が動いていることに初めて気付く」とも言 っています。

社会を映している以上、日々発行している新聞 そのものにも「正解」はありません。ニュースの価 値基準や選択軸は、例えば地元紙と全国紙など、 新聞社によっても異なります。1面トップに記事 Aを置いた新聞は正解で、記事Bだった新聞は間

違い一。そう思う人はいるかもしれませんが、逆 の人もいるでしょう。極端に言えば、人それぞれ

明確な答えがない中で、新聞の作り手は常に試 されていると言えるかもしれません。

現場の記者は「記事の切り口は間違っていない か」と自問自答しています。社内での編集作業で は、大量に押し寄せる国内外のニュースの価値判 断を求められます。幾つかの段階、協議を経て、各 面に載せる記事と扱いの大きさなどを夕方に一応 は決めますが、その後にニュースが飛び込み、変 更を余儀なくされるのは日常です。「正解」はない のですが、一定の普遍性はあります。必ず載せる べき記事を見逃していないか、順番は妥当か、扱 いは小さすぎたり大きすぎたりしていないか。正 解のない中で、何が一番いいのかを探す。毎日そ の連続です。

知ってほしいのは、多くの人間が情報と格闘し ながら新聞を作っているということです。苦闘し たり、迷ったり、逆に格闘を楽しんだり、思い切っ たり。新聞紙を破れば血が出るかもしれません。 コロナ禍で活動が制限される中、子どもたちにど んな形でもいいから、社会と人の息づかいが伝わ る紙面に触れてもらい、好奇心が膨らむ手助けが できたらと願います。新聞には子どもたちの心を くすぐる工夫がより求められてもいます。

30年以上前、宮城県外の地域紙の記者がこん な話(真偽は不明)をしていました。「うちの新聞 は昔、あまりにも誤字が多かったから、学校で間 違い探しの材料に使われたそうだ」。どんな形でも いいから、と書きましたが、こんな形にはならぬ よう努めます。

□ 令和2年度 宮城県NIE研究大会の報告

(1)日程と内容

<研究大会要項>

- **1 名称** 児童・生徒による意見交換会(オンライン)
- 2 目的

校種を超えて、児童・生徒が自分たちの学校におけるNIE活動の取組を紹介したりその学習を通して考察したりしたことなどを自由に意見交流することによって、児童・生徒が主体的にNIE活動に取り組もうとする宮城県版NIEについて探る。

- **3 日時** 令和 2 年 12 月 18 日 (金) 15:45~17:00
- 4 参加校と参加児童・生徒

仙台城南高校 4 名 宫城広瀬高校 2 名 多賀城高校 2 名 泉高校 2 名 大崎市立岩出山中学校 2 名 仙台市立泉松陵小学校 3 名 石巻市立湊小学校 2 名 *本部(河北新報社 別館 4 階会議室) 小学生 5 名 中学生 2 名 高校生 10 名 計 17 名

- 5 後援 宮城県教育委員会 仙台市教育委員会
- 6 当日の担当・係
 - ○開会の挨拶

県NIE委員会 中里 寛会長 (大河原町立大河原中学校長) 県NIE推進委員会 田中 元昭委員長 (仙台市立中山中学校長)

- ○総括 県NIE委員会 佐々木克敬副会長 (宮城県仙台第三高等学校長)
- ○司会(ファシリテーター)

第1部 (開会行事) 第3部 (閉会) NIE事務局長安野賢吾 (河北新報社防災・教育室部長) 第2部 (意見交換会) 大槻 欣史教諭 (仙台二華高校)

○エンジニア

三嶋 廣人教諭(宮城第一高校)

○記録 NIE事務局主任 末永 智弘 NIE委員会コーディネーター 畠山 厚子

7 当日の流れと時間

第1部 (開会行事) 【15:45~16:00】 司会:安野賢吾事務局長 第2部 (交流会) 【16:00~16:55】 司会:大槻欣史教諭 第3部 (閉会) 【16:57~17:00】 司会:安野賢吾事務局長

8 その他

開会行事には、各発表校代表と視聴希望のNIE関係者が参加する。

「児童・生徒による意見交換会(オンライン)」の実際

<第1部 開会行事>

司会(安野) 時間になりましたので始めたいと思います。令和2年度宮城県NIE研究大会「児童・生徒による意見交換会」オンラインの開催をしたいと思います。最初に開会のご挨拶をいただきます。宮城県NIE委員会会長 宮城県中学校長会会長でいらっしゃられる、大河原中、中里寛校長先生からご挨拶いただきたいと思います。

中里 皆さんこんに ちは。宮城県NIE委 員会会長の中里でご ざいます。本日、ここ に令和2年度宮城県 NIE研究大会が、関



係各位のご尽力により開催されますこと、心から 感謝申し上げます。

「教育に新聞を」の合言葉により、今や世界 60 カ国以上で取り入れられているNIE活動でありますが、日本でも、昭和 60 年に提唱されて以来、現在は全国の多くの学校で実践され本日に至っているところです。

さて、ご承知の通り、今年度の研究大会は、オンラインでの実施となりました。本来であれば皆さんと一堂に会して、一つ一つの取り組みを生の声と表情をうかがいながら体感したいところではありましたが、このような形であれ、有意義な実践を共有する場を設定できたことを大いに喜びたいと思います。

今回のコロナ禍ですが、1年前には、世の中がまさかこのような状況になろうとは、誰にも予想できなかったと思います。このような劇的な変化が起きる世の中、先を見通すことが難しい世の中においては、新しい様々な情報を集め、何が正し

いかを考え、判断できる力を身につけることが大 切です。新聞で学ぶということは今のような時代 には、ますます重要になってきています。

本日は、そのような実践を重ねてこられた県内 7校の小中学校及び高校の先生方と児童・生徒の 皆さんをネットでつないでの取り組み紹介、そし て意見交換会となります。日頃からの各校の皆さ んの素晴らしい活動を共有することで、NIE活動の価値を再認識していただくともに、このコロ ナ禍についての皆さんの意見をうかがいながら、 今、私たちが考えなければならないこと、行動し なくてはならないことを再確認する機会としたい と考えます。

結びとなりますが、日頃からNIEに取り組んでいらっしゃる各学校の先生方と児童生徒の皆さん、オンライン開催にご尽力賜りましたNIE推進委員会の皆様、関係各位に御礼を申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

司会 次に、NIE推進委員会委員長、宮城県連合中学校特別活動研究会会長、仙台市立中山中、田中元昭校長先生にご挨拶をいただきます。

田中 宮城県NIE推進委員会委員長の田中です。



令和2年度の宮城県 NIE研究大会の開 会にあたり、ご挨拶 申し上げます。

本格実施を迎えた 新しい学習指導要領 では、各校種で「新聞」

が指導すべき内容として明確に位置づけられ、多 くの教科書や教材に盛り込まれました。これは学 習の基盤となる資質・能力の一つである「情報活用能力」の育成に、新聞の活用を通じた主体的・対話的で深い学びが有効であるという証明であり、これからのNIEがどのような学習を開発し展開していくか試されているとも言えます。

NIEが求める「主体的・対話的で深い学び」とは、新聞を通じて児童・生徒自身が主体的に発見あるいは選択した地域・日本・世界の今日的課題や問題解決の様子を取り上げ、他者の意見や考えの異なる仲間と対話しながら、それらの原因や解決策を深く考え、より良い未来社会の実現を目指して行われる学習と考えます。そこでは、「人権教育」「多文化教育」「ESD」「防災教育」「主権者教育」「環境教育」など多種多様な学習が展開できるはずです。

本来であれば、この研究大会を通じて研究実践校の取組発表や検討会などを行い、宮城県のNIEの充実と発展につなげていくところですが、コロナ禍における実践活動の縮小や部会活動、研修会の実施形態変更や中止を余儀なくされた中で、推進委員会としても十分な研究推進が図れたかと言えば、残念ながらその思いは十分にかなわなかったと言うことになります。それでも、本日こうして令和2年度の研究大会を開催することができたことは、NIEの取組の火を消さないという意味で、大変喜ばしいことだと思っているところです。

本日は、児童生徒による意見交換会を実施するわけですが、このことは私たち教師側がNIEを推進していく上で貴重な場になると考えております。指導者目線ではなく学習者目線で、つまり学習者である子供たちの側から見たNIEに対する考えや思いを理解し共有することができる機会として、参加される先生方、そして関係者の皆様も関心を持ってご参加いただいていることと存じます。

本日の研究大会実施にあたり、企画、準備していただいたみなさん、そして参加する児童生徒のみなさんに、お礼と期待を込めて、開会の挨拶とします。本日はよろしくお願いします。

司会 ありがとうございます。本日は時間の制約 がありますので、引き続き第二部に入らせていた だきます。ここから司会を大槻先生に替わってい ただきます。では、よろしくお願いします。

<第二部 児童・生徒による意見交換会>

司会(大槻) みなさん、こんにちは。生徒の皆さん、児童の皆さん、聞こえていますか。聞こえていたら丸(手で丸をつくる)。はい、ありがとうございます。ここから司会を務めます仙台二華高校の大槻と申します。どうぞよろしくお願いします。 NIEのアドバイザーもやっていまして、河北ワークシートとかいろんなところで新聞の取組などを実践しております。今日、児童・生徒の皆さんの発表を楽しみにしています。緊張しないでよろしくお願いします。本来ならば先生方だけの会でしたが、コロナ禍で、オンラインならば児童・生徒諸



君に生の声を発信 してもらえればり いうことで決まが ました。すべてがれて めてづくしで、1つ 目はオンラインで ある、2つ目は児

童・生徒のためですからよい話が聞ければと思います。それから小中高全てを超えた交流会、これも初めて、すべてが初めて尽くしです。ピンチをチャンスにということでオンラインでありますが、時間も場所も超えていろいろな方々の話を聞く、こんな機会はなかなかないと思っています。自分の学校はどこまでやっているのかとか、もしかしたら全然やれていないのではないかとか、こういうアドバイスが聞けたからこうしようかという思いになると思います。児童・生徒の皆さんの心に残るような会に、学びの機会になってもらえればと思います。

では、これから実践報告をしてもらうのですが、 事前に順番は決めてあります。湊小学校から始まって、泉松陵小学校、岩出山中学校、城南高校、宮 城広瀬高校、多賀城高校、泉高校という順番で実践発表をしてもらいます。足元も危ない状況ですから、5時にはすべてが終了する都合でですね、4分間、皆さんの1年間の実践を4分で話せというのも酷な話だということも分かるのですが、まとめて発表してもらいます。その後で感想や質疑応答を2分程度で話してもらって時間があれば、例えばある学校からある学校への質問ですとか、深い交流になればと思いますが、今日は第1回目ですのでそこまで行くかわかりません。よろしくお願いします。

では、湊小学校さん準備はよろしいでしょうか。 **湊小児童** はい

湊小T では、画面共有の許可をお願いします。 司会 では、画面共有の許可を今私の隣で機械操作をしている宮城一高の三嶋先生にやってもらいます。少しお待ちください。・・・では、お願いします。

湊小児童 石巻市立湊小学校です。よろしくお願いいたします。

これから、湊小学校の実践発表を始めます。

画面を共有して、説明をします。 お待ちください。 新聞を活用した取 組は、Facebookや 校長室だよりなどで発信をしています。



6月「NIE実践指定校の委嘱状交付式」を校 長室で行いました。安野さんと畠山さんにおいで いただきました。

「NIEコーナー」を設置しました。職員室の廊下にあり、これまでの新聞掲載した記事なども掲示されています。

7月、4年生が総合的な学習の時間で「子ども新聞づくり」を始めました。地元の石巻日日新聞社の方においでいだたき、学区内をフィールドワークして、9月に完成した新聞が届きました。

9月に入ると、多くの新聞が学校に届くように なりました。新聞社によって、見出しが大きく違 うことがとても興味深いです。

3年生が算数「10000より大きい数を調べよう」 で、新聞にある大きい数を探している場面です。

6年生の斎藤君の投書が河北新報に掲載されま した。学級のみんなでワークシートに感想を書い て、斎藤君に読んでもらいました。

10月、6年生の山内さんが投稿した記事を読んで、福島県会津若松の方が「声の交差点」をきっかけに修学旅行先で出会うことができました。投書が「縁」となっていることに、みんなで大喜びしました。

私たち2人が、新聞記事コンクールに出品しま した。お互いに「優秀賞」を受賞することができま した。

その内容を、「石巻かほく」に掲載していただきました。とてもうれしい気持ちになりました。

11月、僕も「声の交差点」に投書しました。「バランスいい字書きたい」というタイトルです。すると、会津若松市の方が、読んでくれて、僕のことを取り上げて、投書していました。新聞紙面上でも交流することができました。

6年生が修学旅行新聞を使って、5年生に向けて、発表しているところです。様々な新聞を参考にしながら、見出しの付け方やレイアウトなどを考えることができました。

3年生の書写の時間です。新聞紙を広げて、新聞紙にも文字を書く練習をしています。

12月、6年生の櫻田君が投書して、新聞に掲載されました。友達が掲載されると、みんなで喜んでいます。また、家族や親せき、先生方にもたくさん褒めてもらえるので、作文を書くのも楽しくなっています。以上で、発表を終わります。ありがとうございました。

司会 画面の共有が多分、インターネットの速度 の関係で見られなかったかもしれませんが、スラ イドだけもう1回見てください。同時にスライド も出せればよかったのですが、みんなつながって インターネットがパンクしたんだと思います。補 足説明とかあれば質疑応答の時間をたくさん取り ますので、湊小学校のお二人、お待ちくださいね。

トラブルもチャンスに変えていきたいと思いま す。では、泉松陵小学校の児童の諸君、準備をお願 いします。

泉松陵小児童 A 泉松陵小学校です。よろしくお願いします。これから泉松陵小学校のNIEの取



組を紹介します。 まずこども新聞 に意見文を投稿 したことについ てです。「ぼくも

私も語りたい」のコーナーに、意見文を投稿しました。いろいろな人が多様な考えを持っていることを知る機会になりました。いじめ防止の動きがもっと広がりますようにという願いを込めて投稿しました。新聞に載ったとき私の意見をたくさんの人が見ていると思うとどきどきしました。また、こども新聞を使った自学にも取り組んでいます。こども新聞を読んで気になったことや最近話題になったことを詳しく調べて自学に取り入れています。友達の自学は新聞の切り抜きやきっかけ、内容、まとめた感想等で構成されています。私も防災の記事を読んでおうちの人にインタビューをしたり「いいね小学校」のほかの学校の感想をまとめたりしました。次にNIEプリントについてお願いします。

泉松陵小児童 B 毎月、こども新聞のお題についてやその月に流行ったことなどを先生はNIEプリントにしてくれています。前回はいじめについてでした。私は、前回のこども新聞にいじめについての意見を投稿しました。その意見を読み、学校全体でいじめについて考えるプリントでした。それがこのようなプリントです。

毎月面白いお題ばかりです。この写真を見てください。この写真は1年生がNIEプリントに取

り組んでいる様子です。もう一つの資料を見ても らうと低学年と高学年に分かれていることが分か ります。先生は、毎月いろいろなレベルに合わせ てプリントを作ってくれています。これで終わり ます。次に児童によるNIEプリントの作成につ いてお願いします。

泉松陵小児童 C 私の学校では、児童もNIEプリントを作る活動をしています。この写真を見てください。これは広報掲示委員会での活動の様子です。委員会だけでなく3~6年生の係活動でも作っています。これがプリントづくりに使っていい新聞が置いてある写真です。私のクラスでは、ニュース係という係があり、その日の新聞や「NHK for School」を使って新しいニュースを分かりやすく発表し、帰りの会に内容からクイズを出すという活動を行っています。これがその様子です。そのほかにもプリントを作るNIE係があります。よく書けていたものはこのように掲示されます。

これで、泉松陵小学校のNIE活動については 以上です。ありがとうございました。

司会 ここから中学校、今回は1校ですが岩出山 中学校さん用意はよろしいでしょうか。

岩出山中 皆さん、こんにちは。岩出山中学校で す。よろしくお願いします。

岩出山中学校では、「未来の創造、NIEではぐくむ強い心と高い志」をテーマに掲げて、NIEに取り組んでいます。人と関わりあいながら、よりよい自分の生き方を求め、地域社会で自分の役割や責任を果たしていくことができる自立した人間を目指し学校生活を送っています。昨年度は、新聞バッグづくりをしたり、難民に子供服を送る

活動「服の力」を 実践している中 学校があること を新聞で知った ので、岩出山中学 校も全校体制で 協力したりしま



した。このように、「かかわる もとめる 果たす」をキーワードにNIEで学びを深めてきた私たちですが、コロナの影響で3か月間の休校、いざ学校がスタートしてもマスク着用、ソーシャルディスタンスで学校に様々な制限がかかりました。しかし、その空気を一気に変えてくれたのも新聞でした。5月末、分散登校中に取り組んだ「ことばの貯金箱」では、3か月間の休校を乗り越えて今、自分がどういう思いで過ごしているかについて表現しました。この作品には逆境を乗り越えたいという思い、学校がなかなか再開できず不安だけど、自分を信じて頑張ろうという思いが込められています。

4月、「服の力」で交流した中新田中学校では、 コロナに関する新聞記事を全校でスクラップした と聞きました。そこで、生徒同士が交流できない のであれば新聞記事を使って交流しようという図 書委員会からの提案があり、『NIEタイム一緒に 読もう新聞 中中&岩中』が行われました。こち らは、「ごみ収集作業員に感謝」という見出しの記 事です。「今だからこそ、危険なリスクを背負いな がらも頑張って働いている人がいることに気付い てほしい」という中新田中学校のS君に対して「S 君の意見に賛成、ステイホームでごみの量が増え ているので、ごみから感染するリスクも高い、直 接会えなくてもごみ袋に感謝の思いを貼ることは 素晴らしい」との意見を述べました。こちらは「志 村けんさん死去」という見出しの記事です。「志村 けんさん大好き、亡くなったことが信じられない、 コロナの怖さを知った」という中新田中学校のT 君に対して、「この記事は私もショック、コロナが 憎い、コロナの恐ろしさを知ったので危機感をも って行動したい」と述べました。

そのほかにも「行って食べて地元店」というテイクアウトに関する記事、「医療従事者差別 宮城でも」という人権問題にかかわる記事などにも触れ、社会問題についても考えを深めました。その他にも美術の授業で新聞を使って暑中見舞いのポ

ストカードを作ったり、英語では新聞の写真を使って英語で五行詩を書いたりしました。

また、ハガキ新聞で小学校の恩師に近況報告をしたり、休校期間中にめでたく出産をした先生にお祝いを述べたりしました。文化祭では、NIEタイムで交流した和歌山県の水城斉美さんから岩中生に励ましの手紙が届きました。新聞を通して素晴らしい出会いが実現したことに驚きとうれしさでいっぱいでした。

最後に、全校生徒で取り組んだNIE川柳を紹 介します。「その記事は知恵がつまった宝の地図」 「コロナ禍で会えないならば新聞で」「その記事は 誰かの心動かすよ」「新聞は人をつなぐ架け橋だ」 「新聞は人の思いを残すもの」「白黒の記事でもわ かる人の輝き」この川柳からもわかるように私た ち岩中生は、コロナで人と直接かかわることがで きなくても、学び求めることに制限がかかったと しても、誰かのために地域のために自分たちがで きることを実践してきました。そして今日はオン ラインでその一部を皆さんに紹介できてうれしい です。時代は日々大きく変化しています。その変 化に向き合い、どう生きていくか、人間の底力が 試されているような気がします。大変な世の中で はありますが、これからも強い心と高い志をもち 自立した人間に成長できるよう頑張っていきます。 ご清聴ありがとうございました。

司会 ハードルがぐんと上がった感じ。次は高校の諸君が発表ですが、高校はNIE実践の長い順ということで順番を組みました。では、城南高校さん、よろしくお願いいたします。

仙台城南高 これから仙台城南高等学校の発表を 始めます。よろしくお願いします。

私たちはヤングケアラーについて調べました。 この記事は厚労省がヤングケアラーを調査し始め たという記事です。この記事を選んだ理由は、こ の記事を読んで深刻な問題なのになぜ大きく取り 上げられていないのかと思ったからです。ヤング ケアラーについてです。ヤングケアラーは、18 歳未満で親の介護や兄弟の世話をしている人のこ



とで、日本には 17万7600 人いるといわれ ています。また、 特殊な状況のた め周囲の理解を

得られにくいという特徴があります。

続いて SDG s についてです。 SDG s は、2015 年9月の国連サミットで採択されたもので国連加 盟193か国が2016年から2030年の15 年間で達成するために掲げた17個の持続可能な 開発のための国際目標です。SDG s の視点からこの 問題を考えて見ました。SDG s の目標3番の「すべ ての人に健康と福祉を」というのは要介護者だけ でなくヤングケアラー自身も介護で身体を壊して しまうため、SDG s 4番の「質の高い教育をみんな に」では、学力低下や欠席の増加など学業に影響 が出るため、SDGs 16番の「平和と公正をすべて の人に」では、介護者も要介護者も公正な生活環 境が必要であると考えました。そこで私たちはこ のような疑問を持ちました。ヤングケアラーは介 護以外の自分の時間が取れているかです。データ を見てください。子供がしているケアの内容は、 家事や身の回りの仕事を中心に多くあり、ケアを している頻度は毎日が一番多く35%になります。 また学校生活への影響も出ています。遅刻、早退、 欠席を始め様々な影響を受けそれらが学力低下に 直結しています。ケアが長期になればなるほど子 供の成長や環境に影響します。生活への影響のア ンケートでは孤独を感じる、ストレスを感じる、 勉強が十分にできないと答える人がいる中、影響 なしと答える人もいます。

ヤングケアラーに対する取組も行われています。 埼玉県では家族を介護する人を支援するケアラー 支援条例が施行されています。また、諸外国では、 イギリス、オーストラリア、ドイツで介護休暇や 現金給付などサポートが行われています。日本と 諸外国を比べた結果、日本より諸外国の方が充実 したサポートを得られることが分かります。日本 でも早急な対応が望まれるのではないでしょうか。

(まとめ) ヤングケアラーは今や日本だけでなく、世界的にも SDGs の視点で見ても大きな問題になっています。ヤングケアラーは学校では気づきにくい特別な状況なので周囲の理解が得られにくいです。イギリスと日本では介護の内容や年齢に差異が見られます。

(結論) ヤングケアラーは介護の時間が多く、 生活、学業に大きな支障をきたしています。よっ て、自分の時間が取れていないという結論に至り ました。

(考察) ヤングケアラーの特別だと思われたく ないが気付いてほしいという状況を私たちが受け 入れて自分や友達に当てはめて特別扱いせず大変 さ辛さなどの気持ちを共有することで理解が深ま ると考えました。ここで私たちは SDGsの視点か ら考えて以下のことを提案します。3では、要介 護者、介護者の健康サポート。4では、学校での体 験学習、16では募金活動です。特に4番の学校 での体験学習では、実際に触れてみることでヤン グケアラーへの理解が深まればいいなと考えまし た。私たちはヤングケアラーを調べてみて、もし かしたら自分の近くにいるかもしれないので暗い 顔をしているクラスメイトがいたら声を掛けたり ヤングケアラーの話題を出してみようと思います。 参考文献はこちらです(渋谷智子「ヤングケアラ 一」渋谷智子「ヤングケアラー私の語り」河北新報 データベース)ご清聴ありがとうございました。 司会 ありがとうございました。今時間はややオ オバーしましたが、素晴らしい発表でした。次は

宮城広瀬高 こんにちは。宮城広瀬高校です。私 たち宮城広瀬高校では各クラスに6社の新聞を置き、ローテーションして自由に読むことができるようにしました。こんな感じで(表を出す)、6社 の新聞をクラスごとに1週間ずつ別の新聞を置い

宮城広瀬高校さんです。

て行って読めるようにしました。次に朝の広高タイムで一人につき新聞を1部渡して週に1回読むようにしました。このオレンジのマークがついているところですが、新聞を置いているだけでは読んでくれないので週に1回新聞を読む時間を作ろうということで10分くらいですね、読む時間を取りました。そして記録用紙に自分の気になった記事を記録しました。日付と新聞名を書いて自分の気になった記事を書いて、さらに最も気になっ



た記事を一番下の 段に書きました。 10月27日に河 北新報社の方に来 ていただき、新聞

の読み方講演会で新聞の新たな見方について教え ていただきました。

次に自分が今まで新聞を読んできて興味を持っ た記事についてポスターを作りました。準備用ワ ークシートにこれを書くと決めた記事のタイトル、 ニュースの概要、何が問題だったのか、自分の考 えをワークシートにまとめてそれを踏まえてポス ターを作りました。(ポスター掲示) 1 つのジャン ルだけでなくて様々なジャンルのポスターを描い て文字だけでなく絵も描いて分かりやすく作るよ うにしました。これらを冬休み中に2年生の廊下 に掲示して全校生徒に見てもらう予定です。様々 なジャンルから1つずつ記事を抜き出してそこか ら自分の気になった記事についてまとめて小論文 模試に向けた取り組みを行いました。こんな感じ で(表の掲示)1つのジャンルだけでなくいろい ろなジャンルから記事を1つずつ抜き出してその 中で最も気になった分野の記事を書き概要をまと めたりして小論文模試に備えるようにしました。

まとめですが、私たちは普段新聞を読む機会がとても少ないのですが、今回NIE活動を通して多くの新聞に触れあうことができました。いつもはネットニュースやSNSで社会の出来事を確認することが多いのですが、新聞は繰り返し読むこ

とができて、また新聞社ごとに伝え方が違っているので物事を1つの視点からではなくあらゆる視点から見ることができ、より深く理解することができました。私たちはNIE活動で学んだことを小論文模試や大学入試に生かしたいと思います。また、これから社会に出る人間として今後も様々な情報を得て必要最小限の知識を身に付けてボランティア活動をするなど社会に貢献できるようになりたいと思います。NIE活動は私たちにとってとてもいい経験になりました。これで発表を終わります。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。多賀城高校さんよろしくお願いします。

多賀城高校 多賀城高校です。多賀城高校では、 主に大学受験に向けての指導の一環として新聞が 活用されています。まず私たち1年生は、先日現 代社会の時間に複数の新聞社の紙面を読み比べて 同じ出来事や事件等でも取り上げ方や報道の仕方 に若干の違いがあるということを調べました。短 時間で一人ずつの個別の作業だったのでうまく見 つけられた人よく分からなかった人様々な結果と なりましたが、めったにできない貴重な体験だっ たと思います。また、この時同時にアンケート調 査も行われたのですが、「あなたは新聞をどの程度 読んでいますか」という質問に対し、読んでいる



と答えた生徒は全体のおよそ4分の1、しかも毎日読んでいるという人はほんの数人という多質城高校1年生の悲しい事実が発覚していまいました。一応全く読んでいない残り4分の3のフォローをしてお

きますと、社会が大きく変化したときに正しく情報を得ていないとデマや偏った情報に騙されてしまうとか、自分たちが世界のどのような立場にいるのかを知っておかないと日本の社会でいい環境

で生きていけなくなるなど、様々な危機感やこの ままではまずいといった新聞を読むことへの義務 感を感じさせられる意見をほとんどの生徒がアン ケートに書いておりました。私たちも含めてこれ からはしっかり新聞に目を通す習慣をつけるよう 努力していきたいと思います。

また、3年生が大学受験の小論文対策の一環として新聞を活用させていただいております。担当された先生が受験する学校に合わせて記事を選び生徒は内容やあらましを100字から200字程度でまとめた後、その記事に対する意見や感想等を600字から700字以内で述べるという形で添削指導されているそうです。他には3年生55人が選択授業の現代文Aという科目で、読解力、読み取り能力、発表・表現力を高めるために使わせていただいております。この授業でも紙面の読み比べに加え先生の選んだ記事を全員で意見や感想を述べ合っているそうです。以上で多賀城高校の発表を終わります。

司会 ありがとうございました。最後に泉高校お 願いいたします。

泉高校 A 泉高校発表を始めます。まず泉高校でどのような取組をしているかについて発表していきます。まず朝の天声人語の短い感想についてです。朝の10分間の自主学習の時間で天声人語について短い感想を書いています。それによって社会問題や旬の話題に触れて自分の知識を増やしたり自分の意見を明確に持つことや感想を述べることの練習を行っています。2つ目はミニ新聞の作成です。ミニ新聞の作成によってSDGsとは何かを知ることができました。ミニ新聞の作成ではSDGsの中で、何かを題材にしてそれをもとに新聞を見て自分でまとめる新聞を作りました。それによってSDGsの存在を知り今自分にできることは何か、そしてこれからどのように生活していくかについて再確認することができました。前ページの取組

を踏まえて、河北新報による新聞講演会を受けました。ここでは、伝わりやすい文書の書き方について学びました。第1に相手のことを考える、第2に5W1H 第3に分かりやすさ(思いやり)が一番大事ということを教えてもらいました。これにより普段あまり扱わない新聞を手に取り、改めて新聞の文章の構成力や文章力をみんな理解していました。これは後の小論文模試も生かせていたと友達と共有して知りました。最後に感想です。今回情報を共有するに当たって今までの自分たちの取組を振り返られたと思います。これから自分の行動を客観的に見て反省し、成長や発展につなげていきたいです。以上で終わります。ありがとうございました。

泉高校 B 発表を始めます。出前授業で河北新報社 の記者が伝わりやすい文章の書き方について教え てくれました。一番印象に残った3つのことにつ いて発表します。1つ目は逆三角形の順番で書く ことです。結論を先に書き、そこから説明、補足の 順番でまとめていくがよいそうです。2つ目は文 章の流れを意識することです。1文を長くし過ぎ ないことや描写を描くのがポイントだそうです。 3つ目は書いた文章を自分で声に出して読むです。 声に出さないで読むと間違いに気づかなかったり するそうです。この出前授業を受けてみて、河北 新報社の記者さんは毎日自分で情報を得て書いて いるのでとても感心しました。文章を書くのもか なり大変だが、伝えやすい文章にしないといけな いのはもっと大変なことだと思いました。自分も こんな簡潔に伝わる文章を書けるようになりたい

としにがいをま小い。高っこ表ま文様でとしずの



練習です。11月に小論文模試がありました。その前に練習をしてみんなが伝わりやすいように書いていました。次にミニ新聞の作成です。写真を見てください。このように SDG s のことに触れながら自分の意見をまとめるように意識しました。また朝学習では、週1で朝日新聞の天声人語を読み自分の意見をまとめたり見出しを付けるなどしました。最後にまとめです。大学で小論文やレポートをまとめたり、就職する際に書く履歴書、また就職してプレゼンなどでいかに簡潔に伝えなきゃいけないか、そして分かりやすく伝えなきゃいけないかなどを高校に入ってたくさん学びました。



まになが良をしたいろ、ろ収きないろ、ろ収き

いと思います。以上で発表を終わります。ありがとうございました。

司会 これですべての小・中・高の発表を終わります。難しい話も小学校の皆さんにはあったかもしれませんが、お兄さんお姉さんの発表を聞くいい機会だったと思いますので参考にしてください。次に質疑応答、または感想などをまた順番に発表してください。湊小学校からお願いします。

湊小A 感想ですが、とても聞きやすかったし、これからもっと新聞に親しみたいなと思いました。

湊小B すべての小・中・高の発表の内容もよく分かったし、新聞を使った学習の取組も知れたのでよかったです。

泉松陵小 A 感想です。いろいろな学校の人が新聞を生かして学習していることを知りました。

泉松陵小 B 私も感想です。ほかの学校と同じと ころや違うところや高校生が取り組んでいること が詳しく分かったので高校生がやっていることを 私もやってみたいなと思いました。 **泉松陵 C** 質問です。 5 W 1 Hって何のことですか。

司会 泉高校さん。簡単な質問だと思うので回答 してください。

泉高校 A 5 Wは英語の質問の内容を聞いていて What、When、Why などの W をとって 5 w としています。 1 H は How の H からとっています。

司会 さらに詳しくは目の前の先生に聞いてくださいね。では岩出山中学校お願いします。

岩出山中 A 感想です。SDG s など新聞と結び付けて考えていることにすごくいいなと思いました。

岩出山中 B 感想です。ミニ新聞やポスターなど を使って小論文に向けて対策をしているのがいい と思いました。

城南高 A 感想は自分たちが選ばなかったテーマの問題も確認出来て改めてよかったと思います。 NIEを通して調べ学習をしないと気付くことができなかった問題や社会の現状を改めて考え自分たちでできることを探したりすることができてとてもよい機会だったと思います。

宮城広瀬高 A 学校ごとに調べていることややっていることが全然違うのでそれぞれの良いところが出たと思います。今回他の学校の発表を聞いているいろな学校のことを学べたと思います。これから頑張っていきたいと思います。

宮城広瀬高 B タブレットや絵に描いたりして分かりやすかったので、次にこのような機会があったら取り入れていきたいと思います。

多賀城高 A 各校の新聞を用いた取組を聞けたことでとても勉強になりました。それからポスターとかも工夫していて私たちもポスターを作ればよかったと思いました。

多賀城高 B 各校、いろいろな取組をしていていいと思いました。

多賀城高 C 学校の授業の教科に新聞を結び付けていていいと思いました。

泉高 A 小学校はもちろん中学校も新聞の内容は 難しいのにここまで掘り下げられたのはすごいと 思いましたし、高校でもそれぞれ特色があり、い ろいろな取組をしているのはこれから社会に向け て素晴らしいことだなと思いました。

泉高 B 小学生や中学生が新聞に関することでしっかりまとめられていてとてもいいNIE研究大会だったと思います。

司会 ありがとうございます。発表された自分、 友達、他の小中高校に向けて発表が聞けてよかっ たと、お互い拍手で御礼したいと思います。皆さ んありがとうございました。(拍手) お疲れ様でし た。

まとめとして仙台第三高校の佐々木校長先生からお話をいただきます。



<総括~第3部>

佐々木 こんにちは。今 日は皆さん発表どうもあ りがとうございました。 小学校から高校までいろ いろな校種がそろってと

ても充実した発表会だったと思っています。

特に小学校の場合は、自分の意見を新聞で述べ てみる、文字にしてみるといった話がありました。 また皆さん多様な意見、考えを知る、あるいは自 分たちでNIEのプリントを作ってみるという、 自分たちが外に発信しよう、自分たちの意見を出 してみようと大変意欲的な発表だったと思います。 また、中学校は宮城県の志教育を意識して記事を 考える、特になかなかコロナで外に出ることはで きないのだけれども逆に新聞を通して世の中で何 が起きているかということをきちんと把握してそ れについて自分たちで考えようという素晴らしい 発表だったと思います。また、高校生はさすがだ なと思いました。城南高校さんは SDG s の視点か らヤングケアラーといったホットな話題を取り上 げてそれらを課題としてどのようにしたら解決で きるかということを、ほかの国あるいは日本の実 例などから比較して自分たちに引き付けて考える

ことが特徴だったと思います。またほかの学校では、新聞の読み比べという言葉がたくさん出てきました。これは新聞社ごとに実は意見が異なることを知ることができたのだと思います。実は世の中の意見、世論とかと言いますが、新聞社でさえいろんな意見を持っているということを知ることができたのは非常に多角的な視野、多面的な見方ということでは役立ったと思います。

単に小論文対策という短い目標設定ではなくて 大人になってからあるいは社会人になってから、 大学生になってからもどのように社会に問題意識 をつなげていくか意識した発表が多かったと思い ます。また、小論文対策ではなくて、文章で相手に 伝えるという講座を受けてためになった話があり ました。特に皆さんは携帯電話で今SNS世代と 言われますけれども、絵文字で表したりなるべく 短い言葉で相手に伝えようとしているかと思いま す。それは新しい文化の一つではありますけれど も、逆に新聞記者さんがどのように記事を作って いくかということを聞いたことで、自分たちの短 くした文章の危うさ、何を伝えたいかということ が伝わっているのか、に改めて気が付いたのでは ないかと思っています。まとめますと、新聞は社 会の窓口になって皆さんが行けないところに取材 に行ってもらい、社会の課題・問題を拾ってきて もらって、そこに意見を述べているということだ と思います。それを皆さんで共有し自分たちに引 き付けて自分たちの課題として新聞を使ってもら えればよいと思います。さらに小学生の皆さんが 行ってくれたように、その意見を外に発表して自 分はこう考えているんだけれど皆さんどう思いま すか、といった議論がどんどん新聞を通して起こ ってくれると嬉しいと思います。本当に今日はど うもありがとうございました。

司会 佐々木校長先生、ありがとうございました。 これで、令和2年度宮城県NIE研究大会を終了 します。 (文責 畠山 厚子)

(3) アンケートの結果

発表校や視聴された方々から、次のようなご意見・ご感想をいただきました。

- * 平日授業日のオンラインによる開催のため、1 時間という短い時間の中での開催でしたが、児童・ 生徒自らの意見交換会はいかがだったでしょうか。
- ・時間的にも内容的にも初めての試みとしていいものになったと思います。若干の滞りはあったものの、司会の先生の雰囲気作りもあり、和やかな雰囲気の中で行われたことが何よりでした。 残念だった点を挙げるとすれば、意見交流の時間的余裕がなかったことでしょうか。各校発表内容への質疑があったことで満足すべきですが、あと10分程度あれば話題の広がりも出たのではないでしょうか。
- ・初めての開催でしたが、事務局、各先生方のご尽力で何とか無事に開催できたと思います。ありがとうございました。小学校、中学校、高校間で発表する時間を持つとなると、放課後の時間となり、開催時間が1時間という時間になってしまいます。
- 今後の検討課題だとは思いますが、もし次回も開催するとなった際、開催時間を1時間30分ぐらいに伸ばし、後半の意見交換に充てることができればと思います。
- ・教員による実践例の紹介ではなく、生徒がどのように取り組み、どのように感じているのかについて、意見や感想を述べる方が有意義であったと思います。できれば、次年度は 12 月開催でない方が(もう少し早い段階の方が)よいと思います。
- ・初めての試みとしてはまずまずの結果だったのではないでしょうか。しかし、各校の発表を聞くだけだったので、活発な議論・討論には(予想されていたとは言え)至らなかったのが少々、心残りでした。ですが、本校生徒も急に何かコメントを求められても厳しい面が有る為、やはり今回の様な形で実施して良かったかと思います。
- ・オンラインで交流という新しい取組、良かったと思います。コロナだからできないではなく、できる方法を探ることが大事だと思いました。時間の都合上、一言感想で終わりましたが、できれば、質問がいくつかあると、なお良かったと思います。事務局の様々な準備、大槻先生の司会、ありがとうございました。
- ・参加した児童は、これまでの取組を整理することができたこと、他校の実践を知り意識が高まったことなど、多くの成果がありました。時間についてですが、ずっと画面を見ていたことと、また、映っていることから1時間という短い時間でも小学生はかなり疲れていました。

<視聴者>

- 児童・生徒たちが他校の発表内容にも関心を持って、積極的に参考にしようとしていた様子がうかが えてよかったです。他校の発表を聞いているときの表情がうかがえたのも、オンラインならではのメ リットだと思います。一方、時間の制約があるなかとはいえ、参加校がお互いに質問する機会がもう 少しあれば、より参考になったかと思います。参加校同士で議論する場も見てみたいと思いました。
- 〇小学生から高校生までの児童、生徒自らの意見交換会はとてもよく、斬新であった。オンラインならでは時代の変化を感じる。
- 〇オンラインなので、多くの先生方や児童・生徒に参加してもらえるのではないかと思った。
- △自分も操作が未熟でカメラに写っているのかどうかの確認すらできなかった。オンライン操作の向上 が必要である。

これらのご意見をもとに次年度の研究大会を検討していきます。

(1) 仙台市立泉松陵小学校

新聞に親しみ、社会的事象に関心を持つ児童の育成

1 はじめに

本校は昨年度からNIE実践指定校となった。 1年目は、通常の授業や校内研究、学校行事など、 これまでの教育活動に新聞を活用する考え方で実 践を始めた。

1年間の実践を終えて、学習において自主的に新聞を活用しようとする様子が以前よりも増えたことが大きな成果である。新聞記事を活用した自主学習や、教師が作成したNIEワークシートに進んで取り組む児童が増えたということがある。ただし、アンケート等の客観的なデータを取った訳ではないので、課題として児童にどのような力を身に付けさせたいのか、漠然と実践したため、計画性に欠く実践が多かったということが挙げられる。

そこで今年度は、明確な主題を掲げながら、実態を アンケート調査で把握して、「どのような変容が見られ たのか」を明らかにしながら研究テーマに迫る実践を 行った。

2 研究テーマ

新聞に親しみ、社会的事象に関心を持つ児童の育成

本校は、主題「自分の思いや考えを表現できる児童の育成」、副題~主体的・対話的な学びを取り入れた授業を通して~で校内研究を行っている。「自分の思いや考え」とは、児童が学習課題の解決に向けて持った自分なりの思考や気付きのこととし、

「表現できる」とは、学習課題の解決に向けた自分なりの思考や気付きを言語化し、他者に発信する こととしている。

これに関連させて、NIEの意義を「読む」だけでなく「書く」や「伝える」活動まで行うこととした。つまり、読んだ記事に対して、自分の考えや課題を持ち、書いて発信することができることまでを目指す。それが、他のメディアと違って新聞にできる最大の強みだと考え、「新聞に親しみ、社会的

事象に関心を持つ児童の育成」をNIE研究テーマに設定した。

「社会的事象に関心を持つ児童」について、手段は新聞以外にも様々なメディアがあるのも事実であるが、校内研究と関連させ「書く」「伝える」活動を十分に取り入れることは新聞が最も適していると考える。

3 研究評価の方法

校内アンケートで年度初めと年度末の結果を比較して「自己の変容」を検証する。対象を3年生以上で下記の項目で実施する。

- 1 「新聞を家でとっていますか」
- **②**「新聞を家で読んでいますか」
- **③**「学校で読めることを知っていますか」
- ④「学校で読んでいますか」
- **⑤**「新聞がどのようなものか知っていますか」
- **⑥**「ニュースに関心がありますか」
- ⑦「新聞の記事を読み、自分の考えを持つことができますか」

4 実践紹介

(1)環境づくり~NIEコーナー~

全校児童が毎日通る昇降口付近にNIEコーナーを設置した。毎日の新聞を立て掛け、誰でも読めるようにしたり、自作のNIEワークシートを不定期(時事的な記事を週に2回程度)で設置したりている。また、過去の新聞も新聞掛けや箱に保管し、



教員が活用できるようにしている。これらを校内 放送でアナウンスしたり、取組に積極的な児童を 紹介したりして、コーナーに足が向くように促し ている。

(2) NIEワークシートの制作と掲示板

社会を揺るがすニュースがあった時や、児童にとって身近な事柄が記事に取り上げられていた際、授業内容に関連する新聞記事があった場合など、下記①、②の方法で自作のNIEワークシートに取り組んでいる。そして、児童が取り組んだプリントのコピーをNIE掲示板(全校児童が通る昇降口に設置)に貼り、他の児童の回答を見ることができるように工夫をした。

●月に1回、朝の1モジュールでのスキルタイムに実施した。これは、NIE担当が低・中・高ごとに問題を作り、手本となる児童の記述のコピーを掲示板に掲示している。



②学年ごと、授業内容と関連させて、学年の先生が問題を作ってスキルタイム等に取り組んだ。授業内容との関わりがある記事があった場合に、カリキュラムマネジメントをして実施したところ、理解を深めることにつながった。サンマの不漁が話題になったり、コロナ禍の世界状況で、貿易や現地工場の苦労があったりと5年生の社会科の学習での実践が充実した。

(3) 現職教育

NIEワークシートを制作することは、教員にとっても新聞を身近に感じ、NIE活動を模索するきっかけになると考える。また、NIE担当だけが行うのではなく、全職員で取り組むことが全校で継続的に取り組むことにつながると考える。11月16日に、本校を会場に、宮城県NIE推進委員

会の研修会を実施していただき、本校職員が全員 参加した。毎日新聞社仙台支局長の石丸整氏によ る「新聞の違い」という講演、岡田小学校の阿部謙 校長先生による「新聞記事の読み比べ」「ワークシ ート作り」の講話を聞き、研鑽を積んだ。



(4) 行事との関連 - NIE×いじめゼロキャンペーン -

仙台市では、6月と11月は「いじめゼロキャンペーン」を行っている。そこで、過去の新聞記事を活用して、いじめに関するNIEワークシートに全校で取り組んだ。なお、NIEワークシートの制作では、河北新報データベースの検索機能を活用し、児童の実態を踏まえて内容を精査したり、子ども新聞へ本校児童が投稿した記事を活用したりした。

6月は臨時休校明けであったことを生かして「コロナ差別」をテーマにする記事でワークシートを制作した。11月は「週刊かほぴょんプレス」で本校児童の記事が掲載された記事を生かし、「いじめをなくすためには」について自分の考えを書いた。プリントのコピーはNIE掲示板に貼り、いじめ根絶を訴える様々な考えを全校で共有できた。いじめ防止「きずな」キャンペーンとのコラボレ



ーションだけではなく、【NIE×行事】に積極的に取り組んだ。始業式、運動会、長期休み、防災などで、その行事の前後で数分間各学級にて関連する新聞記事を読んだ。



(5) 特別活動での実践

●学級での係活動に新聞を

係活動を「会社」と名付け、子供たちが楽しみながら新聞を活用したりニュースに触れたりする仕掛けを取り入れた。「NIE会社」はワークシート用の記事選び、問題の作成から採点までを担当している。「ニュース会社」はその日に気になったニュースや面白い記事を朝の会で伝えている。帰りの会ではそのニュースからクイズを出している。



2児童によるワークシート作成

3~6年生の有志の児童や、広報掲示委員会の 児童がワークシートを作成した。NIEコーナー に、ワークシート制作のために自由に使って良い 新聞を設置した。ワークシート作りは、休み時間に



見られるようになり、NIEコーナーに並べられ、 全校児童が取り組めるようにしている。作成した 児童は、「問題を考える方が解くよりも頭を使う。 簡単すぎても難しすぎても駄目で、バランスに注 意している。」と意欲的であった。





(6)授業における実践

10低学年の実践

○1年生国語科「新聞記事からカタカナと知って いる漢字を探そう」

新聞記事から習ったカタカナや知っている漢字を探し、言葉の理解を深めるとともに、新聞への関心を高める実践を行った。

○2年生国語科「記事の写真からお話をつくろう」 八木山動物園の2匹のレッサーパンダを取り上 げた記事の写真から、物語作りをさせた。児童の発 想がどんどん豊かになるように、書いた文章を友 達同士で紹介し合った。



2中学年の実践

○3年生図工科「新聞で工作しよう」

新聞紙は、身近な生活の中にある素材で、児童にとって、その軽さと大きさという点で、大変扱い易いというメリットがあり、ちぎったり、丸めたり、折ったり、ものを包んだりと、比較的容易に加工することができる。手本に従って、手作りエコバッグ、スリッパ、カブト、鉄砲などを制作した。



○4年生社会科「国際交流に取り組むまち・塩竈市」 特色ある地域の学習で塩竈市を取り上げ、どの ようにして多くの観光客を集めているのか調べ学 習を行った。学習の最後に、「コロナ禍においては どのような取組があるのだろうか」と発問すると 新たな問いを持つ児童がいた。そこで、実際に観光 客が激減していることやGotoトラベルのこと など新聞記事を活用して把握させ、学習した内容 を現実のこととして捉えて理解することにつなげ させた。

3高学年の実践

○5年生国語科「新聞記事を読み比べよう」

まず新聞記事を構成する見出し、リード文、写真の 効果を確かめ、新聞記事の特徴や編集の仕方を学習 した。新聞の構成や特徴を理解するために、一人に 1 部ずつ新聞を持たせ、学習を展開した。実際の新聞を 手にすることにより、意欲的に取り組み、より深く理解を 深めることができた。

そして、二つの新聞記事を読み比べることで、記事の共通点や相違点を捉え、書き手のねらいに気付かせていく。これらの活動を通して新聞記事には、それ

ぞれの書き手の意図があることに気付き、新聞をより身 近に感じることができた。



○5年生社会科「情報産業とわたしたちのくらし」

「放送、新聞などの産業と国民生活のかかわり」と「情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり」について学習をした。児童に身近なインターネットから考え、テレビ局、新聞社など、様々なメディアの特色を考え、比較、整理しながら、放送産業と国民生活とのかかわり、そして情報産業に従事している人々の工夫や努力をつかませることで、その情報は、情報を発信する側の努力や工夫によって成り立っていることに気付くことができた。なお、東日本大震災時の石巻日々新聞の取組について調べた際には、児童が真剣なまなざしで新聞社の使命感を捉えようとしていた。

○6年生道徳科「土石流の中で救われた命」

「土石流」そのものの存在を知らない児童が多いと思われたため、新聞を使って過去の土石流の写真や被害を説明する記事を授業の最初に提示した。 土石流の被害の大きさを知ることで、教材文の中の人物がいかに正義感のある行動をとったのかを感じ取ることができた。

○6年生国語科「世界に目を向けて意見文を書こう」 フェアトレードを広げていこうという意見文を、 各種資料を活用しながら書く単元である。しかし、 初回の授業でフェアトレードの意味や取組を知っ ている児童は一人もいないことがわかった。そこ で、フェアトレードに関する記事を2つ用意し、フェアトレードを行う国の就労状況や、実際の取組の様子について読み取らせ、フェアトレードの大切さをより深く理解できるように指導した。





5 成果と課題

(1) 成果

- ・自主学習で新聞記事に関する感想を書いたり、 河北新報の web ページからNIEワークシートを ダウンロードして取り組んだりと、新聞を学習に 取り入れる児童が見られるようになった。
- ・行事と関連させたNIE教育の取組は、その行事への意識を高めさせることができた。
- ・アンケート結果の比較からどの学年でも「学校で読んでいますか」「新聞がどのようなものか知っていますか」「ニュースに関心がありますか」「新聞の記事を読み、自分の考えを持つことができますか」の項目で増加している。特に、「ニュースに関心がありますか」では、5年生で30%以上増加するという大きな変容が見られた。「4 実践紹介」の(5)「特別活動での実践」に記したように、楽しみなが

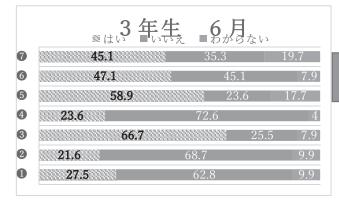
らニュースや新聞に触れさせたことが背景にある と考える。

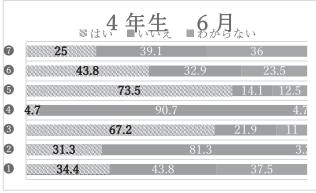
・「新聞の記事を読み、自分の考えを持つことができますか」というアンケート結果の変容から研究目標を概ね達成できたと考える。「2 研究テーマ」に記したとおり、「社会的事象に関心を持つ児童」について、関心が高いという自己評価だけではなく、自分の考えを発信する姿と考えている。月に一度は必ず、NIEワークシートに取り組んだこと、特に時事的な記事を選んで作成したことが背景にあると考える。

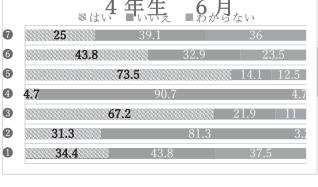
(2)課題

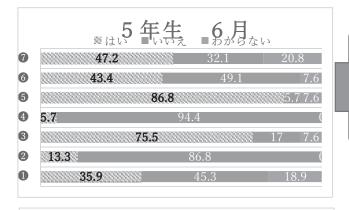
- ・新聞を活用することは「手段」であり、目指すべきものは教科・領域等の「目標」である。実践指定校ということで、不必要に新聞の活用を急ぐことがいくつかあった。 授業のねらいから外れない資料の活用を常に大事に しなければならない。
- ・どうしても、高学年の取組が多くなってしまう傾向にあった。教科・領域の目標から逸脱していないかを確認した上で、どの学年の、どの教科でどのようなことができるか、児童のどんな姿を目指していくのかを年度初めに考えておく必要があった。
- ・本実践の研究テーマからは逸脱するが、本校の家庭での新聞購読率が4割程度とやや低いことが分かった。また、購読している家庭があっても、家で新聞を読む児童は現在でも少ないことが分かった。活字離れによる学力への影響を懸念することとともに、メディアリテラシーの点でも危惧することは大きい。世間では、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、不正確な情報がインターネット上で拡散されることもあり、必要な情報を正確に読み取り、冷静な判断をする力を児童に身に付けさせなければならないと一層感じている。実践指定校としての2年間が終わるが、今後も継続して新聞を活用して教育活動に当たっていく必要を感じている。

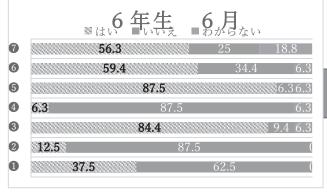
(担当 教諭 佐藤 慶一)

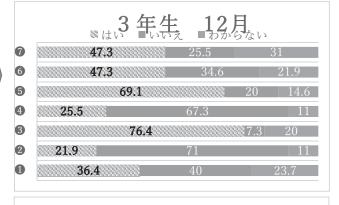


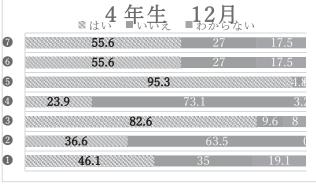


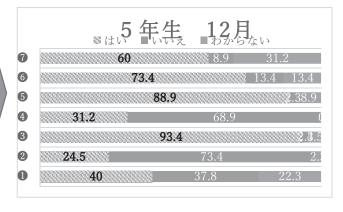


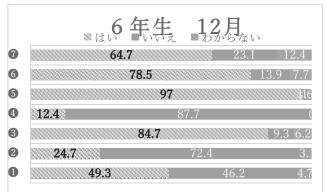












- **⑦**「新聞の記事を読み、自分の考えを持つことができますか」
- **⑥**「ニュースに関心がありますか」
- **⑤**「新聞がどのようなものか知っていますか」
- 4 「学校で読んでいますか」
- 3 「学校で読めることを知っていますか」
- 2 「新聞を家で読んでいますか」
- 「新聞を家でとっていますか」

日常の授業実践に於ける新聞の情報活用の一試み

1 はじめに

本校は、令和元年度から2年間、NIE実践指定 校の認定を受け、実践を行っている。

1年目は、小学校社会科教育研究協議会東北大会 が本校を会場に行われたことにより、社会科の授業 に新聞を活用した実践を行った。

2年目となる今年度は、社会科に限らず、様々な 教育活動で新聞を活用することをねらいとし、各学 年が1年間の単元を見通し、どの教科・単元で活用 できるかを考えながら実践を行ってきた。

2 実践の概要

(1) 1年目の実践

【5年 社会】

学習内容と今の社会の現状を結び付けるために、 新聞の情報を活用した。その中で、令和2年度から 扱う「領土問題」については、国政状況や海外の国 との関係が刻々と変化する中での学習になる。そこ で、学習内容と関連する最新の国内外の情報を、児 童に提示し、授業実践を行った。児童は、現状を把 握することで、様々な視点からより深く考えること ができた。

新聞記事は、5学年の廊下に掲示し、児童が常に 目にすることができるようにした。



【児童が常に目にできるように掲示した記事】

【6年 社会 模擬選挙での活用】

民主主義や選挙の仕組みを理解させるために、実際の市議会選挙を授業で模擬的に行った。はじめに、候補者の名前を書いていき、この中から一名の候補者を選ぶように伝えた。しかし、児童は「誰に投票したら良いか分からない。」と口々に話した。しばらくすると、子供の中から「新聞に詳しい情報が載っているよ」という発言があった。そこで、「実際に調べてみよう」と促し、該当する日の新聞を与えた。すると、候補者の情報が整理されて掲載されている紙面があることに気付き、候補者の主張をじっくりと読み取る姿が見られた。

次に、自分が選んだ候補者とその理由について発表させた。児童は、悩みながらも新聞から読み取った情報を根拠に、自分の考えをしっかりと説明することができた。

最後に、翌日に改めて選挙を行うことを伝えると、 その日の自主学習で候補者のより詳しい情報を新聞 から探してまとめてくる様子が見られた。さらに、 新聞のレイアウトに着目し、どの候補者も公平に扱 うように工夫されていることに気付く児童もいた。

このように、新聞活用に結び付ける授業の工夫と、 実際に新聞を活用することで、選挙について興味関 心を高め、選挙の仕組みを理解させる一助となった。



【授業場面:投票の様子】

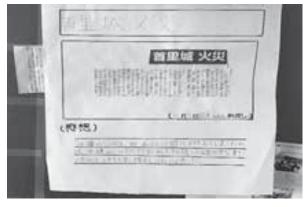
【6年 特別活動 「新聞でスピーチ」】

朝の会で自分が興味を持った新聞記事を題材として話すこととした。教室には、1週間分の新聞を置き、発表する前日までに記事を切り抜き、感想を書かせた。

はじめは、どのような記事を選び、何を書いたら 良いか悩む姿が見られたが、次第に記事から読み取 ったことを自分の言葉で伝えようとする姿が見られ てきた。また、以前よりも新聞やニュースに関心を 持つようになってきた。

発表するために作成したワークシートは、クラス内に掲示し、児童がめくって見返すことができるようにした。





【児童が作成したワークシート】

【特別支援学級 「ことばの貯金箱」】

特別支援学級に在籍する高学年児童2名を対象に、ことばの貯金箱の実践を行った。

普段、新聞は読まないことが多いということで、 はじめはどんな言葉を集めたらよいか迷う姿が見ら れたが、活動を進めていく中で、「チャリーン」「いいね!」の言葉が飛び交うと、友達の声掛けに自信を付け、もっと集めようと新聞の隅まで目を配りながら、取り組む姿が見られるようになった。

児童は、「普段新聞を見ないが、新聞にはたくさんの素敵な言葉が使われていたことに気付いた。」「きれいな写真も載っていて、もっと新聞を読んでみたくなった。」と述べていた。

このように、新聞を使ってたくさんの言葉に触れ させる機会を与えることで、児童が持つ語彙を増や すとともに、よりよいコミュニケーションを図るた めの一助となった。

(2) 2年目の実践

【1年 生活「八木山動物公園のレッサーパンダの 名前を考えよう」】

今年度は新型コロナウイルス感染防止のため、行事がなくなり、予定していた八木山動物公園への遠足が中止となった。そのような中、河北新報の記事からレッサーパンダの名前の公募について知り、間接的ではあるものの、児童が動物とふれ合う良い機会として挑戦することとした。

今回の記事を提示し、食べられる実のなる木の名 前という条件から名前を考える必要があるというこ とが分かったため、まずは、全体で食べられる実の なる木について全体でインターネットを用いて調べ た。その後、今回のレッサーパンダの情報を知りた いという児童の声が上がったため、八木山動物公園 のHPから基本情報を共有し、「このレッサーパン ダに合う木はどれだろう」という問いを持って、木 とレッサーパンダの共通点を探しながら、名前を決 める根拠を見付けることとした。児童は、レッサー パンダが双子であることやその誕生日、体毛の色や 性格などからイメージを膨らませ、互いにそれらを 根拠にしながら候補となる名前を話し合った。その 結果、共通点のみならず、「その木(木の実)のよ うに明るく元気で生きてほしい」や「たくさんの人 に好きになってもらえるような名前がいい」などの 話題となり、話し合いの中で自分たちの思いを紡い でいく雰囲気となった。

最終的に、「オリーブ」と「グミ」の二つの候補 が選ばれた(双子のように似ていることやグミの色 が明るく元気なイメージであること、木や花が咲く 時期を考え、誕生日である6月との関連もあったこ となどを主な根拠とした)。

結果として、「グミ」が採用され、児童に伝えると、「一生懸命考えて良かった。」と、満足な笑みをもらした。児童が見付けた新聞記事からの情報を基に考えたことで、自分たちが身近な社会とつながることができたのだということを共有することができた。



【新聞を活用し、児童から挙がった名前の候補】

【5年 家庭 「整理・整とんで快適に」】

ごみを減らす3R(リデュース・リユース・リサイクル)と5R(+リフューズ・リペア)を学習した後に、河北新報に掲載されていた記事を基に、仙台市の廃棄物処理について児童に考えさせた。

この新聞記事には、これまでの仙台市は、資源物の分別・リサイクルの推進を中心に進めてきたが、政策を転換し、ごみの発生抑制に重点を移すことになったと書かれている。記事を読み、「仙台市・ごみ排出総量とリサイクル率」のグラフから読み取れることを児童に発表してもらった。その後、自分たちが生活の中で、ごみの発生を抑制するためにできる事をそれぞれ考え発表した。地元の新聞記事を基にして、より身近な問題として捉えることができ、自分事として考えることができた。





【 授業の様子 】

【5年 総合「ともいき長命プロジェクト」】

今年度の5年生は、総合的な学習の時間において「地域・共生」をテーマとして学習に取り組んでいる。自分たちが生活している地域に目を向け、人々との触れ合いを通して、抱える課題について考え、共に暮らしやすい地域を目指し、自分たちにできることを発信していくという学習である。

まず、体験活動として、地域の施設や団体の方々をゲストティーチャーとして迎え、地域に期待することや課題についての話を聞いた。そこから、自分たちでできる地域共生を考え、どんな活動ができるか計画を練る段階で、地元新聞である河北新報の記事を活用した。この記事は、県内の他地域の小学生が実際に地域の施設や周辺道路を車椅子で歩き、危険な場所を調査し、バリアフリーマップを作成するという内容のものである。同じ5年生の活動の記事を読むことで、どんな活動をしていくか見通しを持つことができ、構想の幅を広げることができた。

また、更に、計画を立てる際に、河北新報の県内の小学生による地域活動の記事を河北新報データベースにて検索し、児童に提示し参考にさせた。児童にとって、新聞の記事はより身近で実用的な資料として使用することができ、考える際に大変有効であった。



【新聞記事を電子黒板で情報共有】

【6年 道徳】

今年度、本校は道徳を校内研究の教科としている。 そこで、道徳での新聞活用を考え、実践した。NI E研修会の際に紹介された手倉森誠監督の手記を使 い、本時では、学校をリードする6年生としての心 構えを再確認させ、卒業まで全員でよりよい学校を 作ろうとする意識を芽生えさせることをねらいとし た。

児童は、学校生活を送る上で大切なのは、自分一人の意見ではなく、周囲の意見にも耳を傾け、よりよいものを作り上げようとする意識であることを感じていた。

また、総合学習の一環で様々な人の生き方に触れ、 自分の生き方を見付けるという学習を行っているため、プロスポーツ選手の監督という職業にも興味を 持ちながら記事を読むことができた。

新聞記事の見出しを隠して提示し、本文から探して読むようにしたが、始めは「何だろう?」と言っていた児童も、記事を良く理解しようとじっくり読む姿が見られた。



【 記事をじっくりと読み進める児童1】



【 記事をじっくりと読み進める児童2】

3 成果と課題

(1) 成果

- ・新聞がすぐ手に取れる環境を作ることで、新聞 に興味を持ったり、楽しんで読んだりする児童 の姿が見られた。
- ・新聞記事を用いて授業を行うことで、学習と実 社会が身近に結びつき、課題をより深く考える ことができた。
- ・テレビやインターネット機器が普及し、新聞を 読んでいる児童が少ない中、新聞活用をするこ とで文章を理解する力を身に付けさせるための 一助となることが分かった。

(2)課題

- ・授業のねらいとその達成のための手立てとして 活用を図っていたが、意図に合った記事を選ん だり、探したりすることが難しく、通年を通し て定期的な実践を行うことが難しかった。
- ・年度初めに新聞に対する意識調査を行わなかったため、児童が新聞を活用したことによってどのような学びの効果を得たのか、また意識が変容したのか、具体を見取ることが出来なかった。
- ・新聞を使った授業提案をしたり、OJTなどで 新聞活用の効果などについて話し合ったりす る機会を設け、多くの教職員が実践しやすいよ うに研修を行うことが必要である。

(担当 教諭 佐藤 由依)

未来の創造

~2年間のNIEで育んだ強い心と高い志~

I はじめに

昨年度、岩出山中学校区(岩出山小学校・岩出山中学校・岩出山高等学校)は、宮城県教育委員会から志教育推進地区に指定され、志教育の実践と推進に努めた。志教育とは、人や社会とかかわる中で社会性や勤労観を養い、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考えさせながら、将来の社会人としてよりよい生き方を主体的に求めさせていく教育であり、3つの視点「人とかかわる・よりよい生き方をもとめる・社会での役割をはたす」を掲げている。

本校では、生徒一人ひとりが社会的・職業的自立に向けて、自分の生き方を考え、強い心と高い志をもって、自分の未来を創造するための能力と態度の育成が重要であると考えた。そこで、昨年度に引き続き、小・中・高及び地域との連携や交流を柱とした豊かな学びの構築を目標に掲げ、その手立ての一つとして、NIE教育を実践した。

【研究テーマ】

未来の創造

~2年間の NIE で育んだ強い心と高い志~ 【生徒に身に付けさせたいもの】

●強い心

夢や目標に向かって、自己の役割と責任をはたしながら学び続けるためのカ

●高い志

地域社会の中で、自己理解を深めながら生 活して抱いた将来の夢や目標

手立ての一つにNIE教育を掲げる理由は、3点ある。1点目は、社会の縮図とも言われる新聞を活用することで、今、世の中で起きていることをタイムリーに知ることができるからである。新聞記事には、興味のわく見出しや写真なども掲載されているので、生徒も記事に迫りやすい。2点目は、知識や経験のある人々の体験や意見に触れながら、自分の生き方を見つめ直す機会になるからである。3点目は、学習指導要領で求められている思考力・判断力・表現力の育成につながるからである。

以上の理由に基づき、各教科、道徳、学活、総合の

それぞれの学びのねらいに迫った新聞記事を効果的に活用し、生徒が他者とかかわり合いながら学ぶことができれば、小・中・高及び地域との連携や交流を柱とした豊かな学びの構築ができると考えた。

Ⅱ 2年間の主な実践の概要

1 伝えよう新聞バッグ(1年目)

視点1 人と『かかわる』

東日本大震災で避難してきた方々に手仕事のひと つとして提案した「新聞バッグ」について、海の手山 の手ネットワークの曽木玲子さん(岩出山在住)に講 話をいただいた。当時、大崎地区に避難してきた被災 者にとって、新聞バッグ作りが生きる力になったこ と、人と人とのつながりの大切さを感じたことなど を聞き、生徒は、よりよい人間関係の構築や支え合う 集団づくりについて学んだ。





視点2 よりよい生き方を『もとめる』

河北新報や英字新聞を使って、2・3年生が実際に 新聞バッグの制作を体験した。また、新聞バッグから ヒントを得て、文化祭のテーマである「龍」を全校生 徒で新聞を使って制作した。龍のうろこを新聞バッ グで作り、そのバッグに夢や希望を入れて、龍のよう

に高く強く舞い上がりたいという願いをもって、全校で取り組んだ。中国では、龍は、最大級の幸せを運ぶ縁起の良い動物と言われている。文化祭では、全長約10mの龍を披露し、来場者を驚かせた。河北新報の令和元年11月6日の朝刊にも掲載された。



視点3 社会での役割を『はたす』

台風19号(令和元年)の影響で大崎市鹿島台で河川が氾濫。生徒会では、同じ地域に住む者としてはたせる役割を考えた結果、志教育実践発表会の会場で、小・中・高で連携し、募金活動を行った。募金を呼びかけるポスターは、新聞から切り取った言葉や写真を活用し、ことばの貯金箱形式で作成した。募金していただいた方には、感謝の気持ちを込めて、岩中生手作りの「新聞バッグ」をプレゼントした。









2 NIE タイム「服のカプロジェクト」の実践(1年目) 視点1 人と『かかわる』

朝の学習活動「NIE タイム」の時間、中新田中学校 2 学年がユニクロと協力し、難民に子ども服を送るプロジェクト「服の力」を実施しているという新聞記事を読み、感想を書いて発表した。



視点2 よりよい生き方を『もとめる』

生徒会執行部や NIE 担当である図書委員会を中心にアンケートを実施して話し合った結果、中新田中学校 2 学年が取り組んでいる「服の力」に協力することが決定した。ことばの貯金箱形式で、家庭で不要になった子ども服の提供を呼びかけるポスターやチラシを作成し、文化祭や三者面談中に子ども服を回収した。







視点3 社会での役割を『はたす』

回収した服を整理し、中新田中学校に届けた。ユニクロスタッフに同行し、実際に難民に服を届けた経験があるフォトジャーナリスト安田菜津紀さんからもメッセージをいただき、難民問題において自分たちにもはたせる役割があることを知った。



【回収した子供ども服】 ○長袖 361 ○半袖 304

○ズボン○スカート○ワンピース○ベビー服177

4 7

○防寒着

【安田菜津紀さんからのメッセージ】

難民となってしまったおばあちゃんが、「私たちのことを忘れないでね」と涙を流しながら子ども服を受け取ってくださったのを覚えています。「服の力」の先には、たくさんの人の笑顔が待っています。

3 「ありがとう3年生の会」の開催(2年目)視点1 人と『かかわる』

新型コロナウイルスの影響で中総体やコンクールに臨むことなく、3年生は部活動を引退。最後の大舞台の中止を受けて目標を失った3年生の多くは「心が折れた状態」だったが、気持ちを少しずつ切り替

え、自らの進路実現に 向けて歩み出した。そんな 3年生に感謝の思いと進路 実現という新たな目標に向 かつて頑張ってほしいとい うエールを伝える会「あり がとう3年生の会」を2学 年が中心となり開催するこ とになった。



視点2 よりよい生き方を『もとめる』

「ありがとう3年生の会」で感謝の思い&進路実現 に向けてエールを送るために、新聞のことばや見出 し、写真を使って以下のような取組を行った。

○部活動ごとに招待状の作成



○感謝の思いを込めたプレゼント



視点3 社会での役割を『はたす』

「ありがとう3年生の会」では、各部ごとに3年生と2年生の代表がスピーチを交わした。新型コロナウイルスの影響で悔いを残したまま引退する3年生に対し、感謝の思い&エールを贈るという後輩としての役割・責任を果たすことができた。

【3年生の感想】

○後輩は、部長である私が辛くて大変だった時期の 姿を見て、先輩から学んだことがたくさんあるとス ピーチをしてくれて嬉しかった。 つながりの大切さ を実感した。 (陸上部部長)

○部活動の思い出がよみがえり、試練に負けないで 頑張ろうという勇気をもらった。部活動ができる環 境を当たり前ではなく、ありがたいことだと思って、 後輩には頑張ってほしい。(卓球部部長)

【保護者の感想】

○最後の中総体は中止となってしまいましたが、途中で投げ出さず続けてきて良かったと思います。(サッカー部保護者)





4 いっしょに読もう新聞~学校同士の交流~(2年目) 視点1 人と『かかわる』

昨年度、難民に子ども服を送るプロジェクト「服の力」で交流した中新田中学校では、休校期間中、「新型コロナウイルスに関連する新聞記事のスクラップ」を行った。本校では、感染予防のため人と人との交流が難しい状況でもできる活動はないかと考えた結果、中新田中学校から全校生徒分の新聞のスクラップを借用し、NIE 交流をすることになった。

【借用した新聞記事の主な見出し】

- ○医療従事者差別 宮城でも
- ○夏の甲子園中止 3年生に花道を
- ○知って食べて 地元店
- ○オンライン授業 改善に知恵
- ○コロナ禍 困った夏の成人式



視点2 よりよい生き方を『もとめる』

NIE タイムの時間を活用し、生徒一人につき4人の中新田中学校の生徒が取り上げた新聞記事と感想を読んだ。ウイルスに関する知識、各国の感染状況と予防対策、医療現場の現状と苦労、経済への影響や働き方の変化など、様々な視点で書かれた新聞記事を読むことで、ウイルスにどのように向き合っていくべきかについて知ることができた。最後に、自分の感想や考えを付箋に書くことで、今後の自分の生き方についての考えも深めることができた。

【新聞記事:ごみ収集作業員に感謝の張り紙】



○私も S・H さんの意見に賛成。外出自粛でゴミの量も増加している。感染リスクが高いマスクもたくさん捨てられている。リスクを背負って働いている清掃員の皆さんに感謝したい。(岩中1年)

【新聞記事:志村けんさん死去】



○大好きな人が亡くなり、信じられない。コロナが憎いし、怖さを実感した。親族が火葬にも立ち合えないと聞き、かわいそう。今後、感染予防対策をしっかり行いたい。(岩中3年)

視点3 社会での役割を『はたす』

図書委員会では、新聞記事ごとに付箋(岩出山中学校の生徒の感想や考え)をまとめ、中新田中学校に届けた。中学校同士の交流から生まれた新しい形のスクラップ作品は、一人ひとりの意見を尊重していると高く評価され、令和2年度河北新報スクラップコンクールで審査員特別賞を中新田中学校と合同受賞した。この取組を通して、生徒一人ひとりの「自分の命は自分で守る」という意識が高くなった。

【生徒の感想】

○中新田中学校の皆さんと新聞を通して交流ができてよかった。文章を書くのは苦手だったけど、手紙形式で思いを伝えるのはやりやすかった。(1年) ○1つの新聞記事から多くの意見や感想を読んだり、書いたりして楽しかった。他の学校と新聞でつながることはおもしろいので継続したい。(2年) ○同じ新聞記事であっても他者と自分では考え方や注目する視点が違っていることもあり、新しい発見をすることがたくさんあった。(3年)



5 「エールでつながる NIE タイム」の実践(2年目) 視点1 人と『かかわる』

毎週火・水の朝の10分間を「NIEタイム」と位置づけて、読解力と表現力の向上を目指した学習活動を全校体制で行っている。火曜日は、全校で同じ新聞記事を読んで160字程度の感想や考えを書く。水曜日は、学級ごとに一人ひとり発表し、互いに意見を共有している。扱う新聞記事のテーマは様々だが、新聞ではたくさんの人の生き方が紹介されているので、自分の生き方を見つめ直す機会にもなる。今年度は、新型コロナウイルスの影響で人とかかわることが制限されたが、新聞を通して人とかかわり、学びを深めることができた。

【扱った新聞記事の主な見出し】

- ○郵便ポストが特産いちごに
- ○「ゴミ」なのにかっこいい
- ○魚のためにもマイバッグを
- ○チーム引っ張る主将の心得
- ○池江万感「戻ってきた」病気克服 パリ五輪へ
- ○洋服店「花」求める人 ユニクロ銀座店で挑戦

- ○意志有れば道在り 湯沢高の書道部
- ○デニムマスク 人気やまず
- ○本気の応援 奇跡を起こす
- ○手洗いできている人 2割
- ○米民間宇宙船 ISS 到着
- ○豆腐日本一 新天地はバルセロナ

視点2 よりよい生き方を「もとめる」

NIEタイムで扱った新聞記事をきっかけに和歌山県の水城斉美さんと交流を育むことができた。水城さんは、肩を壊して大好きなバレーボールが満足にできなくなり落胆。そんな時にふるさと納税の特典でオーケストラの指揮体験をできると知り、新しい挑戦をしたいと申し込んだのがきっかけと述べている。水城さんの新聞記事を読んで書いた感想を冊子につづり、水城さんに贈った。感想をまとめた冊子の表紙は、「前向きに挑戦する人」と水城さんをイメージし、新聞の写真を切り貼りした「船出」のデザインにした。

生徒は、水城さんの 生き方を知ったこと をきっかけに、自分 のよりよい生き方に ついても考え、もと





めることができた。水城さんから心温まる返事も届き、生徒達は、「私達の言葉が水城さんに届き、その返事が今度は私達の励みになった」と喜んだ。新聞記事をきっかけにエールでつながった交流については、文化祭で全校生徒や保護者にも紹介された。さらには、文化祭会場に青空応援団もサプライズで登場し、全校生徒で平団長から魂のこもった熱いエールが全校生徒にプレゼントされた。

【水城さんからの手紙(一部抜粋)】

暗闇から救ってくれるのは、ほんの少しの勇気と 人の温かい真心。皆さんの感想文にまた頑張る勇気 をもらいました。コロナでたくさんのことを我慢す る日々を送っているはずだと思いますが、少しでも 元気に楽しい学校生活が送れるよう、遠い和歌山か らエールを送りたいと思います。

「頑張れ岩中生!幸せに岩中生!ありがとう!」





視点3 社会での役割を「はたす」

生徒達は、新聞記事をきっかけに育んだ交流を通して、言葉で互いにエールを伝え合うことは、生きるための心の支えになることを実感した。そこで、新型コロナウイルスの影響で人と人との交流が限られてはいるが、エールを送ることで社会ではたせる役割について、生徒会を中心に考えた。その結果、大崎市社会福祉協議会と連携し、岩出山地区で一人暮らしをしていて、見守りが必要な高齢者約400人に「ことばのギフトカード」を制作して届け、エールを送ることにした。コロナ禍により、高齢者同士の交流の機会も減っており、高齢者の孤立化も心配される。中学生が手作りのギフトカードを高齢者宅に届けることにより、地域とのつながりが深まり、岩出山がさらにあったかい町になるよう、中学生にできる役割をはたしていきたいと考える。

【今後の予定】

2月中旬 志教育講演会 (テーマ:地域の福祉活動) 2月下旬 制作活動 (ことばのギフトカード)

3月上旬 社会福祉協議会連携事業(高齢者宅訪問)

【ことばのギフトカード(メッセージ付き)】

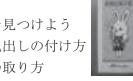


6 仕事を学ぶ〜NIE を活用した進路学習〜(2年間) 視点1 人と『かかわる』

1学年の生徒を対象に6人の職業人を招き、働く 意義を学ぶ「職業講話」を行った。生徒は、事前に河 北新報社の出前授業でスキル学習を行い、新聞記者 になったつもりで職業人を取材した。

【出前授業の内容】

第1回 新聞から喜怒哀楽を見つけよう 第2回 新聞作りのコツ・見出しの付け方 第3回 取材の仕方・メモの取り方







視点2 よりよい生き方を『もとめる』

1学年では、朝日中高生新聞に掲載されている「シゴトファイル」を活用し、仕事調べを行った。生徒

は、興味のある仕事について詳しく紹介する新聞記事をマーカー読みをした。印象に残った内容を3つ選び、出前授業で学んだスキル「見出しの付け方」を生かし、オリジナルの見出しを付けながら、仕事についてのレポートをまとめた。見出しを付けるスキルは、2年次の高校調べのまとめのレポートにも生かすことができた。生徒は、「仕事調べ&高校調べ」を通して、今の自分を見つめ直し、将来向けたよりよい生き方を考えることができた。





視点3 社会での役割を『はたす』

仕事についての学びをさらに深めるために、生徒は、2年次に職場体験を行った。生徒は、地域のスーパー、郵便局、図書館、花屋、美容院などで働く人々とかかわり合いながら、自分の生き方を見つめ直し、今後、社会ではたすべき役割について考えた。職場体験で考え、学んだことについて、はがき新聞にまとめ、年賀状として各職場に送った。

【はがき新聞にまとめられた生徒の声】

- ○キャンプ場経営の仕事を経 験し、故郷の自然を大切に 生かす姿に感心しました。
- ○美容院で働いている皆さんは、お客様に寄り添い、コミュニケーションを大切にしていてステキでした。



Ⅲ その他の実践

(1)ことばの貯金箱(全学年)

ことばの貯金箱とは、新聞から気に入った言葉や 写真を台紙に貼り、さらに言葉を書き添えながら自 分の想いを表現する活動である。3ヶ月間の休校を 乗り越えて感じた思いや文化祭に向けての意気込み をことばの貯金箱で表現した。生徒は、自分の心と向 き合いながら、表現活動に取り組むことができた。







(2)コラージュ(2年美術科)

新聞の言葉や写真を活用して、担任の先生に暑中 見舞いを作成した。伝えたい想いをもとにテーマを 設定し、言葉や色の組み合わせを工夫しながら、コラ ージュ作品を完成させた。 (はがき版・色紙版)





(3)はがき新聞(学習のまとめ・小中高・地域連携事業)

はがき新聞とは、見出しを付けながら伝えたいことを短い文章でまとめるはがきサイズの新聞である。この取組は、焦点をしぼって書く力が求められるので要約する力が身に付く。見出しを工夫したり、はがき全体に色を塗ったりすると、読み手の興味関心を高める。はがき新聞で学習のまとめを行ったり、はがき新聞で小中高の交流を図ったりした。また、地域の皆さんにはがき新聞で感謝の気持ちやエールを送り、交流を深めることもできた。

【2年間で取り組んだ主な「はがき新聞」のテーマ】

- ○恩師への近況報告(小中交流)
- ○被災地訪問を通して(防災学習)
- ○職場体験のお礼状(年賀状)
- ○お気に入りの本の紹介(国語科)
- ○卒業文集(個人のページ)
- ○立志式~決意と感謝~

(4)英語で5行詩(2学年英語科)

新聞からお気に入りの写真を選び、条件に従って 英語で5行詩を作成した。既習の英単語や文法を復 習しながら、表現力の向上を目指すことができた。







(5)200文字作文(視写)

実力考査や公立高校の入試問題には、200文字作文があるが、苦手意識をもっている生徒が多い。そこで、朝日新聞に掲載されている「天声人語」を読んで書いた200文字の作文例



を視写するトレーニングを冬休みに行った。語彙力 や文章表現力の向上だけでなく、時事問題について 考えることで視野を広げることもできる。今後は、週 末課題としてトレーニングを継続する予定だ。

(6)文化祭全校制作 暁~数多照らす光となれ~

10月に開催された文化祭の全校制作では、岩出山の「山」に見立てて作った三角すいを台紙代わりとし、ことばの貯金箱で合唱コンクールに懸ける想いを表現。新聞で作ったドラゴンを羽ばたかせた。新聞週間に発表される標語を参考にNIE川柳コンクールも開催した。新聞活用で身に付く力や新聞の良さなどについて全校で川柳を詠んだ。





【NIE 川柳優秀作品】

- ○コロナ禍で 会えないならば 新聞で
- ○その記事が 誰かの心 動かすよ
- ○新聞は 人をつなぐ 架け橋だ
- ○その記事は 知恵がつまった 宝の地図

Ⅳ 成果と課題

Ⅱ・Ⅲで紹介した実践で、生徒は、新聞に親しむだけでなく、新聞記事を読んで知ったこと、感じたこと、学んだことなどを学校生活、小・中・高の連携事業や地域との交流に生かして、豊かな学びを構築し、よりよい生き方をもとめた。そして、募金活動や子ども服の提供、地域の高齢者支援など、社会ではたせる役割を見つけて取り組み、他者とのかかわりを大切にした協働による学びを進めた。生徒にとって、「かかわる・もとめる・はたす」という志教育の視点で、新聞を活用しながら主体的で対話的な深い学びを実現できたことが大きな成果である。

課題としては、NIEの学習活動を継続的に実践していくための指導者側の体制作りである。現在、NIEタイムやはがき新聞、英語で5行詩については、教育課程に位置づけて取り組んでいる。200文字作文も週末課題として、今後継続していく予定である。しかし、志教育の一環としてのNIE活動となると、課題設定の仕方、他教科とのつながりを考えた学習内容の構築、地域と連携して学習を進めるための手段など、指導者としての様々なスキルが必要となってくる。今後は、NIE担当だけではなく、学習指導部としての会議を定期的に行い、生徒が地域と連携しながらより良いNIE活動が実現できるよう指導者側の体制づくりに努めていきたい。

(担当 教諭 齋藤 美佳)

NIE を通じた受験指導を目指して

1 はじめに

創立 45 年の本校は各学年6クラスの普通科に、 平成 28 年度から新設された災害科学科1クラスを 加えた計 21 クラス・800 人強の進学校であるが、 平成 29 年の2月にはユネスコスクールにも登録され、ESD(持続可能な開発の為の教育)に向けた防 災・減災教育にも取り組んでいる。

今年度は平成25·26年度に続いての実践指定校 としての2年目に当たるが、昨年度同様の取組を通 じて受験指導に対して新聞を活用出来ないか、模索 した。

2 各教科での取組

今年度も職員室入り口の脇に提供された6社の新聞をラックワゴンに入れ、どの教科でも授業等で利用出来る様に環境を整えておいた。

(1) 3年生·公民科「時事問題研究」

主に公務員希望者等 32 名が選択する本校独自の設定科目。政経の演習問題を中心にしている。 公務員試験が一段落したところで昨年度同様の「6 社読み比べ」を試みた。多様な視点や様々な捉え方に気が付いた者も居たが、通年での連続指導ではない為、後に述べるアンケートには単純な解釈や状況を把握していないものが目立ち、掘り下げて考えられる生徒は非常に少なかった。



(2) 1年生·公民科「現代社会」

普通科6クラスの必修科目だが、校内の授業配分の関係上、4クラスのみに上記の「読み比べ」をさせた後、アンケートで理解度をチェックした。 結果は上記3年生とほぼ同じだったものの、普段見たことの無い複数の新聞社の紙面に接して貴重な体験だったと感じた者が複数、散見された。

又、全員に対してアンケートで、把握した内容 や感想等を書かせたのだが、「あなたの家では新聞



を定期購読していますか」という設問では、両学年 共、ほぼ4分の3の生徒が「していない」と回答 し、「毎日、読んでいる」という生徒は全5クラス 中8名に過ぎなかった。

益々、新聞やニュース等を授業内で取り上げ、 学習内容とリンクしていることに気付かせて、学 習効果を上げるよう、努力して行かなければなら ないと痛感した。

3 3年生の小論文対策

ごく一般的な事例ではあるが、本校でも長年に亘って大勢の教員が新聞を利用した「総合的選抜」への指導を続けて来ている。過去の例題には字数制限付きの内容要約と、これに対する意見や考えを纏めさせる、というものが多く、単純な感想文になりがちな生徒に、知識や理解度・社会的な背景までをも組み込んだ「小論文」を書かせるのに、本校のみならず何処の学校の、どの先生も苦慮されていることだろう。

4 「新聞の読み方」講座

これも長年、本校で続けられて来ている「シチズンシップ教育」の一環として今年度も2月に1年生を対象に行われる予定である。

昨年度は河北新報社より須藤宜毅様を講師にお招きし、震災に於ける新聞報道や震災後の報道の役割等について講話して頂いた。



※昨年度も本校「iRis Hall」にて開催された。

5 終わりに

徹頭徹尾、コロナウイルスに振り回された年度ではあったが、逆に生徒たちの目は社会の動向へ向けられたのではないだろうか。しかし、その視点は新聞ではなくスマホに依存する一元的なものではないかと危惧している。

多岐に渡る受験勉強を効果的且つ効率的に向上 させるには新聞も含めた多様な情報源が不可欠であ ることに着目させる為、実践指定校としての活動が 終了した後もNIEに取り組む体制・姿勢を持続させ て行かねばならないと考えている。

(担当 教諭 幸野 久嗣)

NIE1年目の実践報告

1. はじめに

本校では今年度からNIE実践指定校となった。1年 目は、国語や算数などの教科授業の中で新聞を活用 する場面はないか各自考え、実践をおこなった。

実践はNIE担当4人の担当学年である6年生、特別支援学級、2年生を対象として、個人研究という形で進めていった。

2. 実践の概要

〈2年〉学級活動としての活用

低学年であるため、新聞に馴染みがない児童が多く見られた。そのため、まず新聞とは何か、どういうものなのかを実際に新聞を配って確認させた。

漢字が多い、難しくて分からないなどの意見が多く 挙がるかと考えていたが、見たことのあるものや興味 のあるものを自分たちで探し出し、まとめる姿が見られ た。

また、小学生向けのこども新聞というものがあること を伝え、同じ記事が載っているこども新聞と一般紙を 比べさせた。

「ふりがながある」や「一般紙と比べて写真や絵が多い」、「同じ記事でもこども新聞の内容の方が小学生向けで分かりやすい」などの意見が挙がった。新聞に関して興味を持つきっかけになった。



〈2年〉国語科での活用

学習内容を生かす場として新聞を活用した。新聞 の中にあるカタカナ表記を探し、丸を付けていく作業 で、子供たちは夢中になって取り組んでいた。

専門用語は難しいので取り上げなかったが、人名 や地名などのカタカナ表記に触れることで、知識が広 がる良い機会になった。



国語「なかまになることばをあつめよう」ではグループごとに「学校」の仲間になる言葉を新聞から探す活動を行った。

一般紙を使用したため、2年生で習っていない漢字が多かったり、難しい言い回しの言葉があったりと、なかなか探し出せない児童が見られた。



〈特別支援〉算数科での活用

特別支援学級2年生2名を対象に、三角形と四角 形の授業を行った。新聞の中から図形を探し、長方形 は赤色、正方形は青色、三角形は緑色を塗った。

折り紙の折り方が書いてある記事に注目した時は、 折り目を意識することで、三角形と正方形が組み合わ されていることに気付くことができた。また、「長方形に も見えるけど?」と児童に聞いてみると、三角形に色を 塗った理由を添えながら説明をすることもできた。



写真や文章は、一見しても図形が見付からないので集中して探していた。児童は、文字の中に長方形が隠れていることに気付き、「あった!」と声を上げて驚いていた。それをきっかけに、小さな文字の中からも図形を探し、文字の中にもたくさん隠れていることを知った。その形が変わると字形が崩れることも話し合うことができた。

低学年の学習として、未習の文字にも触れながら図 形を探すことで、意欲的に活動することができた。また、 文字の中の図形を見付けたことで、親しむだけではな く、きれいな文字を書くための画の形や長さが大切と いうことにも意識を向けることができた。

<6年>単元での活用

「さまざまな熟語」の単元で、「新+世界」や「松+竹+梅」、「臨時+列車」など、三字以上の熟語の構成を学習した。教科書に例示された熟語の他にも社会の中で様々な熟語が使われていることに気付かせるため、新聞を使って熟語を探す活動を行った。

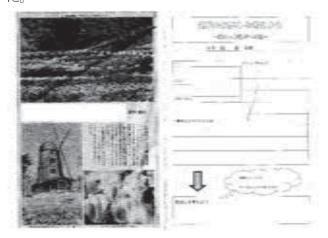
新聞で調べていると、教科書の例にはない構成を見付け出したり、自分で熟語を作ったりと、熟語の構成について深く捉えることができた。



<6年>新聞の見出しを考えよう

修学旅行での活動をまとめる新聞作りや、国語の 「防災ポスターを作ろう」などの学習があり、内容と結 びついた見出しを考えられるようになってほしいとの 思いから、新聞の見出しを考える学習を行った。

その活動を通して、自分が一番伝えたいことを意識 した見出しを書くようになったことや、内容が端的に分 かる見出しを考えられるようになった。その後の修学 旅行の新聞やポスター作りで、見出しを考えながら内 容を振り返ったときに、一番伝えたいと思っていること とずれていることに気付き、内容を訂正する児童もい た



3. 成果と課題

<成果>

- ・新聞に興味を持ち、学習活動に生かしていた。低学年では、新聞の中から興味のあるものを見付け出す力が身に付いた。高学年では、単元ごとにどのように利用できるかをよく考えるための材料として活用する力が身に付いた。
- ・新聞に親しみを持つ児童がとても増えた。

<課題>

- ・特に特別支援学級や低学年では、一見したときの「できそう!」と思える写真や文字の量が意欲に影響するため、単元ごとにどのように活用するかを考え、新聞の記事を厳選する必要がある。
- ・今年度はNIE担当のクラスでしか実践することができなかった。来年度は担当クラスの児童だけではなく、全校児童がもっと新聞を身近に感じられるように、各社ごとの新聞コーナーの設置等工夫していく必要がある。

(担当 教諭 吉岡 健悟)

新聞を身近に感じることができるNIEの取り組み

~新聞作成や投稿、Facebook での情報発信を通して~

1 はじめに

「新聞への親しみ」をテーマに、今年度の実践を 進めていくことにした。理由として、家庭によって は新聞を購入していない場合もあり、多くの活字に 触れる機会を少しでも増やしていきたいと考えた。 また、学校での実践を即時、学校のホームページで ある Facebook に掲載することで、家庭や地域にも 発信をしたい。多くの感想や励ましの言葉をもらえ るように考えた。以下には、6月~12月までの実 践について、Facebook に掲載した内容を中心に、 紹介する。

2 実践の概要

(1) 6月「委嘱状交付式」

委嘱状の交付式を開催。 今年度から2年間、NI E実践指定校となる。



【交付式の様子】



【委嘱状】

(2) 6月「NIEコーナー」

職員室の廊下には、「NIEコーナー」を設置 し、新聞活用のアイディアを募集する呼び掛けを

した。教育に新聞を活用 するとどのような良いこ とがあるのかや、どのよ うな場面で活用すること ができるかなどを学校全 体で考えていけるように した。各学級で紹介した り、先行的に実践をして いく学年などを決定した りした。また、年間を通 じて、各教科・領域で実 践できそうな内容について、 職員で確認をした。



【NIEの紹介】

(3)7月「子ども古地図探検隊1(4年)」

総合的な学習の時間において、2人の方をゲスト ティーチャーとして招いた。

新聞作成へ向けての流れの説明や石巻市湊地区 のことについてのいろいろを教えていただいた。ま た、湊地区の地図の変遷も見せていただいた。

児童は校歌の歌詞に登場するキーワードから湊 の歴史について、興味津々の様子であった。

感想発表の中では、「住んでいる湊に誇りがもて ました」「湊第二小の歴史に興味をもちました」 などと聞かれた。

- ・石森洋史さん (石巻日日新聞社)
- ・奥堀亜紀子さん(石巻日日こども新聞)



【新聞紹介の様子】

(4) 7月「子ども古地図探検隊2(4年)」

各グループでデジタルカメラとメモを持参し て、フィールドワークを行った。今と昔を比較 し、多くの情報を得ることができた。

○取材先

- ○協力
- 多福院方面
- 石巻目日新聞社
- 内海橋方面
- ・石巻日日こども新聞
- 湊二小方面
- 若生工業株式会社



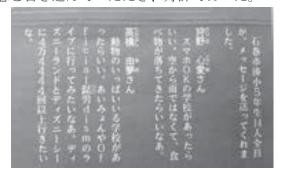


【取材と 記念撮影】



(5) 8月「こども新聞」への投稿

河北新報の「週刊かほピョンプレス」に5年生全員のメッセージを載せていただいた。河北新報4444号を記念する特集号に、自由作文を応募した。読者の方からもFacebookのコメント欄に感想を書き込んでいただき、好評であった。



【5年生のメッセージ 新聞掲載】

(6)8月「声の交差点」への投稿

6年生児童が書いた「会津への修学旅行楽しみ」 を河北新報の投稿欄へ掲載していただいた。

児童は、会津若松市の作左部茂春さんという方の 投書を読み、考えたことを書いた。すると、作左部 さんから御礼の手紙が届き、活字を通して、遠くの 方ともつながることができた。多くの方に読んでも らうことで大きな反響があり、本人や学級の友達も 大きな喜びにつながっていた。また、書くことへの 興味・関心が高まってくるのを感じた。



【6年生児童の投稿】

(7)9月「子ども古地図探検隊3(4年)」

4年生の総合的な学習の時間で、7月から作成していた新聞が完成した。手元に届いた新聞に大きな歓声が上がった。新聞記事を読んだ感想をワークシートに書いて、友達と共有できるようにした。

○総合的な学習の時間

- 1 オリエンテーション(1時間)
- 2 フィールドワーク (2時間)
- 3 新聞づくり (1時間)

○内容 ※3グループで取材

- 1 新たな内海橋が完成
- 2 680年前に親王が住んでいた
- 3 震災で変わった湊中周辺



【完成した新聞を手にして、記念撮影】



【完成した新聞】

よがん、新聞を見んで、思いたことをおいてしたかい。 、ち、ただ人は毎斤間包含売。またはしいけ で、今日の石巻日日ことを新聞、色また んで好て、とんなことがのっているのが、 ドキドキしました。これからを存り聞きまた んで、みたいけると、関しいました。

【4年生児童の感想】

(8) 9月「NIE用新聞」

9月から12月まで、下記の新聞を届けていただけることになった。図書室の入口に新聞コーナーを設置し、活用していくことにした。

- ○毎日新聞
- ○朝日新聞
- ○産経新聞

- ○河北新報
 - 「報 ○石巻かほく
- ○読売 KODOMO 新聞
- ○日経MJ







【届いた新聞を手にして、記念撮影】

(9)9月

算数「10000より大きい数を調べよう」

3年生の児童が、新聞にある10000より大きい数を見付ける活動を実施した。

新聞で数を発見すると、「あっ、ここにもある」「こっちにも」と声が上がった。児童からは、「これから、新聞を見るときには、数字にも注目していきたい」「新聞には、たくさんの数字が書かれていて、おもしろい」などという感想が聞かれた。

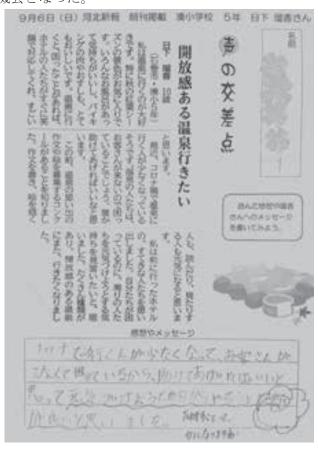


【大きい数を探す活動をする3年生】

(10) 9月「声の交差点」への投稿

5年生児童が書いた「開放感ある温泉行きたい」 を河北新報の投稿欄へ掲載していただいた。

掲載文章はワークシートの形式にして、友達から も感想を書くようにした。自分の書いた文章につい て友達にどのように感じてもらっているかを知る 機会となった。



【ワークシートの感想】

(11) 10月「投書欄が縁結び」

河北新報の「声の交差点」への投書がきっかけとなり、6年生の児童と会津若松の方が修学旅行中に対面を果たした。新聞の紙面上で遠くの方とつながることが大きな驚きであり、喜びへとつながった。



【鶴ケ城会館前で記念撮影】



【対面したことについて、新聞掲載】

(12) 10月「新聞記事コンクール」への応募

第26回新聞記事コンクールに応募した児童の 作品が優秀賞を受賞した、6年生児童は、「文章を 書くことが好きなので、受賞はうれしい。視野を広 げ、世の中の出来事にも目を向けたい」と喜んだ。 5年生の児童は、「今後も社会問題に関心をもち、 来年もコンクールに挑戦して自分の意見を発信し たい」と意気込みを見せた。



【優秀賞について、新聞掲載】

(13) 11月「修学旅行報告会」

これまで読んできた新聞の構成などを参考にし ながら、一生懸命に修学旅行新聞を作成した。そし て、5年生を招待して発表会を行った。5年生の児 童からは、「発表を聞いて、すぐにも修学旅行に行 きたくなった」と感想を述べた。



【発表会の様子】

(14) 「宮城県NIE研究大会」 ~児童・生徒の意見交換会~

オンラインで各学校をつないで、新聞を活用し た実践発表会が行われ、5・6年生の代表児童 が、ZOOMで参加した。6月から12月までの活用 事例について、発表した。また、中学生や高校生 の発表を聞き、感想もしっかりと伝えることがで きた。

○参加校

- 湊小学校
- 泉松陵小学校
- · 岩出山中学校 · 仙台城南高校
- 宮城広瀬高校
- 多賀城高校
- 泉高校



【発表会の様子】

3 おわりに

新聞掲載の喜びや反響により、児童は自分の思い を多くの方に伝えることの大切さを考えるように なってきた。今後、学校として、計画的・継続的に 新聞を活用できるシステムづくりをしていきたい。 また、新聞への投稿や授業、家庭学習での活用の機 会を増やし、興味・関心を高められるようにしたい。 (担当 教諭 相澤 洋之)

新聞に親しみ、楽しく活動するNIEの実践

1 はじめに

本校は松島町のほぼ中央に位置し、全校児童 144 名の学校である。昨年度から県教委の「小・中連携 英語教育推進事業」の指定を受け、外国語や外国語 活動における実践に重点を置き、研究を積み重ねて

家庭における新聞の購読率は約44%である。し かし、新聞に親しみ、活用している児童は少ない。

NIE実践1年目の今年度は教員自身が先行実践 等に学び、試行錯誤して取り組む年と位置付けると ともに、教員も児童も「新聞に親しむ」ことを第一 に考え取り組んできた。

2 実践の概要

(1) 教員研修の実施

① 「ミニ研修」の実施

NIEの実践を行っていくには、教職員全体でN IEについての理解を高めていく必要がある。外部 講師を招いての研修会開催は新型コロナウィルス感 染拡大防止の点から適切ではないと考え、職員間で 独自に研鑽を積んでいくことにした。

まず、職員同士で情報を共有する機会を増やすこ とが必要と考え、職員会議終了後に「ミニ研修会」 を毎回開いた。「NIEガイドブック」を教職員全 員分購入し、それをテキストにして学んだ。また、 各学年のNIE実践の情報交換の場とした。お互い の実践を知ることで、指導のアイデアを共有して、 実践につなぐことができるようにした。

② 「NIEだより」の発行

NIEで使える「技」や他校のNIE実践の様子 など教職員にとって必要と思われる情報を「NIE だより」として教職員に発行した。

(2) 付箋を活用した「新聞コーナー」の設置

玄関前に新聞を掲示したコーナーを設置した。当 初は児童が読みやすいように、担当が記事の切り抜 きを掲示した。松島町は県内有数の観光地であるた めに、新聞に記事として載りやすい。「遊覧船の再 開」や瑞巌寺での「疫病退散法要」など地元の記事 を掲示したところ、児童は親しみを持って読むこと ができた。

① 気に入った記事に付箋を貼る

記事を読み、自分が気に 入った記事に自分の名前を 書き、付箋を貼る取組を行 った。新聞を読む活動は「イ ンプット」である。それに対 して、自分が気に入った記 事を選び、付箋を貼る活動 は「アウトプット」である。

子供たちにとってもこの 方法はとても手軽で負担も 少ないので、右の写真のよ



うにたくさんの付箋が貼られ、 付箋が貼られた記事 好評であった。さらに、貼られた付箋を見て、「友 達はこんな記事に興味を持っているんだ。」など付 箋を介した交流を行うことができた。

② 付箋にコメントを書く

名前を書いて付 箋を貼る活動が慣 れてきたところで、 次は大きめの付箋 を準備し、コメント を書いて貼るよう にさせた。

初めは書き慣れ ない子供も見られたが、



コメントが書かれた付箋 既に貼ってあるコメントを読むことで書き方が分か り、書くことができるようになってきた。

③ 自分で記事を選び、思ったことや考えたことを付 箋に書く

付箋にコメントを書く活動に慣れてきた段階で、 今度は、記事の切り抜きの掲示から、新聞そのもの を掲示することにした。子供たちは紙面から記事の 内容を自分で読み進めなければならない。すると、 読み終えた後に、友達同士で記事について会話をし たり、自分の考えを伝え合ったりする姿が以前より 多く見られるようになった。思ったことや考えたこ とを「書く」前に、会話を通して共同で深め合う、 広め合うことができたのは「新聞掲示」だからこそ できる活動であると感じた。

(3) 新聞に親しませる工夫

① いつも新聞を手にとれる環境作り

全学級に毎日新聞を配布することで、新聞を身近 に感じる環境作りを行った。購読している新聞の種 類が学級数より少ない場合は、低学年にはカラーの ページのみを抜粋して配るなどの工夫をした。

活用の仕方は担任のアイデアに委ね、壁に掲示す る学級や箱に入れて閲覧用にしたり、記事の切り抜 きとして活用したりするなど独自性が見られた。

② 新聞ワークシートの活用

担当が新聞記事から問題を作る「ワークシート」 を作成した。ワークシートは新聞コーナーに設置し、 子供が自由に持ち出し、提出できるようにした。

人気映画の記事から興業収入や歴代順位などの数 値を読み取る問題や流行語大賞の記事から自分自身 にとっての2020年流行語ベスト3を書く問題な どさまざまな種類の問題を準備した。子供たちは興 味を示し、「次の問題はまだですか。」と待つ姿も 見られた。

③ 低学年も楽しめる「今話題の記事」の掲示

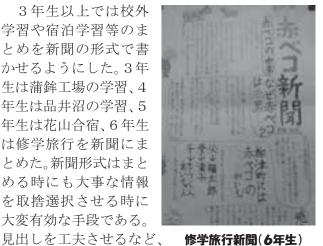
低学年にとって新聞の文字は小さく、内容も難し いので「読む」活動には抵抗感が大きい。

しかし、歴代映画の記録を塗り替えた「鬼滅の刃」 の記事や「ドラえもん2」の映画広告の掲示は低学 年の児童にも人気で、掲示コーナーに足を止める姿 が多く見られた。また、新聞を読んでみようという きっかけ作りになった。

(4)授業での活用

① 新聞作りを通したまとめの学習

3年生以上では校外 学習や宿泊学習等のま とめを新聞の形式で書 かせるようにした。3年 生は蒲鉾工場の学習、4 年生は品井沼の学習、5 年生は花山合宿、6年生 は修学旅行を新聞にま とめた。新聞形式はまと める時にも大事な情報 を取捨選択させる時に 大変有効な手段である。



修学旅行新聞(6年生)

それぞれの学年の実態に応じてまとめ、廊下などに 掲示することができた。

②授業実践

5年生の国語「新聞記事を読み比べよう」(7月)

の実践では、その日の新聞を児童全員に配付し、実 際の新聞にはどのような記事が載っているかに気付 かせる授業を行った。また、福島民報と読売新聞の 記事の読み比べを行い、書き手により意図が違うこ とを読み取った。さらに、河北新報社の記者からど のようなことに注意しながら記事を書いているかの 話をいただいた。児童は新聞記者に会うのは初めて で、新聞作りの苦労を知ることができたと共に、新 聞をより身近に感じることができるようになった。





新聞を手にすることで、 記事の分量などが分かる

新聞記者の話に子供も集中

③ 特別支援学級でも楽しめる片仮名探し

特別支援学級(1年生)では児童に新聞から片仮 名を探して赤鉛筆で○を書き込む学習を行った。

「シュート」「パラリンピック」「スピード」「イ ンド」「アメリカ」「フランス」「パリ」などの片 仮名をたくさん見つけて本人は大喜びであった。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・教職員間でNIEに対する理解を深めることがで きた。「楽しい」と感じる職員が増えてきており、 次年度につなげることができている。
- ・児童は抵抗感なく新聞に親しむことができた。特 に新聞の購読率が低い学年ほど「新聞にはたくさん の情報が載っているんだ。」という発見を驚きをも って感じる結果となり、新聞に親しもうとする意欲 付けにもなっている。
- ・通常の学級、特別支援学級を問わず、どの学年に おいても、子供の実態に応じた活動を行えば、子供 は意欲を持って新聞を読もうとすることが分かっ た。

(2) 課題

・新聞に親しむことはできた。次年度は、記事を読 み深めることである。NIEタイムなどの時間をつ くり、スクラップをしたり、新聞を読んで自分の考 えを書いたりする時間等の確保が必要であると考え

(担当 教諭 秋塲 文東)

NIE 1年目の実践報告

1 はじめに

近年、本校の国語科の授業を始めとする学習活動 の様子から語彙力、思考力・表現力が不十分な生徒 が多くいることを感じる。このことは昨年度までの 全国学力学習状況調査の結果からも明らかである。 様々な要因が考えられるが、主な要因として生徒た ちに活字を読む習慣がないことが挙げられる。活字 を読む習慣を身に付け、語彙力を養成する手立てを 模索していた中、NIE実践校の多くが各調査等で 実績を残していることを知った。NIEの活動に取 り組むことで、本校の生徒たちが活字を読む習慣を 身に付けるきっかけになり、さらには語彙を増やし、 思考力・表現力の養成に繋がることを目標とした活 動に取り組みたいと考えた。そこで昨年度、NIE 実践指定校に立候補し、無事に今年度からNIE実 践指定校の認定を受けることができた。1年目にあ たる今年度は、生徒たちが新聞に親しむ事を主なね らいとし実践をスタートさせた。

最終的には全ての教科において、新聞を活用した 授業実践を目指すものであるが、初めに自分の担当 教科である国語科や新聞づくりにあたる総合的な学 習の時間を授業実践の中心とした。

2 実践の概要

①新聞閲覧コーナーの設置

本校は普段全く 新聞を読まない生 徒が多くいるのが 現状である(昨年 7月に3年生を対



象に家庭での新聞購読の有無についてアンケート調査を行ったところ、約7割の家庭が購読していないという結果であった)ため、図書室の一角に新聞閲覧コーナーを設置した。

河北・朝日・読売・毎日・日経・産経の6紙を一 斉に設置した。この光景は生徒たちにとって普段見 慣れないため、インパクトがあるということ。各新 聞紙とも、大きなカラー写真が1面に掲載されてい ることが多く生徒たちの目をひきやすいということ から、生徒たちの足が新聞に向くきっかけになれば 良いと考えた。不思議なもので、1人が読み始める と、2人3人と引き連られるように新聞を読み始め る生徒が増えていくところが面白い。

②図書委員・図書支援員の協力

図書委員の生徒に 依頼し、新聞閲覧を 促すポスターを作成 した。校内数箇所に 掲示し、多くの生徒 の目に付くように配



慮した。さらに、朝の会で図書委員の生徒が新聞コーナーの紹介を定期的に行い、クラスメイトに周知させる活動を行った。このことがきっかけで新聞コーナーに足を運び、新聞に興味を持った生徒もいた。

また、図書支援員には、図書室を訪れた生徒に中学生として知っておいてほしい記事や興味を持ちそうな記事を紹介していただいた。環境面においても、図書室内のどの場所に新聞閲覧コーナーを設置するのが効果的であるのかなどのアドバイスをいただき、生徒が落ち着いて新聞を閲覧できるように整備・工夫した。

③関連記事の掲示

生徒たちに新聞を身近に感じてもらうために、本 校や本市に関する記事が新聞に掲載された時は、そ の記事を切り抜きラミネート加工したものを廊下に 掲示した。身近な人や場所が活字や写真になったも のを目にする機会を増やすための取組である。

また、上記同様、生徒自身が新聞を読んで見つけ た面白そうな記事や興味を持った記事を持ってきて もらい掲示することも行った。





④学校行事との関わり

毎年、本校の1年生は5月に1泊2日の宿泊研修を実施している(今年度は新型コロナの影響で9月に実施した)。研修終了後には総合的な学習の時間の中で個人新聞づくりに取り組んでいる。今までは生徒たちがそれぞれ自由に新聞づくりを行ってきた。

しかし、本年度はNIE実践指定校の認定を受けたことから、ただ単に新聞づくりを行うのではなく、 読み手を意識した本格的な新聞づくりに挑戦してみることにした。

そこで、9月16日(水)~18日(金)の3日間、河北新報社より現役の新聞記者である丹野綾子様、 末永智弘様のお二人に来校していただき、生徒たちを対象とした新聞づくりに関する講座を実施した。 新聞とは何かというところから始まり、新聞づくりのノウハウを教えていただく時間を持てたことは生徒たちにとってたいへん貴重な体験になった。特に、空欄になった見出し部分に自分で考えて見出しを付けたり、自分が付けた見出しと実際に使われた見出しとを比較する学習では、プロの技に驚嘆する生徒が多くいた。







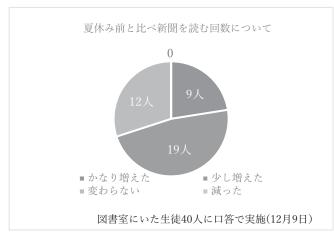
⑤教員の取組

9月9日(水)河北新報社より末永智弘様、読売新聞社より池辺英俊様にご来校いただき、教員を対象としたNIE研修会を開催した。末永様には、ワークショップ形式で「見やすい新聞づくりのコツ」、池辺様には、「新聞づくりをする上でのニュース、取材のポイント」と題した講話をいただいた。お二人のワークショップ、講演は、たいへん興味深く楽しめる内容であり、アンケートの結果から「新聞の活用法が参考になった」、「今後の授業にぜひ活かしたい」といった前向きな内容の意見が寄せられ、多くの教員が刺激を受けた。生徒たちだけでなく、教える立場の教員も同じように学ぶことでNIE活動をより実りのある実践にしていくための貴重な時間を持つことができた。

3 成果と課題

①成果

- ○新聞コーナーの設置や記事の掲示をすることで、 生徒が新聞に触れる機会が増えた。その結果、 新聞に興味を持ったり読もうとしたりする生 徒が増えた(図1)。
- ○事後のアンケート調査から、1年生の宿泊研修 と新聞づくりを関連させることで行事、新聞そ のものへの関心が高まった。
- ○教員向けのワークショップや講演会から刺激を 受け、新聞を授業の中で積極的に活用していこ うとする教員の意欲的な姿勢が見られるよう になった。



(図1)

2課題

- ●今年度は新型コロナの影響で学校の本格的なスタートが6月になり、単発的な取組で終わってしまった。アンケート調査を随時行い、その結果に基づいた検証を授業の中で行っていく計画であったが、実践の期間が足りなくデータも乏しい。継続した実践で変化を探っていきたい。
- ●まだまだ実践校としての取組が弱いと感じる。 一部の教員、教科だけでなく、全教員、教科で 横断的に新聞を活用した授業実践を行いたい。 一層の声掛けと実践で、NIEの取組を周知し、 更なる発展・拡大を図りたい。
- ●新聞せけ概がよければない。 新聞せけ概がようで後な語しっりきど仕彙



力を高め、思考力・表現力を養成することに繋 げていくのか、具体的に計画を立てる必要があ る。 (担当 教諭 吉田 啓介)

令和2年度 <総合的な探究の時間>

~『SDGs』×『NIE』×『地域連携』~

<1年生:地域について考える>

1年生は、地域について考えることをテーマに探究活動をおこないました。

最初に3~5人のグループごとに、様々な視点から地域の諸問題について考え、地域に関するテーマを設定し、グループのメンバー全員がそれぞれそのテーマに沿った新聞記事を探しました。1週間の期限を設け、各家庭で購読する新聞やNIE委員会からの支援で購読した過去のものも含む新聞を利用しました。

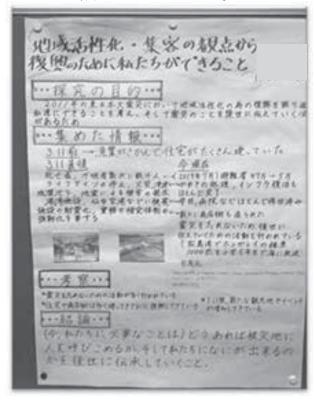
それぞれが選んだ新聞記事を持ち寄り、 要約し、自分の考えをまとめて、グループ ごとに意見交換を行いました。

自分たちで設定したテーマに関わることが、新聞ではどのように取り上げられているか、さらにほかのメンバーがそのことについてどのように考えているかを知ることで、より客観的にテーマを認識することにつながり、その後の情報集めや情報分析、考察をよりよいものにすることができました。

その後地域についての探究とは別に、「地域に観光客を増やすにはどうすべきか」というテーマでポスターセッションを行いました。そのポスター作りの準備段階の12月に、NIE委員会による出前講座を開催し、「新聞の作り方・見出しの付け方」の指導をいただきました。

効果的な見出しの付け方や、新聞の紙面 構成の仕方を学ぶことが、より洗練された ポスター作りをすることにつながり、ポス ターセッションの際の発表がより伝わりや すいものになりました。

以上のような活動を通して、新聞を、ただ情報を得るためのものというだけではなく、情報をどう捉え、どう発信するかという視点で見ることができるようになったと思います。地域を知り、課題を見つけ、よりよい環境にしていくよう考えることで、将来、日本や世界、SDGs などの課題解決をするための基礎力を培うことができました。

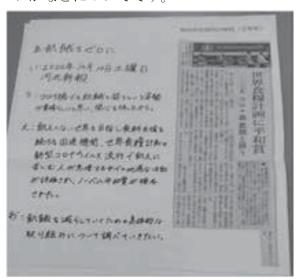


<2年生:SDGs について考える>

2年生は、SDGs (持続可能な開発目標) について考えることをテーマに、探究活動をおこないました。

なぜこのテーマを設定したかというと、 SDGs は世界中にある課題を解決するために、 国際連合が話し合いを重ねて決めた目標で あることを生徒に理解させ、私たち1人ひと りが世界をよりよくするために、その課題を 「自分ごと」としてとらえ、課題解決に向け 自ら行動することが求められているからで す。

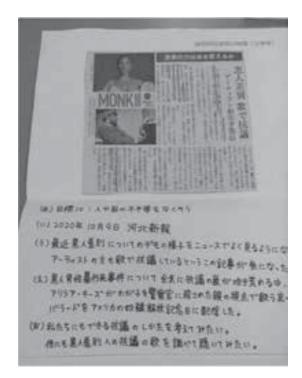
まず、最初に気になった内容の新聞記事を 生徒が自由に探してきて、その切り抜きを持 ち合い、グループ内で紹介しました。1グル ープの人数は同じクラス内で4人程度とし ました。紹介する内容は、新聞名やどの欄(何 面)に掲載されていたものであるか、日時は いつか、記事を読んでみて感じたことや疑問 点は何か、今後どのようなことを調べてみた いかなどについてです。



新聞記事を探すための準備期間は2週間程度とりました。生徒は、各家庭で購読する新聞を利用したり、NIE委員会からの支援で購読した新聞を利用しました。

発表は1人あたり、発表3分・質問3分と 設定しました。今年度は特に発表の際、マス ク着用などの感染症予防対策徹底を行いな がら実施しました。

また、NIE委員会による出前講座も 11 月末に開催していただき、「上手な文章の書 き方について」の指導もいただきました。今 後の成果が楽しみです。



発表後は、自分が探してきた新聞記事が SDGs の17のどの目標と関連してるのか についてグループ内で考えさせました。多くの生徒が1つの目標だけではなく、複数の目標が関連していることに気付いたようです。

今後は、「貧困をなくそう」、「飢餓をゼロに」、「ジェンダー平等を実現しよう」、「働きがいも経済成長も」の4つの目標に絞って、それに関連する新聞記事を探し、内容を読み取り、そこから新たな課題を見つけ出し、見つけ出した課題の解決方法をグループで探究させていきたいと考えています。

(担当 教諭 佐々木 貴芳)

「本校におけるNIE活動について」

~ 新聞を活用し、社会に目を向ける生徒の育成 ~

1 はじめに

本校は今年度入学生から 1 クラス学級減となり 1 学年 6 クラス、2、3 学年 7 クラスの全校生徒 753 名の男女共学全日制普通高校である。

「がんばりを認め、伸ばしていく学校」のキャッチフレーズのもと、学習をはじめ部活動、生徒会活動、ボランティア活動等に意欲的に参加し、充実した高校生活を送っている。

進路希望では、大学・短大・専門学校で約8割を占めており、2割が就職希望者である。

2 これまでの経緯

本校では、選挙権年齢引き下げ等に対応するため、平成28年度、宮城県教育委員会が行っている「魅力ある県立高校づくり支援事業」として、政治的教養教育、いわゆる「シチズンシップ教育推進事業」の研究協力校として各種の取組を行った。実践を進める中で、新聞の活用が生徒の社会的な興味・関心の喚起につながると考えるようになり、平成30年度より、NIE教育推進校としても活動を行い、今年度で3年目を迎えた。

3 今年度の本校の実践

まず、新聞紙面を読むことを通して、社会で起こっている様々な出来事に興味・関心を持たせることに主眼を置いた。昨年度のデータでも定期的に新聞を購読している生徒の割合が、約4割程度であること、また、社会の情報を知る手段として、多くの生徒がインターネットやSNSを利用している状況であった。それらの現状を踏まえ、新聞を多く読む時間を確保すねらいがある。その上で、各自がポスター(NIEタイム)の作成を行い、作成後、各個人がポスター(NIEタイム)の発表を行い、自分の意見を他者に伝える力を養うことにした。

また、今回の活動を通して、小論文模試を実施 し、自分の考えを文章に書き表す力の養成に努 めることも活動のねらいとした。

それらの活動は、主に2学年の「総合的な探究の時間」の中で行い、2学年の教員が主体となっ

て、取り組ませた。

(1) 事前ガイダンス (9/15 (火))



写真 1 ガイダンスの様子

最初にNIE活動の目的、今後の日程及び河 北新報の新聞記事を読ませ、記事の感想を記入 させた。具体的内容は、下記に示したとおりであ る。

- ① NIE活動の目的の説明 (ガイダンス、写真 1)
- 新聞紙面を読むことを通して、社会で起こっている様々な出来事を知る。
- ・様々な出来事を知り、そのことについて主体 的に考える。
- ・関心のある出来事をまとめ、発表することで、 自分の意見を伝える力を養う。
- ・最終的な目標として、ポスター(NIEタイム) を作成する。
- ・ 年度内での小論文模試の受験を伝える。

② 新聞記事を読ませ、感想の記入

- ・「ドコモ口座不正」(9/12(土)河北掲載)
- ・「絶えないコロナ差別」(9/5(土)河北掲載)
- ・座標「伝える姿 人生訓に共鳴」

(9/12(土)河北掲載)

(2) 新聞購読の取り組み



写真 2 教室に設置された各社の新聞

107	3.95	2.44	1.4	椎	B
	A 85 A 85	制度有	- 81	*	1
	9.30	12.0	Br -	余	2
		10		+	2
				11	4
		at it			
		20.00			16
		25.00		也	7
	(株成分)	(第1)	DI	200	

写真3 朝の広高タイム

20.77	8100.6	40.00	KEORINL
3.074	MIN.		地震中瓜(FC 在機能 并数名C之际LFSM

写真 4 「読んだ記事チェックシート」

1週間毎、各新聞のローテーションに基づき、 新聞を教室に設置した(写真 2)。多くの生徒が、 休み時間等に読む姿が見かけられた。授業の際 にも何人かの教員が新聞を活用していた。

また、朝の広高タイム (毎朝、8:35 \sim 8:45 の時間に読書を行うことを目的とした時間) では、1週間に1度、新聞を読む時間を設定した (写真3)。

その上で、記録用として何の記事を読んだのかを記載する用紙(写真4)を生徒に配布し、記録させた。記載することで多くの記事を読んだことの達成感が表れてきたようである。

(3)新聞の読み方講座(10/27(火))



写真 5 新聞の読み方を聞く (新聞の読み方講座)



写真 6 新聞に見入る生徒(新聞の読み方講座)

新聞を読む機会を多く設定したので、河北新報の職員の方に来校いただき、新聞をどのように読んだらいいのか、新聞を用いて講義(写真 5)をしていただいた。

実際にどのように取材し、記事を作成しているのか、どのような記事が新聞に掲載されているのかなど基本的な事項を学習した。また、新聞社によって記事の捉え方が違っているなど様々な視点で講義いただき、中には、新聞を手にじっくり読んでいた生徒もおり、興味深く新聞の記事を見入っていた(写真 6)。

(4) ポスター(NIEタイム)の作成(12/15(火))



写真 7 新聞の切り抜き作業 写真 8 準備用ワークシートの作成



(新聞から情報を抜き取る)



写真 9 ポスター(NIEタイム)の作成

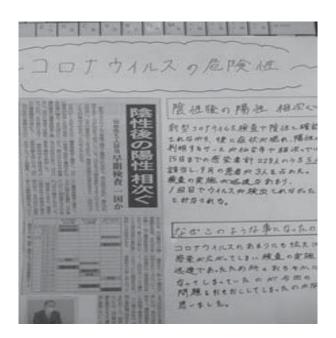




写真 10 完成したポスター(NIEタイム)

11 月初旬から具体的に、ポスター作成の作業に取り組んだ。まず、各個人がどの記事に興味・関心を持ったのかを選定し、その記事の切り抜き作業から取り組んだ(写真 7)。その後、準備ワークシート(写真 8)の作成を行った。この作業により、自分の選んだ記事の社会的考察に結びついた。

具体的には、

- ① テーマ (タイトル) の決定
- ② 記事の概要のまとめ
- ③ なぜ、興味を持ったのか
- ④ この記事に対して自分がどのように考えるか
- ⑤ 最後に、自分はどうすればよいと考えるか (どうしたら解決できると考えるか)

等の作業である。

最後にその準備ワークシートを基にポスター (NIEタイム)の作成(写真 9·10)を行った。

(5) NIEタイム(ポスター)発表会(12/22(火))





写真 11 NIEタイム(ポスター)発表会





写真 12 ポスター(NIEタイム)の掲示

作成したポスター (NIEタイム) については、クラス毎に発表会を行った (写真 11)。クラスの実情に合わせ、一人ずつ発表するクラス、または、近くの生徒と数回にわたり、発表することを繰り返すクラス等様々であった。中には、発表したことに関して、質問をする生徒もあったようである。全てのクラスで静かな雰囲気の中、級友が発表する内容を真剣に聞く姿を見ることができた。

生徒が作成したポスター(NIEタイム)は、2 学年の廊下等に掲示(写真 12)した。

(6) 進路対策(小論文模試の受験対策)



写真 13 進路対策(小論交対策資料)

市販のテキストに記載されている社会問題の 10分野(写真13)と関係のある新聞記事を読ま せた。

その中から、興味を持った1分野を取り上げ、問題点等の概要をまとめさせた。この活動は社会との関わりから自らの進路について考えさせるとともに、年度内に実施予定の小論文対策の一環として行った。

4 おわりに

今回のNIE活動を通して、出来るだけ新聞を読ませることを一つの目的として実践してきた。

生徒からは、「社会の状況を再確認することが 出来た。」「新聞よって記事の取り上げ方が違う。」 「社会の問題点をどうしたら改善できるか、考 える時間になった。」など、様々な感想を聞くこ とができた。

今後は、3年間の実践を通して得られた成果や 反省点を整理し、来年度以降の実践に生かして いきたい。 (担当 教諭 佐藤 雅信)

楽 し < N I E

1 はじめに

本校は、特進科、探究科、科学技術科の3学科を擁する学校であり、平成28年度からNIE実践指定校の認定を受け今年度で5年目となる。

初年度は、主に探究科の生徒たちに自分が興味を 持つ記事だけでなく、時事的な話題にも触れさせな がら、自ら考え、表現する力を育むことを目標に活 動を行った。2年目はさらなる発展・拡充を図るた め、探究科以外の学科や学校の委員会活動へ NIE 活 動を取り入れた。3年目はそれまで行ってきた活動 を踏襲しつつ、新たに「河北新報新聞記事コンクー ル」への応募や新聞大会への参加、定期試験や大学 入試対策の小論文指導への新聞記事活用を行った。 4年目は、高校1年生(探究科、科学技術科)対象 に NIE に関する講演、長期休業中の課題に新聞記事 を活用し、学年全体で NIE 活動に取り組むことで、 年間を通して継続的な活動を目指した。5年目とな る今年度は、図書委員会の中から NIE 委員を選出し、 「河北新報新聞記事コンクール」や「オンラインに よる意見交換会」に参加した。また、今までは主に 国語や英語での教科指導の中に取り入れていたNIE 活動を、新たに家庭科でも取り入れた。これまで以 上に NIE 活動が学校全体に広まりつつあるのを感 じている。以下、本校の5年間のNIE活動の概要 をまとめる。

2 実践の概要

2-1 NIE コーナーの設置

新聞が多くの生徒の目に触れるよう校舎1階の職員室前、探究科職員室前の2か所に「NIEコーナー」を設置している。日々届けられる新聞(河北新報、日経新聞、産経新聞、毎日新聞、英字新聞)や本校生に関する新聞記事、現在話題になっている記事を誰でも自由に閲覧できるようにした。また校舎や教室の壁には、各授業で生徒が取り組んだワークシートを掲示し、付箋を用意して、生徒が互いに自由に

感想を書けるようにした。







図1 各職員室前の NIE コーナー (平成28年度、令和2年度)



図 2 ワークシートの掲示板と意見の書き込み(付箋) (平成28年度)

2-2 教員研修

教員側のスキルアップを図るため、2016年7月20日に本校会議室にて、宮城県NIE委員会の齋藤昭雄氏、NIE教育コンサルタントの渡辺裕子氏をお招きして、ワークショップや新聞活用オリエンテーションを含む研修を行った。また、毎月の定例職員会議において活動報告を出している。(平成28年度)

2-3 NIE に関するアンケート

NIE 活動を進めていくにあたって、生徒の NIE に対する興味関心を把握するために、1 学年の生徒

対象のアンケートを行った。アンケートは9月と1月の計2回行った。

1回目と2回目ともに「自宅では新聞を購読していない」と回答したのが約7割、「新聞を全く読まない」と回答したのが1回目約6割だったのが2回目はやや減少し、「新聞を読む」と回答したのが約3割から約4割に増えた。「新聞を読むメリット」でもっとも多かったのは「社会事象に詳しくなる」「読解力が身に付く」「語彙力が身に付く」だった。一方「スポーツ面」を読むという回答が多く、今後は生徒たちが他の面にも目を通すよう教師側での工夫が必要である。

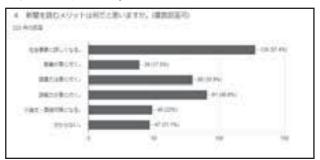


図3 NIE に関するアンケート(令和元年度)

2-4 NIE に関する講演

生徒たちに新聞に対してもっと興味関心をもってもらうために、NIE 委員会主催の講演を企画し、河北新報の丹野綾子氏に本校に来ていただいた。講演では本校生が載っている記事を例に出しながら、新聞とインターネットの違い、新聞を読むメリット、新聞の読み方等を話していただいた。講演後の生徒からの感想では、「今までは自分の興味があるところだけを読んでいたので、読み方を変えると興味がないところも面白く読めるようになるかもしれない」という感想があった。



図4 NIE に関する講演の様子(令和元年度)

2-5 NIE活動の目標設定

以下の目標を掲げ各授業、学年、委員会でNIE活動に取り組んだ。

- ①新聞に親しむ。
- ②新聞を継続的に読むことにより、自分自身の興味・関心の幅を広げる。
- ③新聞の構成や役割を知り、情報を主体的かつ批判 的に読み取る力を身につける。

2-6 各授業での取組

初年度から継続して国語科、英語科で取り組んでいる。5年目は家庭科でもNIE活動を取り入れている。

(1) 国語科

小論文対策の一環として新聞記事を使用した。教 員側で選択した新聞記事に対する生徒各自の考え をグループ内で共有させ、各自の考えの幅を広げさ せた。その後、記事に対する自分の意見を意見文と してまとめさせた。この意見文の中から何点かを河 北新報新聞記事コンクールに応募した。(平成30 年度:探究科3年)



図4 扱った新聞記事

1年を振り返るために、毎年日本漢字能力検定協会が発表する「今年の漢字」の記事を読ませ、生徒たちが中学校から高校に進学した1年間を振り返る機会をもたせた。(令和元年度:探究科1年)

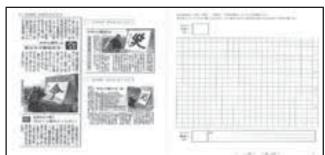


図5 扱ったワークシート

新聞記事を3通りの教材として扱った。

- ①定期試験の問題に「スマホ依存」の記事を引用し、 生徒の意見を書かせる問題を出題した。
- ②学校に届く新聞を使って、課題と意見をまとめさ せるグループ活動を行った。

③小論文対策のためのワークシート作成に使用した。 (平成30年度:科学技術科年)



図6 扱った新聞記事

環境問題を扱った評論文と SDGs を関連付けて展開する授業では、河北データベースを使用し、地元の地域社会で SDGs について取り組んでいる実践例を調べた。(令和2年度:探究科3年)



図7 扱った新聞記事

(2)英語科

コミュニケーション英語 II の授業で、英字新聞を 用いたワークシートに取り組んだ。まずは、記事の 英文を写し、キーワードとなる単語を抜き出し、最 後に記事の見出しを英語でつけた。生徒たちに馴染 みのある記事を選んだためか、英文を読んでいる途 中で「分かった!」と叫ぶ生徒もいて、楽しんで取 り組んでいた。 (平成29年度:探究科2年)

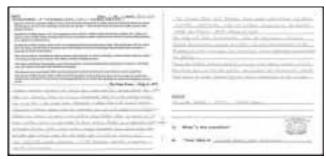


図8 生徒が取り組んだワークシート

コミュニケーション英語Iの授業では、新聞のテ

レビ欄以外の記事からカタカナ英語を抜き出す作業を行った。また、抜き出した単語を調べさせ、自分たちが何気なく話している言葉の真の意味を理解させるとともに、英語への興味・関心を引き出す意図で実施した。クラスを数グループに分け、制限時間を設けて取り組ませたところ、「探して」書き出すという作業を新鮮に感じたためか、生徒たちは積極的に取り組み、特にノルマを課したわけではないが、抜き出す単語の数を競うグループも見られた。また、自分で見つけた単語には思い入れが強いのか、普段の授業の際に教科書に出てくる新出単語を調べるよりも熱心に調べている様子が見られた。

(平成29年度:科学技術科1年)

コミュニケーション英語 I の授業で、教科書で扱ったトピックを深め、自分の事として捉えるために新聞記事を使用した。授業で扱ったトピックに点字に関することが出てきた。点字を意味する単語は生徒たちに馴染みがなかったが、校内で購読していた英字新聞に点字に関する英文記事があった。教師側でその英文記事を読むための質問を用意し、ワークシート形式で生徒に取り組ませた。

(令和元年度:探究科1年)



図9 生徒が取り組んだワークシート

コミュニケーション英語IIの授業では、教科書で扱ったトピックを SDGs の観点から深め、自分の事として捉えるために新聞記事を使用した。生徒はそれぞれのレッスンで扱ったトピックについて、英文や日本文のサイトをチェックした後、河北新報データベースで新聞記事を検索し読み込むことでより理解を深めた。調べたものはスライドにまとめ、班ごとに英語でプレゼンテーションを行った。

(令和2年度:探究科2年)

(3)家庭科

食との関わり方を再確認させるために、授業で新聞記事のコラム欄を読み込み、生徒の食への意識を 高めた。またコンビニエンスストアで販売している 食品に関しての新聞記事を使用し、SDGs の観点から食と経済活動の関係を生徒に考えさせた。

(令和2年度:2学年全科)



図10 扱った新聞記事

2-7 学年での取組

小論文対策として、段階的に取り組むために夏と 冬の長期休業中に NIE に関する課題を出した。

ワークシートは、A3用紙両面印刷をし、1時間程度でまとめられるものである。生徒は分からない語句等を端末を使用して調べ、要点を読み取りながら時事問題に対して考えを深めた。

(令和元年度:1学年 探究科、科学技術科)



図11 生徒が取り組んだワークシート

小論文対策として希望者にスクラップノートを 用意し、本校で購読している新聞記事から気になる 記事を選ばせ、要点や意見を書く取組を行っている。 自分が気になる記事を継続的に収集することで、そ の分野に対する知識・理解を深め、自分の進路選択 の一助とするだけでなく、小論文や面接対策に役立 ててほしいと思う。

(令和2年度:2学年 探究科)

ル毎に分類し、職員室に準備している。生徒は自分の志望する学部に関連した新聞記事を自由に閲覧することができ、自分が受験する学部への知識・関心を深めるのに役立った。(令和2年度:3学年 探究科、科学技術科)



図12 ジャンル毎に分類した新聞記事

2-8 委員会活動での取組

より多くの生徒たちが新聞に親しみを持ち、記事に対して各自の意見を述べる力を伸ばしていけるよう、教科や学科の枠を超えた委員会活動でも取り組むこととした。

本校の委員会活動の一つである ICT 委員会は、各 クラスから選出された生徒たちで構成されている。 それらの生徒たちが輪番で、自分たちで取り組みた い新聞記事を選び、その記事に関するワークシート を作成した。ワークシートの内容は、言葉の意味調 べ、記事の内容に対する自分の考えとその理由を述 べるものとなっている。(平成29年度)



図13 生徒が取り組んだワークシート

2-9 その他

(1) 新聞社への投稿

本校探究科1年生2名の意見文が読売新聞の投稿に掲載された。新聞への投稿は生徒たちの励みになった。(平成29年度)

小論文対策として、担当教員が新聞記事をジャン



図14 新聞に掲載された生徒の意見文

(2) 新聞大会への参加

平成30年度の全国新聞大会は仙台での開催が決定していたことから、河北新報社のご厚意で本校生20名ほどをご招待いただき、各クラスから選出された生徒たちで構成されるICT委員会の生徒たちを参加させた。当日は、ベストセラーとなった「AIvs教科書が読めない子どもたち」の著者で国立情報学研究所の新井紀子教授の講演が予定されていた。そこで、参加する生徒たちには事前に、新井紀子教授の著書について書かれた新聞記事に目を通させ、自分の考えをまとめるワークシートに取り組ませた。参加後の生徒たちの感想には、「事前に新聞記事を目にしていたので、講演の内容が良く理解できた」といった記述が見られた。(平成30年度)



図15 ワークシートの新聞記事

(3) オンライン意見交換会への参加

2年生の図書委員から NIE 委員を選出し、NIE 活動を行った。各自が気になる新聞記事をスクラップし、河北新報新聞記事コンクールに応募した。入賞は逃したものの、生徒にとってアウトプットを行う良い機会となった。また、河北新報の「ヤングケアラー」に関する記事をきっかけにメンバー内で話し合いながら互いの考えを深め合う場面も見られた。調べたものをスライドにまとめ、12月に行われた

オンライン意見交換会で発表した。(令和2年度)



図16 扱った新聞記事

3 成果と課題

初年度は手探り状態で活動を行ってきたが、徐々に取り組む教員が増えてきた。5年目となる今年度は校内で NIE の言葉が日常的に飛び交うことが多くなりこれまで以上に活動の広がりを感じる年になった。生徒たちも調べ学習や小論文対策に新聞を利用することが多くなり、新聞が身近な教材として活用されていると感じている。

今年は新しい取組としてNIE委員を選出し、定期的に活動を行う委員会活動へ「NIE」を広げることができた。生徒は自分の興味がある記事を継続して読むことでその分野についての理解を深めた。NIE活動を始めた当初から生徒が新聞記事に対する意見を互いに述べる活動を行いたいと考えていたが、今年度新たな試みとして企画された「児童・生徒によるオンライン意見交換会」に参加した。ある生徒からは、「NIE活動で自分が今まで考えてこなかったテーマについて考えることができた」、「NIE活動を通して今まで気付かなかった問題や社会の現状を改めて発見し考えたことが良かった」といった感想があり、生徒にとって良いアウトプットの機会となった。

新聞記事をきっかけに生徒同士が話し合うことで、自分とは違う視点に気付き次への学習への意欲につながったことは大変意義深い活動になっていると感じる。今後も活動を継続し活発な意見交換を進めていきたい。(担当 教諭 鈴木 理恵)

N I E 指定校実践報告: N I E 活動を取り入れた「総合的な探究の時間」の指導の試みⅡ ~修学旅行と関連付けた論文作成をとおして~

1 はじめに

多くの教員の実感として、生徒が何かを「読む」ことがかなり減っていると感じているに違いない。大人でさえ何かを読む時間が減ってきていると思うからだ(注1)。いわゆる「活字離れ」が書籍に限らず、週刊誌や新聞など多方面に及んでいることを示しているのだろう。

しかし、「『読解力』は生きる力。仕事や人間関係は その読解力で差」がつく(注2)。では、どうしたら読 解力が身に付くのだろう。恐らく多くの学校で「読ま せる工夫」をしているのではないだろうか。

2 実践の概要

(1)テーマ設定

さて、今回2年間にわたってNIEの指定校を受け させて頂いた。今回は2年間のまとめを報告するが、 経緯、昨年度の内容、今年度の報告、反省と、一部前 年度の内容と重複する部分があるがご寛恕のほどお 願いしたい。

新入生(現2年生)を迎えるにあたり、「総合的な探究の時間(以下、探究の時間)」をどのように計画するかが問題となった。本校では「総合的な探究の時間委員会」があり、そこで方向性を示し、いつ、どのようなことを行うのかを決めていく。しかし、「探究の時間」は「課題解決型学習」を行うこととなっているものの、評価を含めた内容を提示するほどには議論が深まらないままこれまで実施してきたのが実情である。そこで、まず1年生の「探究の時間」担当者で内容を決めていくことにした。

まず、「探究の時間」で身に付けさせたい力について洗い出していった。

- ①「読む習慣」を少しでも付けたい。
- ②「社会の出来事(ニュース)」に関心を持たせたい。
- ③「考え方、ものの見方」についてトレーニングが 必要である(注3)。
- ④「データの見方、扱い方」を理解させたい。
- ⑤「書き方」を身に付けさせたい(文章構成の手順など)。
- ⑥「書くルール」を身に付けさせたい(例えば、引

用のルールについて)。

⑦発表の手順を身に付ける(どのようにまとめていくのか)。

これらの力を身に付けさせるために以下のように計画した。

(2)3年間の計画について

各学年の計画

	テーマ
1年	世界と自分とを知る
2年	地域を比較し、課題を見つける
3年	2年で課題とした内容の解決策を考 える

さらに、各学年の具体的な活動内容を以下のように 設定した。

各学年の活動内容

1年 SDG s について学ぶ 新聞に親しむ 地域の課題に気付く

2年 修学旅行先の新聞と地元新聞を読み比べる

彼我の違いに気付き、新聞から課題を見 つける

課題とした内容について調べる 論文の書き方を学ぶ 統計データの扱い方を学ぶ

3年 課題について解決策を考える 解決策を SDG s と結びつける 第三者に説明できるようまとめる

「探究の時間」を1年の時に前倒しして始めたものになる。それには本校の進路状況が関わっている。本校の進路は大きく3つに分かれ、大学・短大進学、専門学校進学、就職・公務員での就職者の実数は同規模の県内普通高校の中では最多かと判断する。

進学、就職にはいずれも課題がある。進学ならばエ ントリーシートが書けない。就職ならば3年間一番力 を入れたことを説明できない。作文が書けない。この対策として「探究型学習」を活用しようというのが始まりであった。そこにNIEの話を頂いたので、新聞を活用させて頂くことにした。

教員側の準備は十分とは言えず、例えば、「何を課題として取り上げるか」についてである。新聞を読んで興味を持った内容を課題として取り上げ、深掘りをする、というのが我々のイメージであった。しかし、大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部・佐藤浩章准教授によれば「『課題』は先生が見つけるけれども『問い』は生徒が立てるとか、『課題』は生徒が見つけるけれども『問い』は生徒が立てるとか、生徒の様子を見てバランスを考えつつ計画するのが大事です」という(注4)。後述するが、ここまでは準備が出来ないままスタートした。

(3)1年次の実践概要

さて、1年次ではまず「SDG s について学ぶ」ことから始めた。一つにはなじみのない内容について知ること、一つにはその内容を新聞記事と結びつけて読めるようになるための準備として、である。

その上で6月に『河北新報』を全員に配付し、「新聞に親しむ」ことを目指した。そして、新聞の中から「地域の課題」に気付き、課題を幾つか考えてもらうことにした。そして、グループごとに取り上げた課題について話し合い、最後にグループごとに発表させた。

(4)2年次の実践概要

前置きが長くなったが、今年度が3年計画の2年目でNIEの指定校2年目である。しかし誰もが予想しなかった、想定外のことが起きた年となってしまった。

2年次には修学旅行がある。修学旅行とNIE、「探究の時間」、LHRをセットとして計画を立てた。

NIEを活用し、

- 1 修学旅行先の新聞(『京都新聞』と地元新聞(『河 北新報』)とを読み比べる(2回準備する)。
- 2 彼我の違いに気づき、新聞から課題を見つける (注5)。
- 3 課題とした内容について調べる(出来れば京都市 役所などで調べてくる)。どこで、何を調べれば良い かを指導する。
- 4 論文の書き方を学ぶ。文章構成、書き進め方など。
- 5 統計データの扱い方を学ぶ。統計についての基本 的な知識を身に付けてもらう。

2学年の「探究の時間」はNIEを修学旅行に絡めた活動にしようと計画を立てた。恐らくまったく読ん

だことのない、京都の新聞を読む。記事が取り上げている内容が宮城県と同じような内容なのか。あるいはかなり違うのか。

例えば、京都は観光都市であり観光客を多く呼び込もうと努力し、その結果海外からの観光客を含め、年間を通して国内外から多くの観光客を集めてきた。宮城県では年間を通して観光客が訪れるのは松島である。たくさんの人が来県するのは七夕前後の短い期間だけになる。その結果、京都の新聞には「観光客がバスを利用する結果、地元の人がバスになかなか乗れない」、「病院に行こうと思ってもずっとバス停で待ち続けている」といった記事や投書がしばしば掲載される。しかし、『河北新報』にはそのような記事が掲載されることは、あっても極めて稀であろう。

このような記事・投書を読んだとして、「地元の人と 観光とはどのようにすれば共存できるのか」、「年間を 通して継続的に観光客を受け入れるにはどうすれば 良いのか」といった問題点を考え、自分なりにまとめ ていく。あるいは宮城県の場合、多くの観光客は七夕 の頃にバスツアーで来県する。バスツアーはねぶた祭 →竿灯祭り→花笠祭り→七夕と、東北の夏祭りを順に 全部、あるいは一部を観光してくる。松島はその序で の観光対象地となっているのではないだろうか。

そう考えると、宮城県の場合は京都とは逆に「年間を通じて観光客に訪れてもらうには」、「数日間~1週間滞在してもらえる宮城県の観光のあり方」、「海外からの観光客を呼び込むためには」といった視点が必要になる。これが「彼我の違いに気付き、新聞から課題を見つける」の内容になる。自分の顔は自分で見ることができない。鏡、写真、ビデオなど、第三者の視線で初めて自分の顔を見ることが出来る。この時の「鏡」に相当するのが修学旅行先であり、旅行先の新聞である

しかし、令和2年度は新型コロナに翻弄された。まず、学校が再開されない。再開の目処が立たない。再開されても肝心の修学旅行が実施されるかどうか、見通しが立たない。6月に学校が再開された後、修学旅行実施を前提に「探究の時間」を始めた。

おおよその内容は以下のとおりである。

6月~7月 再びSDGsについて学ぶ

9月~10月 新聞を読み、京都と宮城とを比較しながら、課題を見つける

11月~1月 課題について調べ、まとめる

2月 発表

第1回目は6月初旬に実施。このときはクラス間格 差を作らないようにするため、この一年でどのような ことを行うのか、なぜ行うのかを動画にし、音声ソフトに読ませて各クラスでプロジェクターに投影する形で実施した(注7)。

この時点では修学旅行そのものの実施が不透明であった。最終的に修学旅行中止を決めたのは9月に入ってからであり、PTAで保護者の了承を得たのは10月になってからだった。PTAで了承を得るまでは「探究の時間」の計画はそのまま実行し、、『京都新聞』、『河北新報』は予定通り配布して読ませた。

10月になって漸く修学旅行を外した形で「探究の時間」を再構成した。結果的に10月~1月まで「課題研究」という形で、各自が新聞記事から取り上げた京都や宮城の問題を調べ、まとめる時間とした。ここから1月下旬まで個人ごとにスマホ、パソコンで資料を収集し、原稿用紙にまとめる時間とした(注7)。



なお上述のように、2年次では課題について詳しく 調べるだけに留めている。その課題に対する自分なり の解決法は3年次の課題とすることとしたからだ。

提出が1月下旬。各自の発表はクラスごとに行った。中には調べた内容を1枚にまとめ、掲示したクラスもあった(=写真=)。



3 反省点

- (1) 1年次で最初から一紙全部を読ませることが適切だったか。例えば「朝学習」で、1年生4月には数分で読める記事を読ませることから始め、徐々にボリュームを増やし、慣れたところで新聞を預ける。そういう工夫が必要だった。今まで自分では「読む」ことをあまりしてこなかった生徒が多いからだ。
- (2) 新聞の配布は1年生では『河北新報』のバックナンバー(配付日に間に合えば、日付は問わないとお伝えしておいた)、2年生では『河北新報』、『京都新聞』の2紙のバックナンバーを配付した。

上述のように偶々全員に配布した『河北新報』では、一面で女川原発について大きく取り上げていた。そのため、ほとんどの生徒がこの問題を取り上げた。どうしても一面の内容に引っ張られてしまう(特に大きく取り上げられていると)。『河北新報』であれば、こちらで内容をチェックし、気づいてほしい記事が掲載された日のバックナンバーを使うことは可能。

(3) 様々な理由から予定した内容を取り上げることが出来なかった。特に「文章構成法」、「引用のルール」に関して、統一した形で提示することが出来なかった。

また、「統計データの扱い方を学ぶ。統計についての基本的な知識を身につけてもらう」についても提示することが出来なかった。

- (4) 評価について見切り発車でスタートした。 評価について、例えば荒瀬克己・前堀川高校校長は 次のように述べている。「課題探究型の学習を成功 させるポイントは大きく分けて2つあります。外 部評価または内部での自己評価が適切にできるか どうかと、やれば何とかなるという思いを教員た ちが持ち続けられるかどうか」(注8)。これを具体 的に説明しているのが飯澤功・堀川高校統括部長・ 学務部長だ。評価に取り組む理由として以下の三 点を挙げている(注9)。
 - ① 今の学びが生徒の「次につながる」ようにするため。
 - ② 教育改善のため (+関係者への成果報告のため)。
 - ③ 「高校」と「大学」の教育を接続するため。 いずれにしても、教員側が生徒に身に付けてほ しい内容を明確にし、生徒が内容を理解してい ることが必要になる。残念ながら生徒に内容を

提示する時期までに、教員側の準備が整わず先 送りにしてしまった。

④ 核にしようとした修学旅行が中止になった。 京都は目ではなく、『京都新聞』を通して知ることになってしまった。

4 まとめ

昨年度の報告集にも宮城広瀬高校の穀田先生が『京都新聞』を活用した報告をなさっていた。今回、『河北新報』を使って1年生で「地元について知る」、『河北新報』と『京都新聞』を使って2年生で「地元を他の地域を比較して知る」という流れで新聞を活用させて頂いた。この流れは自分の視野を広げ、ニュースに関心を持ってもらうには有効だと感じた。

「人は自分の見たいものしか見ない」、という。SNSでチェックするニュースにはその傾向が表れている。「読む」という行為にはトレーニングが必要であり、そのトレーニングの一つとして「新聞を読む」ことが有効だろう。

繰り返し新聞を読むようになれば、「人は自分の見たいものしか見ない」ことから抜け出せるのだと思う。 そのためにも新聞を活用していきたいと感じた。

5 最後に

2年間、事務局の皆様には大変お世話になりました。 紙面を借りてお礼申し上げたい。

(担当 教諭 小林 治)

注1 例えば、公益財団法人・新聞通信調査会が2021年1月に発表した「第13回メディアに関する全国世論調査(2020年)」の結果によれば、ニュースを「毎日読む・見聞きする(計)」人の割合を見ると、50代では「新聞」と回答した割合は46.4%、「インターネット」と回答した割合が66.4%。ニュースとの「接触時間(平均)」を見ると、50代では「新聞」と回答した人の平均は24.6分、「インターネット」と回答した人の平均が25.4分。

一方、18~19歳では「新聞」と回答した割合は2.6%、「インターネット」と回答した割合が44.9%。ニュースとの「接触時間(平均)」を見ると、18~19歳では「新聞」と回答した人の平均は8.2分、「インターネット」と回答した人の平均が19.4分。

注 2 池上彰、『社会に出るあなたに伝えたい なぜ、 読解力が必要なのか?』、講談社 $+\alpha$ 新書、2020 年 新井 紀子、『AI vs. 教科書が読めない子ども たち』、 2018 年

注3 例えば、「現代社会」や「倫理」には演繹法と帰納法とが取り上げられている。しかし、内容を把握し、それぞれの場面で両方の視点から考えられるような指導までは(少なくとも私自身は)行っていない。その結果、せっかく習っても「使える」ようにはならない。

この点を具体的に指摘しているのは、苅谷剛彦、 『コロナ後の教育へ-オックスフォードからの提唱』、中公新書ラクレ、2020年。

注4 「校内で議論を尽くしたい「何のための探究か、 どんな力をつけたいのか」一大阪大学・探究学習 指導セミナーより」、『学研・進学情報』、2019年 9月号、学研アソシエ。

問いを含め、「探究学習7つのステップ」(課題を見つける、問いをつくる、目標をつくる、計画を立てる、問いを探究し答えを作る、答えと目標を評価する、振り返る)を明示している。

- 注5 「探究の時間」担当者によれば、宮城県公立高校で初めて沖縄の修学旅行を行った際、事前指導から旅行先、振り返りのすべてで「沖縄」と「宮城」の違いを把握する指導を行ったとのこと。この視点を本校の修学旅行でも生かそうと意図した。
- 注6 Power Point →音声ソフトに文章を読ませて録音 →エクスポート →字幕作成ソフト「Vrew」により字幕作成 →エクスポート →保存
- 注7 本校では2014年から3年生に「卒業論文」という形で論文を書かせてきた。今年度の「探究の時間」担当者が始めたもので、それなりのノウハウの蓄積がある。
- 注9 荒木勇輝、「「堀川の奇跡」は他校で再現できるか~荒瀬克己氏に聞く」、『Eduview』、2013, 10月
- 注 10 堀川高校、「探究活動の評価を模索した 20 年」 (「『探究』で育む資質・能力とその評価」、 『Career Guidance』、2018 年 12 月号、RECRUIT 所収)。

Ⅴ 第25回NIE全国大会の概要(オンライン開催)

(1) 開会式(一部抜粋)

① 日本新聞協会 山口寿一会長の挨拶

大会スローガンは、「ともに生きる 新聞でつながる」です。変化し続ける時代、コロナ禍の中で物事を様々な角度から視る、多様な視点や思いやりの精神、社会の動きに幅広く関心を持つ姿勢がこれまで以上に求められます。次代を担う社会の一員として児童・生徒の資質・能力をはぐくむ生きた学びがますます期待されています。新聞はそのような学びを深めるために最適であると確信しています。NIEの学習効果を調べる調査を行ったところ、新聞に触れる活動や授業を日常的に行っている学校ほど全国学力テストの平均正答率が高い傾向が見られました。こうした調査によって新聞活用の意義が広く共有されて子どもの学びの一助となれば幸いです。

② 萩生田光一文部科学大臣挨拶 (長尾篤志長尾初等中等教育局主任視学官代読)

近年、社会は大きく変化しており、今後人工知能の飛躍的な進化等により社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされています。これからの教育においては将来の変化を予測することが困難な時代だからこそ子供たちには変化を前向きに受け止め社会や人生をより豊かなものにしていくことが期待されます。学校教育において新聞を活用することは子供たちに必要な資質・能力を育成するために非常に重要なものと考えております。

③ 東京都教育委員会 藤田裕司教育長

都教育委員会では、都教育ビジョン第4次を策定し、子どもの知・徳・体を育み、社会で持続的な発展に貢献する力を培うための基本的方針を示しました。社会の持続的な発展を牽引する力やグローバルに活躍する力、夢と志を持ち可能性に挑戦しようとする力といった、これから社会を生きていくうえで不可欠な力を着実に育むことを目指し、現在多様な教育活動に取り組んでいるところです。新聞を活用した教育活動は、情報を処理したり活用したりすることを通じて、思考し、判断し、表現しながら課題を解決する効果的な言語活動を生み出します。子供たちの発達段階や各教科等の特性に応じた工夫を加えることで、子供たちが着実に習得できる学習活動を実現することが可能であると期待しております。

④ 東京都NIE推進協議会 竹泉 稔会長

NIEを止めたくない、現場の先生方の強い思いもあり何とか開催にこぎつけることができました。 1996年の第1回NIE全国大会東京大会から続けてきた全国大会を途切れさせることなくつなぐことができたことはこの上もない喜びです。

ここに1冊の研究冊子があります。第1回東京大会が行われる6年前に日本新聞協会から発行されたものです。当時はNIEという言葉さえ、教育界では認知されませんでした。わずかな教員が小中学校・高等学校で子供たちに新聞づくりなどを指導していました。新聞づくりや新聞活用をしていた教員が集まり、どうすればNIEが学校現場で理解され多くの教員に実践してもらえるか話し合い、その実践をまとめたのがこの研究冊子です。こうした活動が脈々と続き現在に至っていることに歴史を感じます。

新聞に興味を持つ教員が増えNIE活動は今までにない広がりをもっています。11月上旬に行われた文部科学省有識者会議の中でも、学校で新聞記事を切り取り、家庭で話し合う機会を設けるということが提案されました。今NIE活動は点から線、線から面に広がりを見せ、教員の誰もが新聞を活用した授業や活動を行うようになりました。東京大会のテーマである「ともに生きる 新聞でつながる」は、新聞を通してみんながつながりより豊かな社会の創造を目指しています。

演題 「社会の声をつむぐ小説 伝える新聞」 講 師 真山 仁 氏

真山 仁(小説家)プロフィール 2004年 『ハゲタカ』 でデビュー。その他主な著作は『そして、星の輝く夜が来る』『神域』など。



こんにちは。ご紹介に あずかりました真山です。 小説家というのはエン ターテーメントの世界で 一緒に考えていくものだ と思っています。日々迷 い、選択を迫られ、決断を していく訳ですが、小説

の中で感情移入しながら少し距離を置いて自分のことを見つめ直せる、小説を通じて私は社会の中で選択肢が増えればいいかなと思いながら書いています。 私も2年半という短い期間、新聞記者をしていました。ですから、小説にもたくさん新聞記者が登場します。

関西の進学校で授業した時、途中からメディア批判になりました。中高生から言われたのはメディアはいらない、結構真面目に断言されました。役所の広報でいいと。これは正直驚愕でした。私は真山ゼミという自主的なゼミをやっています。東京大学の学生が多いのですが、殆どの人が新聞を読んでいない。ニュースはSNSで自分と感覚が近い人の記事ばかり読んでいるので、日本という国が、今の若い人たちでバラバラな国になってしまっている。

新聞は、ちゃんと取材をしてバランスをとってできるだけ事実に基づいて記事を作っている。発信者が権力者側あるいは業界のトップが多いので反対側の人たちもどんな新聞でもバランスよく書いている。

中高生やゼミの学生に、「新聞を読め。新聞を開け。 まず1面で知っているニュース、見出しだけでも知っているか。」と問うと書いている記事を知らない人 が多い。重要なことは新聞は、毎日、今日一番読者 に伝えなければならないことを順番で1面から記事 を作ります。政治や経済の専門の頁もあります。見 出しの大きさや記事の順番を見ればどんな記事が大 事か分かります。それを見たときに多くの若者が、 世の中が全然知らないところで動いているのに初めて気付くのです。知ろうとする努力をしなければならないということに気付き。新聞を読むようになりました。社会の起きている事実をベースにしないと意見なんか言えない、批判というのは事実をベースにしたものに対してどう思うのか、その裏付けは何なのかということを、客観的なものから判断できるようにしなきゃいけない。海外の新聞はほとんどその国か隣の国の話しか書いていないのに、日本はアメリカの大統領選挙を我がことのように大々的に報道したりいろんな国のことがかいているんですよね。日本社会として同一性というのがあるんですけど、その役割を書いている側も読んでいる側も見失い始めている感じがすごくします。

新聞が分かりやすく書きすぎて何を書いている か分からないことがあります。私の小説では、社会 の仕組みや提言などものすごく情報の多いのですが、 気を付けているのは分かりやすく書き過ぎないこと。 丁寧に分かりやすく100%伝えようとするとほと んどの人がそこを飛ばすんです。読んでわからなく なるんですよ。つまり分かりやすさというのは削い だ方が出てくる。行間のある原稿の方が絶対に人の 興味を呼ぶ。四苦八苦しながらどんどん削っていく とですね、何が問題なのかが見えてくるんですよ。 今の日本人の読解力が落ちているとしたら、新聞が 分かりやすく書き過ぎているからだと思います。知 らないことがこれだけあることに食いつかせるため にも、ボリュームの多い、厚い記事よりはコンパク トでちゃんとその行間に何が言いたいか滲んでいる、 文章は武骨でごつごつでいいです。

もう1つ、新聞の大切さですが、新聞は歴史を刻むためしか存在していないと思います。自分たちが生まれる前の出来事や20年前、30年前の出来事を知るときの一番の最初の一時情報を取るのは新聞です。明治維新以降、歴史に書かれた史実というの

は必ずしも完全にバランスが取れた記録ではない。 ただ、その歴史を知っていると書かれていることの 意味が分かるというのが本当の意味のリテラシーで あり、その社会の中で新聞社がそれを記事として残 したことにもっと意味を感じなければいけない。そ れが当時の日本や世界の世相だったりムードだった り。なぜ日本は戦争に走ったかということを今、一 生懸命調べています。戦争とともに新聞の部数が売 れて、ラジオの登場でラジオが国民の感情を煽った というような資料を読んでいますが、一次情報の新 聞やラジオの文字を起こすと、こんなひどいことを 言っていたのかと分かるのは歴史的事実を記録して いたからです。単なる言葉ではなくて木鐸といわれ る我々は世相を反映したうえでこの記事は成り立っ ているという見方をするべきだと思いました。権力 者だけが記録をするのが歴史的新聞の役割かという ともちろんそうではないわけで戦後、様々な反省か ら日本はどれだけ各社がいろいろな質を持っていて もちゃんと反対意見を入れるということをしてきま した。読んでいる人はもう少し社会を考えながら古 い記事も今の記事も読んでいくことが大事なのかな と思います。

もう一つプラスの話があります。ある進学校でジ ャーナリズムの授業をした時、ある女子高生から、 新聞は偏っていると言われました。偏っている根拠 はほとんど先入観です。自分の書いた新聞記事の中 で「どう偏っているか説明してよ」っていうと言え ない。偏っているという意味が分かっていないかも しれない。今の社会やメディアに反論するには、事 実だけで述べなくてはだめで、ジャーナリストの仕 事は、現場に行って自分が見たことを自分の感情が 動いたものを書きましょうと、あなたが許せないと 思ったら、許せないことの事実を積み上げればきっ と読者に伝わるはずで、それを私はジャーナリズム と思う。新聞が重要なのは取材した人間とデスクが いて一緒に回っている記者がいる。取材をする人は 虫の目と鳥の目を持ちましょうと、地べたを這いつ くばるような虫の目と鳥のように高いところから見 てその出来事が社会や地域にどういうふうに見えて いるのかということを見なきゃいけない、という話 をしました。

小説のいいところは、感情移入ができたり、自分 がしなきゃいけないことの疑似体験ができたりしま す。「真実は小説で語る」という言葉があります。私も来年の1月に初めてロッキード事件のノンフィクションを出すんですが、七転八倒して八か月本の邂逅にかかわりました。真実は小説の方が迫れる。なぜかというとですね、まず1つは、感情移入ができることはノンフィクションと大きな違いです。読者が誰かの気持ちになった瞬間にRPGのゲームのようにその世界に入り、葛藤したり冒険したり戦ったり争ったりすることになり、登場人物の感情と自分の感情がミックスされ、小説を読み終えると1つ体験することになります。恋愛小説が一番いい例です。

もう一つ、小説には視点登場人物というものがあ ります。主人公は大体1人ですが、視点登場人物と いうのは何人いてもいいです。例えば、全く価値観 の違う人同士が何か議論する度にその手法を使うと、 お互い腹の内が全て分かります。価値観が違う互い が相手の意見を聞きあってどんどん変化していく、 これが理想の議論です。実社会ではいろんな人と議 論している時に人の腹の中は分からない。こういう 訓練が日本ではなかなかできないので、小説は大き な役割をしています。視点登場人物がたくさん出て くる小説は、日本は比較的少ないのですが、外国に は30視点くらい当たり前に出てくる小説がたくさ んあります。「ハゲタカ」でも7人とか10人とか視 点登場人物が出てきますけれど、個性的に全部役割 を変えているので、同じ企業買収でもこんなに価値 観が違うのかとか、アメリカ人と中国人と日本人で これだけ社会観や倫理観が違うのかを知る小説には 大きな意味があります。

もう1つ、これは今日の話につながるのですが、 小説が良いのは距離感が持てることで、感情移入が できますが、こういう社会、人、出来事、事件ある いはこういう世の中にしたいということは、どこま でもエンターテーメントの虚構の世界です。でも、 私の場合はできるだけ事実に寄り添うように書いて いきます。これは新聞でもそうですが、止められる、 反芻できる、考えられる、そういうことができるの が文字の良いところであり、想像力を喚起しますか ら、物語と現実を行ったり来たりすることによって、 今自分が置かれている社会をものすごく実感として 分かるようになります。そういう距離感を持つこと によって自分たちの今の問題点だったり、もやもや の根源みたいなものが出てくるようになります。 真実は小説で語れと言われる例ですが、さっき話したロッキード事件は40何年前の事件ですから、ほとんどの関係者が亡くなっていますが、存命な方は殆ど80歳以上です。記憶はだんだん自分に都合よく塗り替えられていきます。昔の話なのでしゃべりたくなるというのが強みなんですけど、最後の最後まで靴の上から足を掻いているような印象しかありません。ロッキード事件を小説にすることはないですけど、小説で真相はどんどん突き詰めていったら、真相にたどり着けるんです。

「ハゲタカ」の説明をしますね。20世紀が終わ る頃、日本がバブル経済が破綻したときに銀行や証 券会社や企業がつぶれそうな会社を買収する投資フ アンドというのがあって、その人たちの活躍という のか暴れぶりというのを書いた小説ですが、当事者 に近い人達に取材すると、今までだれもしゃべらな かったことをしゃべるんじゃないかという雰囲気が 出てくるんですよ。小説の取材の時は、約束があっ てそのままは書きません。そのまま書くとご迷惑が 掛かりますから、もうすぐ本当の話が出てくるなと いうときは取材を止めます。その時に取材した方に 申し上げるのは、ここから先は私が想像で書きたい ので本が出てお読みいただいて当たってたら教えて くださいと言っています。小説家は想像力が勝負な んで取材力だけではダメなんですね。破天荒、荒唐 無稽になってしまうと小説として破綻してしまうの で、この可能性ならこういうこともあるだろうと思 って書いたことが当たってます。裏付けをとって文 字にするというのが新聞記事や記者のルールですが、 小説の場合はフィクションですから、想像で書いて いますから、取材を途中で止めて自分の想像力を駆 使して答えを見つけて書くというのが結果的に真実 に届くことがあります。一生懸命取材している私が、 その人の気持ちや感情や判断基準、その人が置かれ た社会環境や立場みたいなものを、小説を読んでい る時だけでなく取材している時も感情移入をして、 ある意味憑依してなりきる中で答えを出すから届く のだと思います。真実という意味では、小説が優れ ているという理由は感情移入し距離を持って背景を 考えながら、最後は自分で可能性を探すということ ができるからですが、小説は新聞よりすごいという ことにならないのです。そこに至るまでのデータベ ースとか元の知識はやっぱり新聞を基準にした、新

聞が書いてきた歴史的事実、想像力ですが、そのベースにあるのは新聞記事です。

これを若い人に言うと、ようやく信用してもらえるようになる。新聞を読まなきゃいけない。知らないことを知るためであり、知らないことの中で、自分が疑ったり疑問を感じたりするブレーンワークを自分の中に頭の中のブレストができるきっかけというのは新聞を読むのがやりやすい。それはフローじゃない、ストックだからです。そういう意味では、新聞が持っている力はすごいし、ただし使う側にそれだけのリテラシーがいるんですけれど、リテラシーを自分の中で培うために必要なのは小説なのかなと思います。

疑う目だったり想像力を喚起しながらいろんな 人を想像していく、あるいは選択肢を考える術はな いかというと、アガサ・クリスティーの小説を読ん でほしいと思います。イギリスのミステリー作家で すけど、なぜ彼女がいいかというと、大変言葉が優 しい、安易、平易である。英語が苦手でも全然読め ます。辞書も使わず、優しい言葉ですが、その優し い言葉の中に罠がいっぱい入っています。クリステ ィーの場合は、登場人物は嘘つきばっかりです。善 い人も悪い人もみんな嘘つきです。ところが嘘つき に読めない、小説の結末が分かるとですね、どうい うことだろうとなる。もう1回読んでほしいです。 そうするとこの人、ここで嘘ついていたとだんだん 分かるようになるんです。人は心の言葉の綾やいろ いろな自分の事情で嘘をついたりものを疑わなけれ ばならなくなる。自分の中で問題意識を持つように なり、問題意識を持つことから書くことと読むこと が始まる、だから学校でも新聞というものを教材に するのではなく、新聞をきっかけにしてほしいと思 います。つまり私たちが暮らしている社会や私たち がこれから先考えていく未来のヒントは新聞にあり ます。ただ漢字ばかりの文字を読んでいて分からな いときに必要なのは、これって本当にそうなのか、 どういうことかという疑いの気持ちを持ってもらえ るように、新聞社側も教育側も想像を喚起するため に何が必要かということが、これから新聞を用いた 教育の中で一番重要になるのかなと思います。あり がとうございました。

(文責 畠山 厚子)

(3) 全国大会シンポジウム



第25回NIE全国大会 東京大会

ともに生きる 新聞でつながる

日本NIE学会との共同シンポジウム

ウィズコロナ時代にNIEで培う力~ともに生き、つながるための資質・能力

シンポジスト: 真山 仁氏 (小説家)

大滝 一登氏 (文部科学省初等中等教育局視学官)

土屋 武志氏 (日本NIE学会副会長、愛知教育大学教授)

本 杉 宏 志 氏 (東京都立青山高等学校主幹教諭、NIEアドバイザー) 水木 智香子氏 (足立区立西新井小学校教諭)

城島 徹氏 (毎日新聞社教育事業室編集委員)

司会: 関口 修司氏 (日本新聞協会NIEコーディネーター)



司会:本日司会をします関口です。コロナ禍で学校現場は大混乱になりましたが、コロナ禍で学校教育の課題を改めて見直すきっかけとなったと思います。ウィズコロナ時代にNIEが果たすべき役割は何か、NIE

で培える力は何かについて登壇者の方からお考え を聞いてこのシンポジウムを進めていきたいと思 います。初めに真山さんからお話を伺いたいので すが、コロナ禍の社会への影響についてお考えを 聞かせてください。

真山:コロナ禍で最初に気付いたのは、コロナの せいでダメになったのではなく、コロナによって 弱点が露出したこと。プラスの面では、自粛でみ んながルールを守るということ。世界では驚嘆さ れているが、これがお国柄であり逆に一つ間違う と隣組になる。先進国の人口密度が高い国で世界 に比べれば被害が少なかったというのは良い面で ある。一方で、バブルがはじけてから社会は無駄 を省いてきた。無駄とは何かというと、まさかの 時に備える力だと思う。もしかしたら捨てるかも しれないけどお金を使って対策を練ろうというの が大事だった。まさかの時にもっと考えることが あったのではないか。政治と医療が密接すぎて、 医療関係者が絶対命を守らなきゃいけないことに 対して政治に忖度しなければならない。結果的に は国民の命を守るという国益を守れなくなってし まう。我々はこの1年近く起きていることの、何 がいけなかったか失敗の歴史をきっちりと記録し ていく。これは新聞や教育現場でも大事で、まさ かの時に備えられる国になってほしい。日本は無 駄を大事にしてこれだけ豊かになったと思う。無 駄イコール余裕という言葉に置き換えられる。そ れがなくなってしまった結果だと思います。

司会:コロナ禍で緊急の対策が講じられましたが、

文科省の具体的な対策を教えてください。

大滝:予測困難な時代が到来しまして、文部科学 省としても前例にとらわれないことをやろうと取 り組みました。6月時点で、学びの保障総合対策パ ッケージ、ポイントだけ述べると「あらゆる手段 で、子供たち誰一人取り残すことなく最大限の学 びを」という学びの保障に全力で取り組んだ。感 染症対策を徹底しながら学校での学習を充実する。 小6、中3、高3の最終学年では優先的に分散登校 等を活用して学習の遅れを取り戻す。他の学年は 2・3年間を見通した教育課程の編成も検討し着実 に学習保障をする。例外的な措置も含め「子ども たちの学びを止めない」を合言葉に取り組んでい ます。さらに、資質・能力の育成、主体的・対話的 で深い学びの実現に向けた授業改善、カリキュラ ムマネジメントといった新学習指導要領の重要事 項を踏まえながら登校日の設定、分散登校の実施、 時間割編成の工夫、長期休業期間の見直し、土曜 日の活用など地域の実情に応じて実施し指導の充 実をしていただく。子供たちの無理のないように 学習の遅れを取り戻す教育課程編成も可能とした。 特例的な対応として、学校で行う学習活動を、先 生と子ども、子供同士などの関わり合いが重要な 動機付けや協働学習、共同でしかできない学習に 特化して、重点化を図るよう通知を出した。臨時 休業中ややむを得ず登校できない児童生徒に対し て、指導計画の工夫を踏まえた教師による学習指

導や状況把握などもお願いした。先進的な取組事例を示したり、文科省のウェブページに学び応援サイトを開設して自宅等で活用できる教材、動画を配信したりした。新聞各社においても取組の周知に協力をいただいた。



司会: それを受けて、大学ではどう対応をしたの

か、お聞かせ願います。

土屋:私の授業では、新聞切り抜き作品を作るよう自宅で課しました。自宅でできるし、コンビニで新聞も買える。ネット購読もデジタル化の新聞



はできるし、紙の新聞も届けてくれるので学割や試し読みができる。自分でテーマを決めて整理してまとめることが初経験の学生もいて、自分で考えることができてよかったと言っていました。

司会: 高校の対応はいかがでしたか。

本杉:当初は、休校は春休みまでだったので何とか乗り切れたが、新学期になっても休校が続き、突然オンラインの授業になり戸惑いました。若い先生、卒業した大学生が大分支援してくれました。教務主任をしていますが、6月から分散登校になり、2週間ごとに都のガイドラインをもとに臨時時間割の作成、生徒や時間講師への連絡等様々な調整や連絡がありそれが大変でした。

司会:小学校ではいかがでしたか。

水木:プリントやドリルの指示をするのみで、NIEの実践をすることもできなかった。コロナ禍でも、みんなで楽しく遊べる遊びを考えたり係活動を考えたり前向きにとらえられる子供たちで、学習にもとても熱心で真面目に取り組んでいる。現在の児童に新聞を取っているか聞いてみると分からない子もいて新聞が身近でない。前任校では、6年間週1回新聞に触れあうNIEタイムを実践していたので、新聞はとても身近なものでした。知りたい、どうなっているんだろうという課題意識を持ったり、その日の新聞の1面は何かを予想し合ったり、複数の新聞の1面が同じときは見比べたり、社会の出来事にとても関心があって自分事としてとらえていた。

司会: ウィズコロナ時代の教育の在り方について 考えをお聞かせ願います。

真山:小学生の頃、先生が道徳の時間になぜ学校に来るのかと聞いていたことを思い出しました。答えを言うと学校には社会性がある。いろんな家庭があり、学級の中で役割が分かるようになる。学校は社会に出るための準備であって、クラスごと学校ごと、社会性が大事だと思う。

コロナによって、4月以降新入生に会えない状態で心配していた。新聞は毎日新しいニュースが出ますから、同じ記事を見ることによって、ばらばらなものを一つにつなぐ扇の要的な役割として

新聞が使われていたらよかったのか。記事を特定するかどうかは別だが、バラバラな環境の中、同じ記事を読むことで何を感じたかという意味では、同時代性というか同じ時代を生きているという意識は社会性につながっていくので、そのような新聞の使い方は面白いのではないかと思いました。

司会:「社会性」、キーワードが出てきました。大学で求められる資質・能力はいかがですか。

土屋:情報活用の力です。今日の真山さんのお話 で刺激を受けたのですが、常識を疑うとか正しさ を疑う、大学は教科書や学習指導要領がないので、 自由に今までの常識を疑ってもよいし、正しいこ とは本当だろうかと疑ってもよいし、それを情報 活用という話に絡めて見ると情報の正確さと正し さをあまり意識しないまま混同していた。正確さ は追求できるが、学生が不安になるのは自分の考 えが共有できるのか他の人と同じなのか違うのか、 自分の考えが本当に正しいのか個別の学びになれ ばなるほど不安になる。正確な情報を調べるとい う学習と調べて考えた学習が正しいかどうか、切 り分けて落とし込んだ学びにつなげていく、今日 のテーマの「ともにつながる」の「ともに」はとて も重要ではないか。ウィズコロナの時代は、まさ にそこを大切にしていきたい。

司会:「ともにつながる」というのは、情報活用に基づいてメタ認知をしながら会話が進み、深い学びになっていくとつくづく思いました。

土屋:大学の情報メディアの先生と一緒に新聞学習をしています。デジタル系の情報メディアの方が新聞はダメかというとそうではない。新聞をベースにしないと情報リテラシーもうまくいかないと、一緒にやりながら逆に指摘されます。

司会:ウィズコロナ時代の資質・能力を絡め、PISAの読解力テストは15位という結果の見解、高校の国語の選択教科、論理国語は誤解もあると思いますので、3点についてお聞きします。

大滝:ウィズコロナ時代の求められる資質・能力ですが、中教審の中間まとめで「令和の日本型教育の構築を目指して」が公表されたばかりです。まさにコロナのような予測困難状況が、社会の在り方が劇的に変わる Society5.0 時代の到来も含め新学習指導要領が想定していた未来社会そのものであった。新学習導要領が掲げた資質・能力を着実に育成していくということにつきると思います。学校における働き方改革であるとか GIGA スクール構想の実現といった動きも加速充実させた上で、従来の評価されている日本型学校教育を発展させることが重要だといった認識が、中教審で支

持された。

協働的な学びと、個別最適な学び(個に応じた 指導)のどちらかではなく両者を往還させること が重要である。中間まとめでは、新学習指導要領 の着実な実施、ICT活用の充実、すべての子供たち の可能性をいかに引き出すかということが求めら れている。新型コロナウィルスについても言及が なされている。学習指導要領の改訂の考え方は周 知されているが、NIEには多様な可能性がある と考えている。社会性という言葉が出たが、社会 に開かれた教育課程を今回の根本理念で示してい るし、新聞には社会に関わる多種多様なコンテン ツがある。学習の基盤となる教科横断的な資質・ 能力として言語能力(言葉の力)、情報活用能力、 新聞に触れることで喚起される問題発見・解決能 力、こういったものの資質・能力に新聞は大きく かかわることができる。現代的な諸課題に関する 教科等横断的な教育内容として主権者に関する教 育には、日々現実の情報を伝えている新聞は欠か せない教材だと思います。

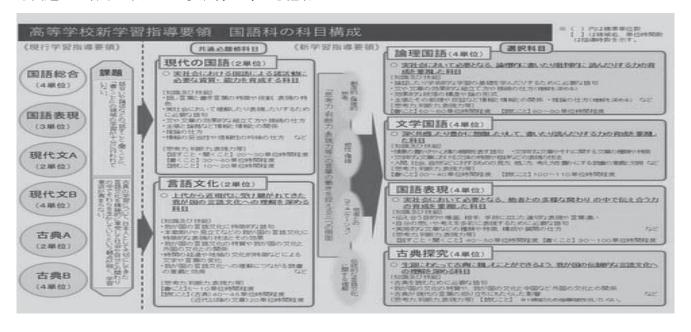
予測困難な状況だからこそ子供たちがたくましく生きる力を育成する必要があり、新聞は日々更新し複数の新聞が発刊される時間的・空間的ダイナミックな動きを有するものでもあり、NIEには教科書だけでは育成しにくい部分も含めて、より活用することを期待している。情報活用能力とも絡めて、学習指導要領の総則、国語、社会、内容の取扱い等で新聞の文言が明記されています。

PISA の読解力の課題については、コンピューター使用型の調査で行われたが、テキストから情報を探し出す問題、テキストの質と信憑性を評価する問題の正答率が低かった。自分の考えを他者に

伝わるように根拠を示して説明することも引き続き課題がある。目的の情報がどこにあるのか見付けられなかった子供や情報と情報を突き合わせて矛盾があるとか信憑性があるとか考えられる子供がOECD平均より低かった。真山先生や土屋先生の話とも関わり、こうした点での学習の充実が求められる状況だと思う。

今後、GIGA スクール構想の実現が進むプロセスの中で、読解力の育成に関する教育も求められる。 文科省としては、論理の展開や表現の仕方をとらえて内容を解釈するとか、文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えを持ち表現する、自分の言葉で表現することの重要性や実用的な文章に触れる、主体的・対話的で深い学びの実現は、すべての授業で求められているが、新聞は大いにつながっていくのではないか。新鮮な情報、子供たちが初めて目にする情報から対話が生まれていくと思う。主たる教材は教科書ですが、教科書が全てではなく、新聞も含めて多様な教材を活用してほしいということ。ただし目標の実現のために新聞をどう活用するかを見失わないようにしてほしい。

高等学校の国語の科目の再編については、選択科目に話題が集中したが、6科目のバランスに注目してほしい。新聞教材にはいろいろなコンテンツがあるので文章の種類が話題になったが、社説・論説は論理的な文章、小説・詩歌は文学的文章、報道記事、広報・広告は実用的文章と位置づけになっていて、それらすべてが入っている新聞は教材の宝庫である。報道記事で新聞活用が期待されるのは現代の国語や論理国語。報道記事を取り上げた時に国語表現という科目でも使用できるし、コ



ラムに古典の一節などを引用している伝統的言語 文化に関する課題探究は古典探究にも活用できる。 先生が子供の実態をしっかり見据え、学校教育目標と社会と共有して育成を目指す資質・能力を明確にし、その実現に向けた教材選択をしてほしい。 子供にとってどういった資質・能力を育てることが重要かといった第1意義において科目選択をお願いしたい。

司会:臨時休校期間中、NIEはできた状態でしたか。

本杉: 休校中はこれといった実践はできない。私は、オンラインで歴史を深めるという読み物を配信していたが、関連する記事を紹介した。自宅で新聞を取っていない家庭が多く、記事に触れさせることができないことが残念。

水木:実践はできないが、私自身は新聞を読む時間がたくさんあったので、新聞が活用できそうな記事を読むことができ準備期間であった。

司会:新聞を読んでネタ探しをしている、そのような先生が増えてほしいと思います。

ウィズコロナ時代と大正デモクラシーの時代が似ていると城嶋さんと話したことがありました。 何が起こるか分からない時代、閉塞感のある時代、 もしかしたら今に近いのかもしれません。

城島:京都市の学校歴史博物館での写真を手掛か



りと時べる流児をはな気ではな気ではな気ではな気ではな気ではな気でもした。

った大正自由教育が広がっていった。その中で新聞の活用やアクティブラーニングに通じる理念があった。大正時代の新聞の中で、偶然「有益なる新聞教育」という記事を発見した。大正4年3月13日付の大阪毎日新聞の京都地方版です。これを読むと、「時世に適応せし新教育法」という非常に新

しい教育法だ、 書物館で見ずれて ので見ずれて ので見が ので見が に見たことが に見たい にしたい にしたい



るが、大正初期に教室で子供たちが新聞を読んで いる写真はないと聞いていたので、珍しい写真と いうことが分った。その記事によると子供たちが 持っていた新聞は、第一次世界大戦の戦況を報じ る記事で、その授業では先生が「新聞記事は莫大 な経費と非常な努力がはらわれています」「だから 諸君、新聞記事は活読せなければなりません。し かも健全なる新聞を選択せなければなりません」 この言葉は重要だと思いました。確かに、スペイ ン風邪の流行、関東大震災、治安維持法の制定な ど政治的弾圧が強まっていく、そういった非常に 閉塞感のある時代として今と重なると思うが、短 い時間かもしれないが先生が子供に新聞を持たせ て社会を知ってほしい、そのような教育がなされ たことは非常に意味があり、現代につながると感 じた。

司会:記者の追及の仕方は半端じゃないですね。 「そして星の輝く夜が来る」の小説では、先生が 子供を変え、学校や地域を変えていくという話だ ったのですが、この取材のご苦労なども聞かせて ほしい。頼もしい6年生が描かれている。

真山: 震災や自然災害とコロナ禍の共通は自粛ですね。自粛がすべての生活と行動を縛っている。 相違点では、自然災害は発生した後にはこれ以上 ひどいことはない。反対にコロナの状況はいつ終 わるか分からない。いつまで待てばいいのという のは拷問に近い。戦後初めて経験することだと思 うが大変である。

「そして星の輝く夜が来る」の被災地での取材は 殆どしていません。ものすごい量のメディアの情報、学校等を取材したメディアもたくさんある。 それを聞いて私が何を感じるのかが重要だった。 この小説は私には珍しいヒューマンな物話で、神戸から被災経験のある先生が被災地に応援教師としていく。先生は関西弁で、子供たちは標準語で話します。理由は被災地全体を物語にしたかったということと、先生は感情を大阪弁でしゃべる、 子供が標準語で話す。すると一番あたふたしている様子が見えてくる。

私は 12 歳が人間の中で一番最強だと思っている。大人の言っていることも分かるし、空気を読まなければならないことも分かっている。でも彼らはまっすぐな真実とか正義とかに揺るぎない気持ちを持っている。私の最大のライバルは 12 歳の時の自分だと思っている。一番大人の痛いところを突いてくる。グーの根も出なくなると母親によく殴られました。新聞も報道も、12 歳でも理解で

きる伝え方にするというのが今でも重要だと思っています。

司会:今後、またこのようなことが起こったら実践してみたいNIEはありますか。

水木:年間計画やどのような活動をするのか見えない中でのスタートだったので、これから先使えそうな教材集め、テーマを決めてスクラップをしたい。現在4年の担任で総合的な学習で調育にいる食品ロスや防災教育に関わりのある記事を集めさせ



たい。学年ごとにワークシートを作り実践できるように準備したい。

現在の学校でも新聞スクラップを 2 度行ったが、初めての活動でも意欲的にアメリカ大統領選挙の記事や食品ロスなどをスクラップして、様々な分野に興味を持っていることが分かった。友達がどんな記事を読んでいるか知りたいと気持ちが伝わり、子供が学びたいと学びに向かう力を垣間見ることができた。NIEを続ければ、学ぶ姿勢だったり学びに向かう力が着実に育つのではないか。

本杉:オンラインでいろいろな授業ができることが分かった。以前地方紙と中央紙を比べて沖縄の基地問題を考えさせたことがある。当たり前だが地方紙のほうが詳しく現地の声なども反映しているので、同じ内容でも中央紙と地方紙を使って授業をした。今後現地の高校とオンラインで結んで生徒同士の意見交換をすればさらに考えなどが深



まっていくと思う。言葉の 問題がクリアされれば国家 間、例えば中国や韓国の生 徒と交流してみたい。お互 いの歴史認識の違いを認め 合いながら理解する中で共 生の道を模索できればいい と思う。

司会: つながる授業、今求められていると思います。 コロナ禍で改めて感じたNIEは?

本杉:信憑性の疑う情報が数多く流れたと思う。 総務省の発表では、若い年代ほど信用するという 傾向がある。学校が再開したときに生徒たちにア ンケートを取ってみたところ、信じてしまった割 合が高かった。そしてその情報をすぐ拡散する。 このような状況を考えると複数紙の読み比べやリ テラシー学習がしやすいNIEは今後ますます必 要になってくると思う。同じ出来事でも新聞によ ってとらえ方が違う。複数紙を読み比べることに よって論調の違いから多面的な見方や考え方を学 ぶことができると思っている。

司会:新聞界への期待や要望、今後のNIE学会の課題や方向性など話してください。

土屋:新聞はどこから読んでいいか分からないと答える一方、ある生徒は社説から読むと答えている。社説は、簡潔にわかりやすく、考え方が分かるように書いている。共感するかしないかは別として、その意見について考えることができるとの理由からだ。事実を伝えるだけでなく社説という形で考えを伝え、そこから考えることができ読むきっかけになるということだ。

新聞社に期待することは、批判されてもそれこそが大切なことと自覚してほしい。多様な考えや多様な研究をNIEと一緒に育てていってほしい。コストのことも考えなければならない。これだけの正確な情報を得るためには、どのように情報を集めて整理して届けるのか、仕組み自体も学習内容として組み込んでいくことも必要である。

司会:NIE実践を2つ紹介してください。

水木 ・学く分グタイムで は、 は、 がより間、 のは、 のは、 のは、 がは、 がは、 がは、 がは、 がは、 がは、 がいるが、 がいが、



く、その中で週2回学級新聞を作っていた。子供 自ら取材し、記事を書いて編集会議を開き、イラ ストやグラフを用いてまとめ、短い言葉で伝えた いことを表した。割付の工夫や見出しの言葉など を本物の新聞をヒントに学んでいた。自己流では ない新聞を作ることができ、仲間と一体感を持ち ながら作成できた。ロングNIEタイムでは、意 見や感想を交流することを入れた。書く力、聞く 力、伝える力が鍛えられたと思う。教科学習でも 生かされている。

本杉:新聞記事を使って小中高をつなぐという実践です。具体的には、小中高の児童生徒が同じ記事を読み込み意見交換をして考えを深めていくという取組で、交換日記のようなことをする。小学生がある記事について感想を書き、高校生がコメントをする。このようなことを2往復しました。双方とも面白いくらいに真剣に取り組んだ。もう1つはジェンダー問題。役割分担の歴史的背景な

どを学習した後に、新聞を活用して現代の性別や分業問題について授業した。その後、サザエさん一家で、サザエさんが外で働きたいといった場合をロールプレーしてみた。即興劇なので役割は当日決める。劇の進行とともに家事や育児問題が出てくる。その後でもう一度新聞に戻ると、今まで他人事だったのが自分事として新聞を読めるようになる。この2つの実践が印象深い。

司会:今の実践についてコメントをお願いします。 大滝:1つの資質・能力を発揮するのではなく、い ろいろな力を育てられるというのが新聞活用の良 さである。学級新聞の作成、記事の交流の中に表 現力や話したり聞いたりする力、いろいろな切り 口から現実のいろいろな課題に迫ることができる。 新聞から現実的な具体的な話題を自分の問題、社 会のいろいろな立場の方ともかかわっていける新 聞活用の可能性が感じられた事例である。



城島:二人の教育実践を見学したことがある。水木さんの授業では、日常的に新聞に触れることを続けていくと、子供たちが主体的に考えたり資質・能力を伸ばす可能性があることを感じた。本杉さんは東京都議会でのセクハラ野次の発言の記事を使って

旧民法での女性の地位や立場を教えていた。本杉さん自身も新聞投稿を数多くしていて新聞に深く 関わろうという姿勢を持っているからこそ的確な 教材を新聞から使っていると思いました。本杉さんは、新聞を読む高校生にしたい、ここで学んだ 生徒が将来選挙に行く人になってほしいということをモットーにしていて素晴らしい。

司会:最後に本日の感想を述べていだきたい。

土屋:NIE学会として、風評被害や外国にルーツのある子のNIEなど、今後研究をしていかなければならいない問題が多々ある。継続して集約し研究していくことが役割なので、日本NIE学会にも興味を持っていただきたい。

水木:NIEと関わることで私自身が大きく変わった。教材を社会の中から見つけようとするなど 子供だけでなく教師も育ててくれる。日常的に新聞を読んでいる子供であれば、自分の考えを持ちたくましく育ってくれると思う。

本杉:私は常々常識にメスを入れると言っているが、真山さんの「常識を疑え」の言葉を教室に持ち帰りたい。私は、新聞の読めるかっこいい高校生、新聞を読んで選挙権を無駄にしない有権者になる

うというのがモットーで、ツイッターでも卒業生のコメントが楽しみ。18歳に選挙権が引き下げられ、また成人年齢も引き下げられる。みんなが幸せに生きられる社会をつくるために、「蟻の一歩」で構わない。それを教えてくれるのが新聞だと思っている。

城島:南アフリカの元大統領マンデラは、自分が 目を通すまで他の誰も読むことを許さなかった。 女王陛下を待たせていても畳まないと気が済まな かった。森繁久弥さんは、朝日、毎日、読売、産経、 東京の各紙とスポーツ新聞を取っていて好奇心が すごかった。どれだけ情報を大切にしていたかが 分かる例である。新聞の形態は、時代とともに変 化するが、新聞が培ってきたノウハウや価値判断、 最も大事な現場取材、発信の仕方は1つの文化と してしっかり引き継いでいきたい。

大滝:新聞の可能性に目を向け、学校図書館に配 備されるよう組織的に取組が推進できるような動 きになってほしい。新聞社の方には公教育に資す る社会的な価値、信頼性が高い情報発信に引き続 き務めていただきたい。情報の送り手としての新 聞活用の具体的方法や留意点等を提案してほしい。 真山:社会のいろいろな人と話すと最後に行きつ くのが「やっぱり教育だよね」「メディアはしっか りしないとね」である。問題意識をもって両者が どうあるべきかを考えていくという姿勢が、とて も重要。今心配なのは、コロナ禍で正しいという ことにみんながすがりついていること。学校でも メディアも正しさは1つでないということを教え てほしいと思う。正しさは1つでなくて正しさが 衝突してハレーションを起こすが、お互いの正し さが向き合うことで初めて理解に広がっていくと 思う。大樹の陰に隠れてしまうとものを考えなく なる。新聞としての落としどころとしては、こう

いう正しさもある、こういうのも正しいみたいだよと放り投げ感の方が信頼度が高くなる。日本の苦手なゆるい答えが、実は求められる多様性につながっていくと思う。このNIEの取組がかくあるべしではないのがよいと思う。



司会:NIEは今求められている資質・能力を培 う教育であることは間違いない。それに加えてコ ロナ禍もそれを学習にしてしまうたくましい学び とも感じました。 (文責 畠山 厚子)

(4) 分科会一覧

< 令和2年11月22日 オンデマンド配信 >

〈小学校〉

- ①「学校全体で取り組むNIE~新聞をフル活用」
- ■国分寺市立第五小学校
- ②「持続可能な言語能力の育成~読み書き能力を伸ばす実践」
- ■江戸川区立南篠崎小学校・堀口友紀主幹教諭
- ③「課題発見解決能力の育成~新聞で社会とつながる」
- ■文京区立関口台町小学校・矢野篤彦教諭 〈中学校〉
- ④「新聞を活用して意見形成を図る実践」
- ■世田谷区立船橋希望中学校・渡邉是能教諭、末松紗歩教諭
- ⑤「新聞を通して社会を見つめる~投書で『特別の教科道徳』|
- ■世田谷区立喜多見中学校・木村要介教諭
- ■練馬区立石神井東中学校・向井哲朗主任教諭
- ■豊島区立明豊中学校・佐久間伸昭教諭
- ⑥「言葉を見つめる~新聞の写真を題材に俳句を創作する」
- ■町田市立真光寺中学校・山田慎一主幹教諭 〈高校〉
- (7)「実社会と国語を結び付けるための授業~N | E の実践を通して |
- ■東京都立第三商業高等学校・髙倉愛理沙教諭
- ⑧「新聞で世界とつながり、共に考えるNIE~多国籍生徒たちの挑戦|
- ■東京都立新宿高等学校・高橋伸明教諭
- ⑨「18歳成人とNIE~大人になることについて考えよう」
- ■東京都立荻窪高等学校・代田有紀主任教諭(NIEアドバイザー)

〈特別分科会〉⑩行政を挙げたNIE活動の紹介(世田谷区、北区)

※資料をご覧になりたい方は、NIE 委員会事務局までご連絡ください。

VI 部会報告

(1) 小学校部会

宮城県NIE推進委員会小学校部会長

仙台市立岡田小学校 校長 阿部 謙

新学習指導要領が完全実施となり、3つの柱に即した NIE活動を推進すべく構想されていた今年、新型コロナウィルス感染症対策による新しい生活様式の下、当小学校部会の活動も制限されることとなりました。

部会、研究会、役員会を開くことができず、限られた活動になってしまったことをお詫びいたします。

1. 新聞無償提供事業

① 事業目的

実際の新聞を活用して、新聞の構成や新聞の読み 方を理解させるとともに、新聞を題材・資料として 活用する機会を設ける。

② 提供新聞

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、産経新聞、日本経済新聞、河北新報の6紙から2紙以内を選択

③ 本年度実績: 6校に 453部向山小学校(河北22部、朝日23部)

新田小学校(河北185部)

岡田小学校(河北37部)

荒井小学校(河北46部、朝日47部)

幸町南小学校(河北47部)

立町小学校(河北23部、朝日23部)



④ 活用後の感想から

- 初めてじっくりと向き合った新聞に親しみを感じることができ、今後新聞を手に取るきっかけとなった。
- ・ スポーツ欄を読み比べたことで、地方紙は地元 に寄り添った記事を書いていることに気が付く ことができていた。

- 同じ出来事でも、新聞社によって見出しの付け 方や記事の内容が異なることに気が付くことが できていた。
- ・ 家庭で新聞を取っていない児童が少なくない状況で、きれいな本物の新聞を手にした子供たちは喜んでいました。紙面を開いた大きさに驚いたり、同じ見出しでも大きさが違うことに疑問を持って記事を読み始めたり、様々な表情を見せてくれました。
- ⑤ 児童の反応等
- おもしろかった。また読んでみたい。
- ・ 見出しで読者を引き寄せるのはすごいなと思うし、色々な場所でやっているおもしろそうなことが、情報として取り入れることができるので、新聞っておもしろいなと感じることができた。
- 新聞記事には、テレビのニュースだけではわからない細かい情報もいっぱい載っていると思いました。
- 新聞も意外と見ると楽しいし、落ち着きました。
- 家族でもキーワード探しをやってみたい。

2. NIE研修会 「楽しく学ぶNIE」

令和2年11月16日(月)に仙台市立泉松陵小 学校行われた研修会にて、ワークショップを行いま した。

 $[N \mid E$ あれこれ ~授業に生かす $N \mid E$ ~]

講師:仙台市立岡田小学校長 阿部 謙 ワークシートの作り方を主に、いろいろな実践例 を紹介しました。今年度は、新型コロナウィルス感 染症対策のため実践指定校のみを対象としましたが、来年度は、県内の多くの先生方に参加してほしいと 思います。

最後に、今年度は、NIEに限らず、学校教育全体が異例の展開となりました。

新しい学習指導要領の中で、NIEの活動をどう 展開させるか、じっくり考える機会となりました。 来年度は、部会を開いて、検討できることを願っ てやみません。

令和2年度高校部会の活動を振り返って

宮城県NIE推進委員会高校部会長

仙台城南高校 教諭 鈴木 理恵

1 はじめに

今年度はコロナ禍のため、高校部会の研修会は残念ながら中止としたが、宮城県NIE研究大会として企画された児童・生徒によるオンライン意見交換会に参加した。

2 オンライン意見交換会に向けて

オンライン意見交換会は、令和元年度宮城県NIE 研究大会のパネルディスカッション上で提案があった「校種を超えて生徒たちがNIE教育を通じて意見交換をするのはどうか」という申し出をNIE事務局の方で受けていただき高校部会と協議しながら進めてきた。

令和2年9月2日に河北新報社において高校部会を開き、「オンラインによる意見交換会」についての第1回打ち合わせを行った。この日は意見交換会の実施のねらい、経緯と内容の説明、日程、時間、参加校、これからの準備等、大まかな概要について話し合った。また、ファシリテーターを仙台二華高等学校の大槻欣史先生に、エンジニアを宮城第一高等学校の三嶋廣人先生にお願いしたところ、快諾いただいた。

11月10日に ZOOM を使用して参加校が打ち合わせを行った。この日は事前に事務局と仙台二華高校の大槻先生に作成いただいたオンライン意見交換会の原案を基に、会の流れや内容を参加校で検討した。

12月7日に最終打ち合わせ行った。ZOOMを使用し、参加校と事務局とで当日の流れについて確認した。意見交換会の前半は各校が児童や生徒の視点で自校のNIE活動について紹介し、後半はNIE活動を行っての感想等を互いに話し合う流れとなった。

3 オンライン意見交換会

令和2年12月18日(金)15:45~ 河北新報社 別館4階会議室を本部として、オンラインによる意見交換会を行った。以下、参加校の発表概要を列挙する。

石巻市立湊小学校:新聞を活用した取組を Facebook や校長室だよりで発信していること、新聞作りについて、新聞記事コンクールへの出品、新聞への投書をきっかけに新聞紙面上で他県の方と交流したことについて等

仙台市立泉松陵小学校:こども新聞に意見文を投稿したこと、こども新聞で取り上げたトピック等についてまとめているNIEプリントについて、生徒作成によるNIEプリント活動について等

大崎市立岩出山中学校: 分散登校中に取り組んだ「ことばの貯金箱」について、新聞記事を通しての中新田中学校との交流やNIE川柳の紹介等、宮城県の志教育を軸にNIE教育を進めてきたことについて等

仙台城南高校:「ヤングケアラー」についての新聞記事を取り上げ、SDGs の視点から考えながら現在行われている国内外の取組を調べ、解決方法を自分たちに引き付けて考えたことについて等

宮城広瀬高校: 6 社の新聞をクラスごとにローテーションして読んだり、記事の記録等を行ったこと、新聞の読み方講演会について、気になった記事に関してまとめたポスター作りについて等

多賀城高校:現代社会の時間に複数の新聞の読み比べを行ったこと、新聞購読に関するアンケート調査について、小論文対策として新聞を活用していることにつて等

泉高校: 朝の自学習で新聞のコラム欄の感想を書いていること、新聞記事について SDGs の視点で考えたことをまとめたミニ新聞の作成、出前授業で新聞社の記者が分かりやすい文章の書き方について教えてくれたこと、小論文対策として新聞を活用していることについて等

4 最後に

発表後の生徒たちの感想に「高校生がやっていることを私もやってみたい」、「新聞の内容は難しいのに、小学生、中学生がここまで掘り下げているのはすごい」「学校ごとの活動内容を知り、自分たちの取組にも活かしていきたい」いう感想があり、実り多い会だったと感じている。今回は時間の都合で、発表したことについて互いに意見を述べ合うことは難しかったが、今後は小・中・高と異なる学年の異なる視点から新聞を使って議論を展開する場を増やしていきたい。

コロナ禍で活動が制限されるにもかかわらず、このような会を実施することができ、NIE事務局の皆様、関係する諸先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

宮城県NIE地区研修会 (角田中学校)

宮城県NIE委員会は9月9日、角田市立角田中学校を会場に令和2年度地区研修会を開きました。新型コロナウイルス感染予防のため多くの活動が限られる中、角田市を中心に中学教員ら約30人が参加。読売新聞東北総局長の池辺英俊さんと河北新報社防災・教育室主任の末永智弘さんが講師を務め、新聞がもたらす学習効果や学校生活での活用方法、個人新聞を作るこつなどを伝えました。

読売新聞東京本社でNIE部長を経験した池辺さんは「新聞はプロの記者が取材した多くの正確な情報を一覧できる、世の中を見渡せるメディア」と述べ、インターネットと比較した新聞のメリットを指摘。子どもに週1回新聞を読ませて感想を書かせ、学力向上を目指している東京都北区の取り組みを紹介しました。

新聞活用に熱心な横手市などの学校の事例にも触れながら、「新聞を読んで疑問が湧き、自分で調べる。 その繰り返しが成長につながる」といった学校関係者の言葉を強調。「デジタル全盛時代だが、教育をデジタルだけに教育を任せていいのか。活字文化も残すべきで、その代表が新聞。新聞という社会に開かれた窓を教育に生かしてほしい」と訴えました。

後半のワークショップでは、末永さんが新聞紙面の作りについて講話しました。参加者に当日の朝刊を手にしてもらい、見出しの付け方やレイアウトのルールなどを説明。児童生徒の個人新聞製作を想定し、見やすい紙面作りがイメージできるよう、一般紙とスポーツ紙の対比もしました。

末永さんは高速道路の速度制限を120キロに引き上げる法律改正の記事を題材に、見出し部分を隠し



朝刊を教材に見出しやレイアウトを見比べる参加者

て参加者に見出しを考えてもらう実践も指導。参加者は記事を読み込んで夢中で見出しを考えました。道路標識のように「120」という数字を赤い丸で囲んだ実際の紙面の見出しを見せられると、「なるほど一」といった喚声が上がりました。末永さんは「子どもたちが作る新聞なら、一般紙よりスポーツ紙の方が近いかもしれない。しゃれや流行語なども使い、肩の力を抜いて楽しみながら作るといい」と助言しました。

参加者の一人は「新聞紙面を作るためのレイアウトや見出しの付け方など、授業やさまざまな活動で活用できそう。遊び心を入れていいとなれば、喜んで取り組む生徒は多い」と話しました。

講話「楽しく学ぶ NIE」 読売新聞 東北総局長

池辺英俊さん



NIE 部長を8カ月務めました。小学生向けには夏休み親子新聞教室を開き、新聞クイズや気に入った記事の切り抜き、要約や記事を選んだ理由の発表などに取り組んでもらい、言語活用能力の鍛えにつながったのではないかと思います。

「なぜ新聞を読む必要があるのか?」という高校生には「将来好きな仕事に就くため」というキャリア教育の観点から新聞活用を進めました。自分の適性を知り、新聞を読み社会にアンテナを広げる。知識の幅を広げつつ、専門分野を深掘りする。新聞は社会を俯瞰できるメディアです。IT大手社長の藤田晋さんは「新聞は関心のないニュースも目に入る。インターネットの情報は興味のある分野に片寄る」と言っています。

東北では秋田県大仙市、横手市などが学校での新聞活用に熱心に取り組んでいます。ある先生は新聞活用の意義を「子どもの関心の入り口を広げ、新たな疑問が湧いて調べる。その繰り返しが成長につながる」と話していました。新聞は読解力や思考力、判断力、表現力が身に付くと考えられます。新聞という社会に開かれた窓を教育に活用してほしい。デジタル全盛の時代でも活字文化も大切で、その代表が新聞であり読書。活字文化を守りつつ、デジタルへの移行を図ることが大切と考えます。

宮城県NIE推進委員会 NIE研修会(仙台市立泉松陵小)

宮城県NIE推進委員会は11月16日、県内のNIE実践指定校の教諭を対象に令和2年度のNIE研修会を開きました。新型コロナウイルスの影響で本年度のNIE全国大会がオンライン開催となり、NIEに取り組む教諭の研修の機会が減ったことから、実践指定校の担当者に新聞活用方法を知ってもらおうと、県NIE推進委が企画しました。

毎日新聞社仙台支局長の石丸整さんが「新聞の違い」をテーマに講演しました。同じ日の毎日新聞、読売新聞、朝日新聞、日経新聞、河北新報の1面トップ記事を例に、なぜそのニュースがトップ記事になったのかなどの背景を解説しました。新聞に載せる記事をどのように決めるか、紙面編集の流れの説明もあり、「トップ記事をどれにするかは会議で話し合って、民主的に決めている」と舞台裏を明かしました。

石丸さんは「新聞の役割は、よいことも悪いことも全部記事にして、世の中で何が起きているか知らせ、問題提起することにある。 良質なノイズを提供し、考えることの窓になれるのではないかと考えている」とまとめました。

仙台市立岡田小校長の阿部謙さんは、ワークシート作りなど、実際の授業で新聞を活用する手法を紹介しました。阿部さんは「教科書は検定を経るので記載内容が2~3年遅れる。今の状況を学



ぶには新聞がいちばん。授業の狙いを明確にした 上で、教科書で足りない部分を補うのに新聞が使 える」と述べました。

質疑応答では、「低学年の児童に新聞に親しんでもらうにはどうすればよいか」との質問が出され、阿部さんは「読める漢字が少ない低学年には写真から入るのがお勧め。気に入った写真を切り抜いてまとめると写真集のようになる。覚えさせたい数字やカタカナを紙面で探させ、丸で囲むのも面白がって取り組む」と答えました。



講演「新聞の違い」 毎日新聞社 仙台支局長 石 丸 整 さん

新聞によって同じニュースでも見出しが違う。日本学術会議の任命を巡る記事では、読売と日経は問題視しないトーン、朝日と毎日と河北は問題提起をする見出しになった。どちらがいい、悪いというわけではないが、言論が二つに分かれているのは現政権との距離の違いからだろう。これだけの差があると読者は読み比べても戸惑う。新聞社としても反省しなければならない。

新聞を教材にするのは難しいか。そうでは ないと思う。たとえばミンクの殺処分記事が ある。「えっ、どうして?」と感じるだろう。 考えることの窓となり得る。新聞は良いこと も悪いことも全部書いて、問題提起をするの が役割だと考えている。物事を探ることの入 り口になる記事を提供したい。

Ⅷ 研究組織

(1) 宮城県NIE委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県NIE委員会と称する。

(目的)

第2条 本会はNIE (Newspaper in Education・教育に新聞を)の呼称にちなみ、新聞を生きた教材として 活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会にお ける情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事案について協議し、指導助言する。

- ①実施目的及び計画に関すること。
- ②研究推進組織に関すること。

(組織)

第4条 本会の委員構成は次に掲げるものとする。

宮仙宮仙宮仙宮仙宮城県連合中学校教育研究会会

宮城県連合小学校特別活動研究会会長宮城県連合中学校特別活動研究会会長宮城県連合小学校生活・総合研究会会長宮城県連合小学校国語研究会会長宮城県連合小学校国語研究会会長宮城県連合中学校国語研究会会長宮城県連合中学校国語研究会長長宮城県市中学校国語研究会長長宮城県内の大学の代表者在仙の日本新聞協会加盟社の代表者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(会長・副会長・監事)

第6条 1 本会に、会長1名、副会長5名、監事1名を置く。

- 2 会長は委員会を代表し、会務を統括する。
- 3 副会長は会長が指名する。
- 4 会長に事故ある時は、副会長がその会務を代理する。
- 5 監事は会計監査を行う。

(会議)

第7条 本会の会議は、会長が招集し、主宰する。

(顧問)

第8条 本会に次の顧問を置く。

宮城県教育長 仙台市教育長

(推進委員会)

第9条 本会の事業を達成するために、宮城県NIE推進委員会を置く。この会則は別に定める。

(庶務)

第10条 1 本会の庶務は、宮城県NIE委員会事務局が行う。

2 会計年度は4月1日から翌年3月31日とする。

(報酬)

第11条 本会の会長、副会長及び委員には報酬を支給しない。

(補則)

第12条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正平成 5 年 7 月 1 日改正平成 22 年 6 月 1 日改正平成 6 年 6 月 9 日改正平成 23 年 7 月 5 日改正平成 16 年 2 月 27 日改正平成 24 年 6 月 5 日改正平成 18 年 2 月 15 日改正平成 25 年 6 月 20 日

改正 平成 22 年 2 月 26 日

(2) 宮城県NIE推進委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県NIE推進委員会と称する。

(目的)

- 第2条 本会は、宮城県NIE委員会会則の第2条(目的)を達成するために、次のことがらを行う。
 - ①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究
 - ②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成

(研究)

- 第3条 本会は前条の目的を達成するために、次のことがらについて協議し、研究する。
 - ①NIE研究活動の推進
 - ②研修会の開催、研究成果の公開及びその表彰
 - ③新聞についての諸調査
 - ④研究会誌の編集と発行
 - ⑤その他の会の目的を達成するために必要なことがら

(組織)

- 第4条 1 本会は、NIEに関心を持ち、加入を希望する教育関係者等で組織する。
 - 2 本会の構成は次の通りとする。

委員長1名、副委員長、運営委員、専門委員、委員、事務局

3 委員長、副委員長を役員とする。

(任期)

第5条 役員、運営委員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

(委員長)

- 第6条 1 委員長は別表に基づき、副委員長が輪番でその任にあたる。
 - 2 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。

(副委員長)

第7条 1 副委員長は、次に掲げるものとする。

宮城県連合小学校特別活動研究会長、同中学校特別活動研究会長、同小学校生活・総合研究会長、 仙台市中学校総合的な学習研究会長、宮城県連合小学校国語研究会長、同中学校国語研究会長、 仙台市中学校国語研究会長、本会小学校部会長、同中学校部会長、同高等学校部会長

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその会務を代行する。

(運営委員)

- 第8条 1 運営委員は、会員の互選により定める。
 - 2 運営委員は、研究活動の運営及び推進を主導する

(専門委員)

- 第9条 1 専門委員は、会員の互選により定める。
 - 2 専門委員は、それぞれの所属する研究部門において実践にあたる。

(会議)

第10条 本会の会議は、委員長が招集し、主宰する

(提携する他の機関)

第11条 本会の目的を達成するために、宮城県 NIE 委員会と提携する。

(庶務)

第12条 本会の庶務は、宮城県 NIE 委員会事務局が行う。

(補則)

- 第13条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。
- 付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成 5年 6月 25日

改正 平成 16 年 2 月 27 日

改正 平成 20 年 1 月 16 日

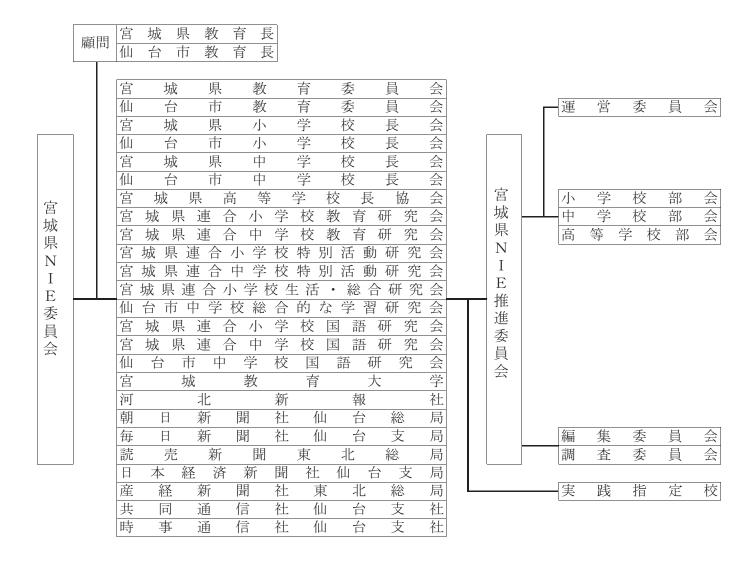
改正 平成 23 年 2 月 25 日

改正 平成24年6月5日

改正 平成31年2月13日

- ◆内規 *追加
 - 1 宮城県NIE実践指定校は、教員1名以上が本会に加入し、運営委員を務める。

3 宮城県NIE委員会 及び 宮城県NIE推進委員会の構成



令和2年度宮城県NIE委員会役員

〈敬称略〉

〈蚁孙	哈)												
役 職		氏	名		所 属 役 職	役	職		氏	名		所 属 役 職	
顧問	伊	東	昭	代	宮城県教育委員会教育長	委	員	門	脇	恒	明	宮城県連合小学校特別活動研究会長(連坊小路小校長)	
顧問	佐々	木		洋	仙台市教育委員会教育長	委	員	田	中	元	昭	宮城県連合中学校特別活動研究会長 (中山中校長)	
会 長	中	里		宙	舍	宮城県中学校長会長	委	員	森			直	宮城県連合小学校生活・総合研究会長 (寺岡小校長)
五以	Т	主.		兄	(宮城県連合中学校国語研究会長・大河原中校長)	委	員	菊	池	浩	美	仙台市中学校総合的な学習研究会長(生出中校長)	
副会長	佐々	木	克	敬	宮城県高等学校長協会長(仙台第三高校長)	委	員	小	石	俊	聡	宮城県連合小学校国語研究会長(仙台・八幡小校長)	
副会長	佐	藤	正	幸	仙台市中学校長会長(五橋中校長)	委	員	新	沼	健	弘	仙台市中学校国語研究会長(西山中校長)	
副会長	小	野	聡	子	宮城県小学校長会長(名取・増田小校長)	委	員	児	玉		忠	宮城教育大学(教授)	
副会長	花	渕	浩	司	仙台市小学校長会長 (木町通小校長)	委	員	矢	部	丈	彦	朝日新聞社 仙台総局長	
副会長	古	田	耕	_	河北新報社 防災・教育室長	委	員	石	丸		整	毎日新聞社 仙台支局長	
委 員	遠	藤		浩	宮城県教育庁 参事兼高校教育課長	委	員	池	辺	英	俊	読売新聞 東北総局長	
委 員	千	葉	睦	子	宮城県教育庁 義務教育課長	委	員	和	佐	徹	哉	日本経済新聞社 仙台支局長	
委 員	本	郷	栄	治	仙台市教育局 教育指導課長	委	員	廣	瀬	典	孝	産経新聞社 東北総局長	
委 員	鈴	木		修	宮城県連合小学校教育研究会長 (栗駒南小校長)	委	員	石	亀	昌	郎	共同通信社 仙台支社長	
委 員	菅	原	通	英	宮城県連合中学校教育研究会長(志波姫中校長)	委員	監事	藤	野	清	光	時事通信社 仙台支社長	

令和2年度教育委員会担当者

(勘称略)

(0) (1) (1)	1117				
宮城県	上	袁	知	明	宮城県教育庁高校教育課主幹
宮城県	稲	辺	正	浩	宮城県教育庁義務教育課課長補佐
仙台市	遠	藤		滋	仙台市教育局教育指導課指導主事

令和2年度 宮城県NIE推進委員会 運営委員会

〈敬称略〉					
役 職		氏	名		学校名(職名)・所属
推進委員長・中部会長	田	中	元	昭	仙台市立中山中学校(校長)
副委員長	門	脇	恒		仙台市立連坊小路小学校(校長)
副委員長	森	/4/4/3	<u> </u>		仙台市立寺岡小学校(校長)
副委員長	小	石	俊		仙台市立八幡小学校(校長)
副委員長・中副部会長	菊	池	浩		仙台市立生出中学校(校長)
副委員長・中副部会長	新	沼	健	- 弘	仙台市立西山中学校(校長)
			煡		
副委員長・小部会長・運委	阿	部	2/5	謙	仙台市立岡田小学校(校長)
小副部会長・運委	小里		治		仙台市立南材木町小学校(校長)
小副部会長・運委	木	越	研	可	仙台市立東六番丁小学校(校長)
小副部会長・運委	伊	藤	公	_	仙台市立幸町南小学校(校長)
運委・実践指定校	吉	畄	健		仙台市立東仙台小学校
運委・実践指定校	佐	藤	由	依	仙台市立長命ケ丘小学校
運委・実践指定校	佐	藤	慶	_	仙台市立泉松陵小学校
運委·実践指定校	相	澤	洋	之	石巻市立湊小学校
運委·実践指定校	佐	藤			松島町立松島第二小学校(校長)
運委・実践指定校・編集委員	秋	場	文	車	松島町立松島第二小学校
運委	Ш	本			仙台市立片平丁小学校
運委	安	積	章	立	仙台市立中田小学校
運委・編集委員	青		平		
		木	瑞		仙台市立高砂小学校
運委	松	本			仙台市立鹿野小学校
運委	石	井			仙台市立八木山小学校
運委	行		忠		仙台市立袋原小学校
運委・会計	大	友	浩		仙台市立袋原小学校
運委	千	葉			仙台市立七北田小学校
運委	Щ	内	崇		仙台市立館小学校
運委	千	葉		修	大崎市立三本木小学校
運委	松	永	秀	子	角田市立角田小学校
運委	門	井	菜酒	丰子	柴田町立柴田小学校
運委	大	場	陽		多賀城市立山王小学校(教頭)
運委	鈴	木	1224	誠	多賀城市立山王小学校
運委	小	Д	順	H/9/4	登米市立北方小学校
運委	加		徳		登米市立西郷小学校(教頭)
運委	-	 塚	理	恵	
運委	<u></u>				南三陸町立戸倉小学校
	武士	川	知		
運委	大	澤	寛		聖ウルスラ学院英智小・中学校
運委・会計	菅	原	久		仙台市立折立中学校
運委	木	下	晴		仙台市立高森中学校
運委・実践指定校	齋	藤	美		大崎市立岩出山中学校
運委・実践指定校	吉	田	啓		角田市立角田中学校
運委	菅	原	哲		仙台市立三条中学校(校長)
運委・編集委員	進	藤	千		仙台市立長町中学校
運委	工	藤			仙台市立七郷中学校(校長)
運委	須	藤	浩	司	仙台市立七郷中学校
運委	\equiv	塚		靖	仙台市立田子中学校(校長)
運委	清	野	和		仙台市立住吉台中学校
運委	相	澤	和		仙台市立柳生中学校
運委	庄	司			大崎市立古川北中学校
運委	Ш	家	優	子	登米市立豊里中学校
運委・編集委員	丸	<u>~</u> 山	10K	仁	宮城学院中学校(教務部長)
副委員長・高部会長					
・運委・実践指定校	鈴	木	理	恵	仙台城南高等学校
運委・会計	大	槻	欣	史	宮城県仙台二華高等学校
運委・実践指定校	佐人		貴	芳	宮城県泉高等学校
運委・実践指定校	小	林	只		宮城県名取高等学校
運委・実践指定校			11.44-		
	佐内	藤	雅		宮城県宮城広瀬高等学校
運委・実践指定校	内土	田	H		宮城県多賀城高等学校
運委・編集委員	幸	野	久		宮城県多賀城高等学校
運委	高	瀬_	琢		宮城県気仙沼高等学校(教頭)
運委	平	居	高	志	宮城県塩釜高等学校
運委	萱	沼	俊	_	宮城県白石工業高等学校
運委	木	村		誠	宮城県仙台南高等学校
運委	三	嶋	廣	人	宮城県宮城第一高等学校
運委	榖	田	長	彦	宮城県宮城広瀬高等学校
運委	浅	水	啓-		宮城県涌谷高等学校 (教頭)
運委	柴	田田	降		
			性	<u></u>	東北学院高等学校 教育研究部 (部長)
運委	加	藤			東北学院高等学校
運委	坂	本		謙	宮城県図書館 資料奉仕部(主幹)
運委	斎	田	淳	_	青葉区中央市民センター (主査兼社会教育主事)
					i .

NIEアドバイザー 〈敬称略〉

	氏	名		学校名(職名)・所属
阳	部			
菅	原	久	美	仙台市立折立中学校
木	下	晴		仙台市立高森中学校
齋	藤	美		大崎市立岩出山中学校
大	槻	欣		
坂	本			宮城県図書館 資料奉仕部(主幹)
中	辻	正	樹	福室市民センター所長・児童館長

宮城県NIE事務局

_		•		300 1 - 0
	氏	名		所 属 役 職
古	田	耕	_	河北新報社防災・教育室長
安	野	賢	吾	河北新報社防災・教育室部長
須	藤	宣	毅	河北新報社防災・教育室部次長
渡	辺	ゆ	き	河北新報社防災・教育室主任
末	永	智	弘	河北新報社防災・教育室主任
丹	野	綾	子	河北新報社防災・教育室
畠	Щ	厚	子	宮城県NIE委員会コーディネーター
伊	藤	純	子	河北新報社防災・教育室
武	藤	浩	子	河北新報社防災・教育室

IX 宮城県NIEの歩み

<u>IX</u>	<u> 呂 坝</u>			<u>Eの歩み</u>							
L	組織	推進委		協 力 校 実 践 校		研究グループ 部 会 研 究	授 業 実践発		研	修 会	集録・紀要・他
	県NIE		\equiv	○芦口小		○芦口小					○県研究集録1号
平	委員会・	中	17	○中野中		○中・研究グループ					
成元	推進委員					○小・研究グループ					
年	会設立事										
	務局河北	計	26								
77	33379113716		\dashv	○芦口小		○芦口小	○芦口小 H2・	10			○県研究集録2号
平 成 2				○中野中		○中・研究グループ	○八幡小 H2・				○紀要 芦口小
年度			39	OT#IT		○小・研究グループ	○中野中 H3・				八幡小
_	立松加入			O.F.III.d.			○中野中 нз・	1			
平	高校部会			○長町中		○中・研究グループ					○県研究集録3号
3	発足		26			○小・研究グループ					○実践実例集
年度		高	9								小グループ1号
		計	59								
平		小	27	○長町中		○中・研究グループ	○長町中 H5・	1	○小学校NIE	研修会	○県研究集録4号
成 4		中	22	○旭丘小		○小・研究グループ					○実践実例集
年度		高	10				○旭丘小 H5・	1			小グループ2号
		計	59								
	朝日・読売	小	56	○長町中		○中・研究グループ	○八軒中 H5・	10	〇小・中学校NI	IE研修会	○県研究集録5号
平	毎日・共同	中	30	○旭丘小		○小・研究グループ	○長町中 H6・	1			○実践実例集
成 5 年	時事の各社	高	16	○折立小			○旭丘小 H6・	2			小グループ3号
度	加盟			○八軒中							
		計 1	102								
	日経・産組	小	68	○折立小		○中・研究グループ	○八軒中 H6・	10	○小・中・高校	KNIE研修会	○県研究集録6号
平	の各社加盟	中	49	〇上杉山通小	(パイロット校)	○小・研究グループ					○紀要 折立小
成 6		高	18	○八軒中			○泉高 H6・	11			○実践実例集
年度		他	1	○向陽台中	(パイロット校)						小グループ4号 中N I E部1号
		計 1	136	○泉高	(パイロット校)		○折立小 H7・	2			○みやぎNIEだより1.2.3号
			\dashv	○上杉山通小	(パイロット校)	○小・中・高部会の	○向陽台中	H7 • 12	○宮城県NIE	研修会	○県研究集録7号
				○向陽台中	(パイロット校)	研究活動			○地区研修会	(古川)	〇紀要 上杉山通小
平成				○袋原小	(1) 1 2		〇上杉山通小	H8 • 1	○地区研修会		○実践実例集
7 年				○茂庭台中			01177421		O Pale Missa	(2) (0)	小学校部会5号
度		IE.		○泉高	(パイロット校)						中学校部会12号
		∌l. ₁			(/· 1#//1X/						
		計 1	\dashv	○代百士	O PANDA 1	○小・中・高部会の	○茂庭台中	IIO . 10	○信枠用>1.1.5	ではなら	○みやぎNIEだより4.5号○県研究集録8号
				○袋原小	○上杉山通小			H8 • 10	○宮城県NIE		
平成				○将監小	〇古川一小	研究活動	○上杉山通小		O District	(仙台市)	○紀要 袋原小
8年度				〇茂庭台中	〇生出中	(授業研究)	○桜丘中	H8 • 11	○地区研修会		○実践実例集 小学校部会6号
度				○宮中	○仙台二高		○将監小	H9 · 1	○地区研修会	(石巻・住吉小)	○みやぎNIEだより
_	ļ		-	○東北学院高			○袋原小	H9 • 2			6. 7. 8. 9号
		小 1	122	○将監小	〇古川一小	○小・中・高部会の	○将監小	Н9•11	○宮城県NIE	C研修会	○県研究集録9号
平成		中	60	○桂小	○大鷹沢小	研究活動				(常盤木学園高)	○紀要 将監小
9年		高	28	〇生出中	○宮中		〇桂小	H10 • 2	○地区研修会	(大鷹沢小)	〇みやぎN I Eだより
度		他	7	○蒲町中	○仙台二高				○地区研修会	(石巻中)	10. 11. 12. 13号
L		計 2	217	○東北学院高					○中・高部会研	千修会(田子中)	
		小 1	132	〇桂小	○大鷹沢小	○小・中・高部会の	〇女川四小	H10 • 5	○第3回N I E	全国大会	○県研究集録10号
		中	61	〇女川四小	○蒲町中	研究活動	(授業公開)			(メルハ゜ルクSENDAI)	ON I E実践事例集
平		高	27	〇七郷中	○金ヶ瀬中		〇桂小	H10 • 11	○地区研修会	(稲井小)	「やってみよう!NIE」
成10		他	7	○塩竃二中	○仙台南高		(授業公開)		○中・高部会研	肝修会 (七郷中)	小学校部会
年度		計 2	227	○常盤木学園高			○常盤木学園高	前 H10・11	○小部会研修会	(桂小)	○みやぎNIEだより
							○大鷹沢小	H11 • 1			14. 15. 16. 17号
							(授業公開)				
Щ	1					I .			L		

	組織		委員 (人)	協力校実践校		研究グループ 部 会 研 究	授業 2		研 修 会	集録・紀要・他
				○女川四小	○東長町小	○小・中・高部会の	○常盤木学園高	H11 • 11	○宮城県NIE研修会	○県研究集録11号
		中	60	○しらかし台小	○七郷中	研究活動	(授業公開)		○小部会プロジェクト提案	
		高	28	○金ヶ瀬中	○塩竃二中	(実践発表・授業	○しらかし台小	H11 • 11	○地区研修会(蛇田小)	○みやぎN I Eだより
平成		他	10	〇山田中	○仙台南高	研究・プロジェ	(授業公開)		○地区研修会(金ヶ瀬中)	18・19・20・21号
年		計	230	○常盤木学園高		クトチームの	○女川四小H11・	11	○中部会授業研究会(七郷中)	
度						研究)	(授業公開)		○小部会実践発表会(東長町小)	
							〇七郷中 H1	1 • 12 • 1		
							(授業公開)			
		小	128	○東長町小	○大沢小	○小・中・高部会の	○しらかし台小	H12 • 11	〇小部会研修会 (大沢小)	○県研究集録12号
		中	60	○しらかし台小	○蛇田小	研究活動	(授業公開)		(データベース活用)	
平成		高	31	〇山田中	○秋保中	(実践発表・授業	○秋保中	H12 • 11	○宮城県NIE研修会	○みやぎN I Eだより
12 年 度		他	13	○明成高	○仙台向山高	研究・プロジェ	(授業公開)		(八木山小)	22・23・24・25号
汉		計	232	○蔵王高		クトチームの	○東長町小	H13 • 11	○地区研修会(しらかし台小)	
						研究)	(授業公開)		〇地区研修会(蛇田小)	
		小	128	〇大沢小	○蛇田小	〇小・中・高部会の	○仙台向山高	H13 • 10	○宮城県N I E研修会	○県研究集録13号
平成		中	61	○月見ケ丘小	○秋保中	研究活動	(授業公開)		(明成高)	○みやぎN I Eだより
13年		高	34	○塩竃一中	○明成高				〇地区研修会 (蛇田小)	26・27・28・29号
度		他	16	○仙台向山高	○蔵王高		○明成高	H13 • 12	○地区研修会(塩竃一中)	
		計	239	○仙台図南萩陵高			(授業公開)			
		小	129	○月見ケ丘小	○逢隈小	○小・中・高部会の			○宮城県N I E研修会	○県研究集録14号
平		中	62	○小野小	○塩竃一中	研究活動			(河北新報社) H14・11・7	
成 14		高	34	○将監中	○筆甫中	「NIEおしゃべり広場」			〇地区研修会(大河原)	○みやぎN I Eだより
年度		他	14	○東北朝鮮学校	○女川高	「インターネット活用」			○地区研修会(石巻古川)	30・31・32・33号
		計	239	○仙台図南萩陵高		中・高部会「公開講演会」				
						(H14 · 12 · 3)				
		小	129	○小野小	○逢隈小	○小・中・高部会の			○宮城県NIE研究大会	○県研究集録15号
平		中	53	○嵯峨立小	○将監中	研究活動			(青葉体育館) H15・8・20	
成 15		高	34	○筆甫中	○五橋中				○地区研修会(逢隈小)	○みやぎNIEだより
年度		他	14	○東北朝鮮学校	○女川高				○地区研修会	34・35・36・37号
		計	230	○仙台白百合学					(鳴瀬町中央公民館)	
_				園中・高						
				○嵯峨立小	○五橋中	○小・中・高部会特	○五橋中		○宮城県NIE研究大会	○県研究集録16号
平		中		〇仙台白百合学	○越河小	別研究部会の研究		(授業公開)	H16・11・2 (五橋中)	
成 16		高	31	園中・高	0.45	活動		H16 • 11 • 2	○地区研修会(白石市中央公	○みやぎNIEだより
年度		他		○広渕小	○幸町中				民館)	38・39・40・41号
		計	223	○田尻中	○仙台商高				○地区研修会(田尻中)	
_		.ı	100	〇米山高	○ t+3/41.1:	〇小,由,京如今社	○加去点えへ坐		○壹·杜圓 N J P 研究上へ	○旧巫宏生紀17日
				○越河小	○広渕小	○小・中・高部会特	○仙台白百合学 園中 - 章		○宮城県N I E研究大会	○県研究集録17号
平		中		○幸町中	○田尻中	別研究部会の研究 活動	園中・高	(極業小朋)	H17・11・9 (仙女立古今学園)	○ひおおNICだトル
成 17 年		高他		○仙台商高○栗生小	○米山高○金ヶ瀬小	○小学校部会授業		(授業公開)	(仙台白百合学園) 〇地区研修会(田尻中)	○みやぎNIEだより 42・43・44・45号
度				〇西山中	○ 金ヶ瀬小 ○ 大河原中	□ 小字校部会授業 研究 H18・2・10		11 • 9	○地区研修会(田凡中) ○地区研修会(大河原中)	12 10 11 10 7
		PΙ	411	○泉館山高	○東北朝鮮学校	(鹿野小)			○····································	
		小	195	○ 栗生小	○ 衆北朝鮮子校 ○ 金ヶ瀬小	○小・中・高部会特	○南中山中		○宮城県NIE研究大会	○県研究集録18号
		中		〇西山中	○ 士 / 楓 / · · · · · · · · · · · · · · · · ·	別研究部会の研究	(授業公開)		H18·11·9	C Minal Manager of A
平成		高		○泉館山高	○本吉・大谷小	活動		H18 • 11 • 9		○みやぎNIEだより
18 年		他		○東北朝鮮学校		○小学校部会授業		-1 0	〇地区研修会(大谷中)	46·47·48·49号
度		· ·		○仙台・中田中		研究 H18・12・6			〇地区研修会(大河原中)	
		"		〇白石南中	○唐桑中	(原町小)				
						(///-1-17)				

	組織		委員 (人)	協力校 実践校		研究グループ 部 会 研 究		美 公 開 発表会	研修会	集録・紀要・他
		小	124	○本吉・大谷小	〇南中山中	○小・中・高部会特	○黒松小		○宮城県N I E研究大会	○県研究集録19号
		中	52	○仙台・中田中	○白石南中	別研究部会の研究		(授業公開)	H19 • 10 • 3	
平		高	27	〇大沢中	○唐桑中	活動		H19 · 10 · 3	(仙台市立黒松小)	○みやぎNIEだより
成 19		他	10	○鹿野小	○涌谷一小				〇地区研修会(大谷中)	50・51・52・53号
年度		計	213	○鶴谷中	○五城中				〇地区研修会(涌谷第一小)	
				○尚絅学院						
				女子中・高						
		小	126	○鹿野小	○涌谷一小	○小・中・高部会特	〇大沢中学校	Ź.	○宮城県NIE研究大会	○県研究集録20号
		中	53	○鶴谷中	○五城中	別研究部会の研究	(授業公開)		H20 • 11 • 17	
平		高	28	○尚絅学院中・高	○横山小	活動		H20 • 11 • 17	(仙台市立大沢中)	○みやぎN I Eだより
成 20		他	8	○亘理小	○成田中		○涌谷第一小		○地区研修会(富谷成田中)	54・55・56・57号
年度		計	215	○生出中	○向陽台中			(授業公開)	○地区研修会(亘理図書館)	
				○常盤木学園高	○大沢中			H21 • 1 • 22		
					(奨励校)					
		小	140	○横山小	○亘理小	○小・中・高部会特	○榴岡小		○宮城県NIE研究大会	○県研究集録21号
		中	54	○成田中	○生出中	別研究部会の研究		(授業公開)	H21. 11. 25	
平		高	23	○向陽台中	○常盤木学園高	活動		H21. 11. 25	(仙台市立榴岡小)	○みやぎNIEだより
成 21		他	10	○榴岡小	○館小		○旭丘小		○地区研修会(石巻河南東中)	58・59・60・61号
年度		計	227	○吉田小	○河南東中			(授業公開)	〇小部会研究交流会(旭丘小)	
				○川崎中	○涌谷一小			H21. 12. 10		
					(奨励校)					
	宮教大加盟	小	121	○榴岡小	○館小	○小・中・高部会	南小泉中		○宮城県NIE研究大会	○県研究集録22号
		中	50	○吉田小	○河南東中	研究活動		(授業公開)	H22. 11. 11	
平成	高校長協会	高	18	○川崎中	〇古川第三小			H22. 11. 11	(仙台市若林区文化センター)	○みやぎN I Eだより
22 年 度	加盟	大	4	○塩竈第三小	○大河原小		蒲町小		○地区研修会(塩釜第三小)	62・63・64・65・66号
及		他	12	○高森中	○横山小			(授業公開)	〇小部会研究交流会 (蒲町小)	
		計	205	○仙台第一高	(奨励校)			H22. 11. 26		
	小学校国記	小	120	〇古川第三小	○大河原小	○小・中・高部会	○榴岡小	(授業公開)	○宮城県N I E研究大会	○県研究集録23号
	研究会加盟	中	50	○塩竈第三小	○高森中	研究活動		H23. 10. 18	H23. 12. 7	
_		高	17	○仙台第一高	○小牛田小		○東宮城野小	、(授業公開)	(仙台市立東宮城野小)	○みやぎN I Eだより
平 成 23		大	4	○東宮城野小	〇台原中			H23.12.7		67・68・69・70号
年度		他	14	〇八乙女中	○石巻北高		〇大河原小	(授業公開)	○宮城県NIE地区研修会	
		計	205	○東北学院	○榴岡小			H24.1.24	H23. 8. 17	
				榴ヶ岡高	(奨励校)		〇古川第三小	、(授業公開)	(河北新報社)	
				○泉高				H24. 2. 23		
	宮城県中省	小	114	○東宮城野小	○小牛田小	○小・中・高部会	〇八乙女中	(授業公開)	○宮城県NIE研究大会	○東北・北海道地区
	校国語研9	中	51	○台原中	〇八乙女中	研究活動		H24.11.9	H24. 11. 9	NIEアドバイザー会議
平	会加盟	高	16	○東北学院	○石巻北高		○小牛田小	(授業公開)	(仙台市立八乙女中)	H24. 9. 22
成 24		大	4	榴ヶ岡高	○泉高			H24. 11. 28	〇地区研修会(大和吉岡小)	(河北新報社)
年度		他	15	〇北中山小	○吉岡小		〇北六番丁小	、(授業公開)	〇小部会研究交流会(北六小)	
		計	200	○東郷小	〇古川東中			H25. 1. 16	〇公開実践発表会(協力校)	○県研究集録24号
				○水産高	○大河原小				(河北新報社)	○みやぎNIEだより
					(奨励校)					71・72・73・74号
		小	111	〇北中山小	○吉岡小	○小・中・高部会	〇八乙女中	(自主公開)	○宮城県NIE研究大会	○東北・北海道地区
		中	46	○東郷小	○古川東中	研究活動		H25. 11. 8		NIEアドバイザー会議
平		高	17	○宮城水産高	○荒町小		○小牛田小		(仙台市立北中山小)	
平 成 25 年		大		〇古川二小	○岩沼小				○地区研修会(吉野作造記念館)	
年度		他		○聖ウルスラ			○東郷小(自			○県研究集録25号
		計	191	学院英智小中				2014/2/13	○公開実践発表会	〇みやぎNIEだより
				〇八乙女中(奨励	校)				H26. 2. 20	75・76・77・78号
				〇小牛田小(奨励	校)				(河北新報社)	

	組織	推進	委員	協力校実践校		研究グループ 部 会 研 究	授業公開 実践発表会	研 修 会	集録・紀要・他
				○荒町小	○古川二小	○小・中・高部会	○富沢中 (授業公開)	○宮城県NIE研究大会	○東北・北海道地区
		中	49	○岩沼小	○富沢中	研究活動	H26. 11. 18	H26. 11. 18	NIEアドバイザー会議
		高	19	○聖ウルスラ	○東北学院高			(仙台市立富沢中)	H26. 9. 20
平成		大	5	学院英智小中	○松ヶ浜小	※小学校部会:		○地区研修会(七ヶ浜国際村)	
26 年		他	14	〇田子小	○蔵王:宮中	5年国語科の		H26. 8. 18	○実践報告集26号
度		計	202	○仙台青陵中	○多賀城高	提案授業実践		()	○みやぎNIEだより
				○吉岡小(奨励村	交)			○小部会提案授業①(泉松陵小)	79・80・81・82号
				○東郷小(奨励村	交)			〇小部会提案授業②(七北田小)	〇日本NIE学会(東北福祉大)
		小	106	○松ヶ浜小	○田子小	○小・中・高部会	〇田子小(授業公開)	○宮城県NIE研究大会	○東北・北海道地区
		中	46	〇蔵王:宮中	○多賀城高	研究活動		H27. 12. 2	NIEアドバイザー会議
		高	18	○仙台青陵中	○塩竈一小	· 小学校部会	○5年国語科提案授業の	(仙台市立田子小)	H27. 10. 3
平成		大	5	〇上沼小	○中野栄小	5年国語科の提案授業実践	公開 (運営委員在籍校)	〇地区研修会(塩釜第一小)	(北海道新聞社)
27 年		他	11	〇七北田小	○利府西中			○小部会提案授業公開	○実践報告集27号
度		計	186	○東北学院高	○宮城学院中	高校部会	○仙台青陵中等教育学校の	※14校で実施	〇みやぎNIEだより
				(奨励校)		新聞社見学 英語科授業実践	実践発表会	○高部会実践発表会	83・84・85・86号
						講演会の実施			
		小	98	○塩竈一小	○上沼小	○小・中・高部会	○宮城学院中の実践報告	○宮城県NIE研究大会	○東北・北海道地区
		中	41	○中野栄小	〇七北田小	研究活動		H28. 11. 9	NIEアドバイザー会議
平成		高	20	○利府西中	○宮城学院中	· 小学校部会	○登米市立上沼小学校の	(宮城学院中)	(福島民報社) 2016/9/24
28 年		大	5	○船岡小	○柴田小	5年国語科の提案授業実践	授業公開 (5年)	〇地区研修会(柴田小)	○実践報告集28号
度		他	6	○気仙沼高	○聖和学園高	高校部会	○仙台城南高のICT公開	〇七北田小提案授業	○みやぎNIEだより
		計	170	○仙台城南高		新聞社見学 (河北新報社)	(NIEとの関連)	○上沼小提案授業	87・88・89・90号
		小	87	〇七北田小	○船岡小	○小・中・高部会研究活動	○仙台城南	○宮城県NIE研究大会	○東北・北海道地区
		中	39	○宮城学院中	○柴田小	· 小学校部会	高等学校	H29. 11. 8	NIEアドバイザー会議
平		高	19	○気仙沼高	○聖和学園高	「新聞読み比べ」の単元で	(授業公開)	(仙台城南高等学校)	H29. 9. 30
成 29		大	5	○仙台城南高	〇八木山小	1人1紙を持たせ授業実践	○仙台城南高の		(山形新聞社)
年度		他	11	○豊里小・中	○仙台三桜高	(提供3658部)	ICT公開	○地区研修会(豊里小・中))	○実践報告集29号
		計	161			· 高校部会	(NIEとの関連)		〇みやぎNIEだより
						講演会 (河北新報社)			91・92・93・94号
		小	87	〇柴田小	○豊里小	○小・中・高部会研究活動	○宮城県仙台	○宮城県NIE研究大会	○実践報告集30号
		中	39	○気仙沼高	〇八木山小	· 小学校部会	三桜高等学校	Н30. 11. 7	
平		高	20	○仙台城南高	○館小	「新聞読み比べ」の単元で	(授業公開)	(宮城県仙台三桜高等学校)	〇みやぎNIEだより
成 30 年		大	5	○豊里中	○戸倉小	1人1紙を持たせ授業実践			95・96・97号
度		他	11	○仙台三桜高	○宮城広瀬高	(提供3684部)		〇地区研修会(戸倉小)	
		計	162	○聖ウルスラ		· 高校部会			
				学院英智小中		実践報告講演会(河北新報社)			
		小	76	○泉松陵小	○戸倉小	○小・中・高部会研究活動	○県大会における実践発表	○宮城県NIE研究大会(河北新報社	実践報告書31号
		中	36	○長命ケ丘小	○館小	· 小学校部会	館小・岩出山中・広瀬高	R1. 12. 20	
		高	25	○聖ウルスラ学	5○岩出山中	「新聞読み比べ」の単元で	○パネルディスカッション		○みやぎNIEだより
令和		大	5	英智小・中学校	○宮城広瀬高	1人1紙を持たせ授業実践	○講演会(東北大加齢医	〇地区研修会(岩出山中)	98・99・100号
元年		他	13	○仙台三桜高	○多賀城高	・中学校部会	学研究所) 瀧靖之教授		
度		計	162	○仙台城南高	○名取高	研修会 (七郷中)	○30周年記念座談会		
						・高校部会			
						講演会・研修会			
		小中		○泉松陵小 ○長命ケ丘小	○湊小○松島第二小	○小・中・高部会研究活動・小学校部会	○県研究大会 (オンラインによる)	○宮城県NIE研究大会 R2. 12. 18	○宮城NIEだよりは廃止
令		高十	26	○岩出山中	○東仙台小		児童・生徒による意見交換会	1	
和 2		大他		○名取高○泉高	○角田中○多賀城高	1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会(未定)	湊小・泉松陵小・岩出山中 仙台城南高・宮城広瀬高	〇NIE研修会(泉松陵小)	
年度		計	144	○仙台城南高 ○宮城広瀬高	○名取高 (独自校)	・高校部会 県研究大会共催	多賀城高・泉高		
				AMPORTE	VAC 10/	21227 S 204 S 2 Hr			

X 編集後記

「宮城県NIE委員会実践報告書 第32号」をお届けいたします。ご多用の中、原稿執筆をお引き受けいただきました各学校の先生方、関係の皆様に心から感謝申し上げます。

今年度は、新型コロナウイルス感染症が世界的な規模で流行し、学校現場でも3か月にわたって全面休校が実施されました。その後もその予防措置として、学校生活や家庭生活でもこれまでに経験したことのない行事の変更や対応策を迫られることになったのです。このような大変困難な状況の中で、12の実践指定校の教職員の皆様は工夫をして、ソーシャルディスタンス等も確保しながら活動し、学習成果もしっかりと高める数々の実践を進められました。

また今年度の「宮城県NIE研究大会」は、オンラインでの開催となり、県内7校の学校をネットでつないで取組の紹介と意見交換が行われました。GIGAスクール構想の整備でインフラが整うことと、併せて学習指導要領に、新聞の活用が明確に位置づけられ「情報活用能力」の育成を進めて行く根拠が示されていることで、「主体的・対話的で深い学び」にも繋がっていくことが期待されます。各学校からの発表には、「SDGs」「ヤングケアラー」など、現代社会の中で、世界中の大人も子供も考えていかなければならない課題への「自分たちなり」の捉え方と考えが醸成されていました。

「NIE全国大会報告」や「研修会報告」では、 全国の実践報告や新聞編集を行っている講師の 方の貴重な意見などが紹介されています。

小学校部会の「新聞を無償で教室に届ける事業」については、6校に453部(6紙から2紙を選択)という取組が報告がされています。

これからも「教育に新聞を」という考えのもと、 多様で効果的な活用はどうあったらよいのでしょうか。いろいろ学校の実態や世界の情勢も考慮 していかなくてはなりません。

幸い皆様のお手元にある玉稿は、各学校実践の 力強いナビゲーターになるものと確信しており ます。今後ともNIE活動が深められ、発展する ことを祈念し編集後記といたします。

(仙台市立高砂小学校 青木 茂)

<編集委員>

委員長 青木 茂(仙台市立高砂小学校教諭)

委員 秋場 文東(松島町立松島第二小学校教諭)

進藤 千枝(仙台市立長町中学校教諭)

丸山 仁(宮城学院中学校教頭)

幸野 久嗣(宮城県多賀城高等学校教諭)

<事務局> 河北新報社防災・教育室内

宮城県 NIE 委員会副会長

古田 耕一

(河北新報社編集局次長兼防災・教育室長)

事務局長 安野 賢吾

(河北新報社防災・教育室部長)

事務局 須藤 宜毅

(河北新報社防災・教育室次長)

渡辺 ゆき

(河北新報社防災・教育室主任)

末永 智弘

(河北新報社防災・教育室主任)

丹野 綾子

(河北新報社防災・教育室)

伊藤 純子

(河北新報社防災・教育室)

武藤 浩子

(河北新報社防災・教育室)

宮城県 NIE 委員会コーディネーター 畠山 厚子

NIE実践報告書<第32号>

令和3年2月発行

編集 宮城県NIE推進委員会発行 宮城県NIE委員会事務局宮城県NIE委員会事務局

仙台市青葉区五橋一丁目 2-28

(河北新報社内)

TEL. 022-211-1331 FAX. 022-211-1339

印刷 東北紙工株式会社 仙台市若林区中倉1-13-1

TEL. 022-231-2141